

# 緑 岩 古 墳

—三次地区工業団地第2期造成工事に  
伴う埋蔵文化財の発掘調査—

1983

広島県教育委員会



①綠岩古墳 ②高峰跡  
(写真提供広島県企業局)



綠岩古墳出土馬形埴輪



綠岩古墳出土埴輪

## 序 文

広島県は、三次市を中心とする備北地域の工業開発促進をめざして、昭和55年に三次地区工業団地を造成しました。この造成工事に伴う発掘調査では、史跡矢谷古墳をはじめとして大規模な遺跡の発見があつたこと、当地域の古代史に新たな1頁を書き加える多大な成果があつたことは記憶に新しいところです。

ところで広島県は、三次地区工業団地が備北地域の産業振興に重大な役割を果しつつある実態にかんがみ、その第2期拡張工事を計画しました。広島県教育委員会としては、さきの造成工事と発掘調査の競合による支障という懸念を踏まぬためにも、一步先んじた協議をすすめてまいりました。その結果当該地内で現状保存できない5遺跡について、本年度事前の発掘調査を実施いたしました。

本報告は、この記録をまとめたものであります。この内には多数の埴輪を出土した縄文古墳をはじめ、弥生時代から古墳時代を中心とした多彩な内容を収録いたしております。当地域研究の新たな資料として本県文化の向上発展の一翼にならべく活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査に対し絶大なる御理解と御協力をいただいた広島県企業局、三次市教育委員会をはじめ多くの関係各位に対し深甚の謝意を表する次第であります。

昭和58年3月

広島県教育委員会教育長

田 所 論

## 例　　言

1. 本書は、昭和57年度に実施した県営三次地区工業団地第2期造成事業に係る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は広島県企業局から委託を受けて広島県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は、桑田俊明(Ⅱ, III-5・6, IV, VI-1・3), 鈴治益生(Ⅲ-1~4・6, V-2・3), 片山和哉(V, VII)が分担して行ない、桑田が編集した。
4. 出土遺物の写真は桑田が撮影した。
5. 出土遺物の整理・実測・図面の製図等は桑田が中心となって上記の者があつた。
6. 緑岩古墳出土の貝類は広島大学理学部付属向島臨海実験所所長福素明彦(理学部教授)氏に、出土遺物の石材については三次市文化財保護委員長三浦亮氏にそれぞれ同定をお願いした。
7. 本書に使用した略記号は次のとおりである。

S B = 住居跡, S K = 土塹, S P = ピット, S D = 池, S I = 鋳冶炉,  
S X = その他  
なお、本書では便宜上、長さが1m未溝のものをSP, 1m以上のものをSKとした。
8. 本遺跡群の理解を深めるために、一昨年度刊行された『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』を参照されたい。
9. 本書に掲載した第Ⅱ-1図の地形図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1(三次)を使用した。

## 目 次

I はじめに	(1)
II 遺跡群の位置と歴史的環境	(4)
III 緑岩古墳	(8)
IV 緑岩遺跡	(56)
V 高蜂東遺跡	(81)
VI 高蜂遺跡	(83)
VII 松ヶ迫A地点遺跡	(114)

## 図版目次

- 巻頭図版 1 三次地区工業団地内遺跡群全景（北方上空より）  
2 緑岩古墳出土の馬形埴輪  
3 緑岩古墳出土の埴輪群
- 図版 1—a 造成地内遺跡群遠景（南西より）  
b 緑岩古墳遠景（調査前）
- 図版 2—a 緑岩古墳全景（北より）  
b 緑岩古墳全景（西より）
- 図版 3—a 緑岩古墳主体部全景（西より）  
b 緑岩古墳第1主体部（西より）
- 図版 4—a 緑岩古墳第1主体部（東半部分）  
b 緑岩古墳第2主体部（西より）
- 図版 5—a 緑岩古墳第1主体部の排水溝取付け口付近（北より）  
b 緑岩古墳第1主体部内の出土物状態（南より）
- 図版 6—a 緑岩古墳周溝内遺物出土状態(1)埴輪群B・土器群A（南より）  
b 緑岩古墳周溝内遺物出土状態(2)埴輪群C
- 図版 7—a 緑岩古墳周溝内遺物出土状態(3)馬形埴輪（南より）  
b 緑岩古墳周溝内遺物出土状態(4)土器群A（東より）
- 図版 8—a 緑岩古墳周溝内遺物出土状態(5)土器群B（東より）  
b 緑岩古墳周溝内遺物出土状態(6)土器群C（北より）
- 図版 9—a 緑岩古墳周溝内遺物出土状態(7)土器群D（北より）  
b 緑岩古墳周溝内遺物出土状態(8)土器群D（北より）
- 図版10—a 緑岩遺跡南区遠景（西より）  
b 緑岩遺跡全景（北より）
- 図版11—a 緑岩遺跡南区第1号住居跡全景（北より）  
b 緑岩遺跡南区第1号住居跡内の溝SD1（西より）
- 図版12—a 緑岩遺跡南区第1号住居跡内の遺物出土状態(1)  
b 緑岩遺跡南区第1号住居跡内の遺物出土状態(2)
- 図版13—a 緑岩遺跡南区SK14（北より）  
b 緑岩遺跡南区SK17（北より）
- 図版14—a 緑岩遺跡南区SK20（北より）  
b 緑岩遺跡南区SK24（北より）

- 図版15—a 緑岩遺跡北区遠景（南西より）  
b 緑岩遺跡北区第2号住居跡、第3号住居跡近景（南より）
- 図版16—a 緑岩遺跡北区第2号住居跡全景（北より）  
b 緑岩遺跡北区第2号住居跡内カマド跡（南より）
- 図版17—a 緑岩遺跡北区第3号住居跡全景（東より）  
b 緑岩遺跡北区SK9（北より）
- 図版18—a 緑岩遺跡北区SK1（西より）  
b 緑岩遺跡北区SK10（西より）
- 図版19—a 緑岩遺跡北区SX1（南より）  
b 緑岩遺跡北区SX1集石下の土器群出土状態
- 図版20—a 緑岩遺跡北区SX2（東より）  
b 高峰遺跡南区全景（東より）
- 図版21—a 高峰遺跡南区第1号住居跡全景（北より）  
b 高峰遺跡南区第1号住居跡内のカマド跡煙道部（南より）
- 図版22—a 高峰遺跡南区第2号住居跡全景（東より）  
b 高峰遺跡南区第2号住居跡内のカマド跡付近の土器出土状態（南より）
- 図版23—a 高峰遺跡南区第2号住居跡内のカマド跡（南より）  
b 高峰遺跡南区第3号住居跡全景（西より）
- 図版24—a 高峰遺跡南区第4号住居跡内の遺物出土状態  
b 高峰遺跡南区第4号住居跡完掘後全景（北より）
- 図版25—a 高峰遺跡南区第4号住居跡内の土器出土状態  
b 高峰遺跡南区SK8（南より）
- 図版26—a 高峰遺跡南区SK6（南より）  
b 高峰遺跡北区全景（東より）
- 図版27—a 高峰遺跡北区第5号住居跡内の遺物出土状態（東より）  
b 高峰遺跡北区第5号住居跡完掘後全景（東より）
- 図版28—a 高峰遺跡北区第6号住居跡内の遺物出土状態（北より）  
b 高峰遺跡北区第6号住居跡完掘後全景（北より）
- 図版29—a 高峰遺跡北区第7号住居跡内の遺物出土状態（北より）  
b 高峰遺跡北区第7号住居跡完掘後全景（北より）
- 図版30—a 高峰遺跡北区第7号住居跡内の土器出土状態(1)（西より）  
b 高峰遺跡北区第7号住居跡内の土器出土状態(2)（東より）
- 図版31—a 高峰遺跡北区SP5（西より）  
b 高峰遺跡北区SP2（北より）

- 図版32—a 高峰東遺跡全景（南より）  
b 高峰東遺跡SK2（西より）
- 図版33—a 高峰東遺跡SK3（北より）  
b 松ヶ迫A地点遺跡全景（南より）
- 図版34—a 松ヶ迫A地点遺跡SK1（東より）  
b 松ヶ迫A地点遺跡SK6（南より）
- 図版35 緑岩古墳出土土器(1)
- 図版36 緑岩古墳出土土器(2)
- 図版37 緑岩古墳出土土器・鉄器(3)
- 図版38 緑岩古墳出土埴輪(1)
- 図版39 緑岩古墳出土埴輪(2)
- 図版40 緑岩古墳出土埴輪(3)
- 図版41 緑岩古墳出土埴輪(4)
- 図版42 緑岩古墳出土埴輪(5)
- 図版43—a 緑岩遺跡出土土器  
b 高峰遺跡出土鉄器・石器
- 図版44 高峰遺跡出土土器(1)
- 図版45 高峰遺跡出土土器(2)

## 挿図目次

- 第Ⅰ-1図 三次工業団地第2期建設地区周辺地形図及び  
本遺跡群位置図 (1:3,000) ..... (折込)  
第Ⅱ-1図 本遺跡群周辺の遺跡分布図 (1:50,000) ..... (5)

## 緑岩古墳

- 第Ⅲ-1図 緑岩古墳地形測量図 (1:300) ..... (8)  
第Ⅲ-2図 緑岩古墳墳丘遺存図 (1:100) ..... (折込)  
第Ⅲ-3図 緑岩古墳墳丘断面実測図 (1:100) ..... (10)  
第Ⅲ-4図 緑岩古墳周溝内土器群-D実測図 (1:10) ..... (11)  
第Ⅲ-5図 緑岩古墳周溝内土器群-B実測図 (1:10) ..... (12)  
第Ⅲ-6図 緑岩古墳馬形埴輪出土状況実測図 (1:10) ..... (13)  
第Ⅲ-7図 緑岩古墳第1主体部実測図 (1:30) ..... (折込)  
第Ⅲ-8図 緑岩古墳排水溝実測図 (1:30) ..... (15)  
第Ⅲ-9図 緑岩古墳第2主体部実測図 (1:30) ..... (16)  
第Ⅲ-10図 緑岩古墳土塁実測図 (1:30) ..... (17)  
第Ⅲ-11図 緑岩古墳出土土器実測図 (1) (1:3) ..... (18)  
第Ⅲ-12図 緑岩古墳出土土器実測図 (2) (1:3) ..... (19)  
第Ⅲ-13図 緑岩古墳出土土器実測図 (3) (1:3) ..... (20)  
第Ⅲ-14図 緑岩古墳出土土器実測図 (4) (1:3) ..... (21)  
第Ⅲ-15図 緑岩古墳出土土器実測図 (5) (1:4) ..... (22)  
第Ⅲ-16図 緑岩古墳出土土器実測図 (6) (1:3) ..... (23)  
第Ⅲ-17図 緑岩古墳出土土器実測図 (7) (1:3) ..... (24)  
第Ⅲ-18図 緑岩古墳出土鐵製品実測図 (1:2) ..... (24)  
第Ⅲ-19図 緑岩古墳出土円筒埴輪のタガの基本形態 ..... (25)  
第Ⅲ-20図 緑岩古墳出土埴輪実測図 (1) (1:4) ..... (27)  
第Ⅲ-21図 緑岩古墳出土埴輪実測図 (2) (1:4) ..... (28)  
第Ⅲ-22図 緑岩古墳出土埴輪実測図 (3) (1:4) ..... (29)  
第Ⅲ-23図 緑岩古墳出土埴輪実測図 (4) (1:4) ..... (30)

第III—24図	綠岩古墳出土埴輪実測図(5) (1:3)	(31)
第III—25図	綠岩古墳出土埴輪実測図(6) (1:3)	(32)
第III—26図	綠岩古墳出土埴輪実測図(7) (1:3)	(33)
第III—27図	綠岩古墳出土埴輪実測図(8) (1:4)	(34)
第III—28図	綠岩古墳出土埴輪実測図(9) (1:4)	(35)
第III—29図	綠岩古墳出土馬形埴輪実測図 (1:6)	(36)

## 綠 岩 遺 跡

第IV—1図	綠岩遺跡南区構構配置図 (1:400)	(56)
第IV—2図	綠岩遺跡南区第1号住居跡実測図 (1:60)	(57)
第IV—3図	綠岩遺跡南区土塙実測図 (1) SK 1~4 (1:40)	(60)
第IV—4図	綠岩遺跡南区土塙実測図 (2) SK 5~8 (1:40)	(61)
第IV—5図	綠岩遺跡南区土塙実測図 (3) SK 10~13 (1:40)	(62)
第IV—6図	綠岩遺跡南区土塙実測図 (4) SK 14~17 (1:40)	(63)
第IV—7図	綠岩遺跡南区土塙実測図 (5) SK 18~21 (1:40)	(64)
第IV—8図	綠岩遺跡南区土塙実測図 (6) SK 22~24 (1:40)	(65)
第IV—9図	綠岩遺跡南区第1号住居跡出土土器実測図 (1:3)	(66)
第IV—10図	綠岩遺跡北区構構配置図 (1:400)	(68)
第IV—11図	綠岩遺跡北区第2号住居跡実測図 (1:60)	(69)
第IV—12図	綠岩遺跡北区第2号住居跡柱穴断面図 (1:60)	(70)
第IV—13図	綠岩遺跡北区第3号住居跡実測図 (1:60)	(71)
第IV—14図	綠岩遺跡北区 SK 9 + SX 1 実測図 (1:20)	(72)
第IV—15図	綠岩遺跡北区土塙実測図(1) SK 1~4 (1:40)	(74)
第IV—16図	綠岩遺跡北区土塙実測図(2) SK 7 + 11 (1:40)	(75)
第IV—17図	綠岩遺跡北区土塙実測図(3) SK 5 + 6 + 8 + 10 (1:40)	(76)
第IV—18図	綠岩遺跡北区出土土器・石器実測図 (1:3, 19は1:2)	(77)

## 高峰東遺跡

- 第V-1図 高峰東遺跡造構配置図 (1:400) ..... (81)  
第V-2図 高峰東遺跡SK2・3実測図 (1:30) ..... (82)

## 高峰遺跡

- 第VI-1図 高峰遺跡南区遺構配置図 (1:400) ..... (83)  
第VI-2図 高峰遺跡南区第1号住居跡内カマド跡実測図 (1:20) ..... (84)  
第VI-3図 高峰遺跡南区第1号住居跡実測図 (1:60) ..... (85)  
第VI-4図 高峰遺跡南区第2号住居跡実測図 (1:60) ..... (86)  
第VI-5図 高峰遺跡南区第2号住居跡内カマド跡実測図 (1:20) ..... (87)  
第VI-6図 高峰遺跡南区第3号住居跡実測図 (1:60) ..... (88)  
第VI-7図 高峰遺跡南区第4号住居跡実測図 (1:60) ..... (89)  
第VI-8図 高峰遺跡南区第4号住居跡出土遺物の平面・垂直分布図 (1:30) ..... (90)  
第VI-9図 高峰遺跡南区土塙実測図 (1:40, SK3のみ1:20) ..... (91)  
第VI-10図 高峰遺跡南区第1号住居跡出土土器実測図 (1:3) ..... (93)  
第VI-11図 高峰遺跡南区第1号住居跡出土鉄器・石器実測図 (1:2) ..... (93)  
第VI-12図 高峰遺跡南区第2号住居跡出土土器実測図 (1:3) ..... (94)  
第VI-13図 高峰遺跡南区第3号住居跡出土土器実測図 (1:3) ..... (95)  
第VI-14図 高峰遺跡南区第4号住居跡出土土器実測図 (1) (1:3) ..... (96)  
第VI-15図 高峰遺跡南区第4号住居跡出土土器実測図 (2) (1:3) ..... (97)  
第VI-16図 高峰遺跡南区第4号住居跡出土石器実測図 (1:2) ..... (98)  
第VI-17図 高峰遺跡北区造構配置図 (1:400) ..... (101)  
第VI-18図 高峰遺跡北区第5号住居跡実測図 (1:60) ..... (102)  
第VI-19図 高峰遺跡北区第6号住居跡実測図 (1:60) ..... (103)  
第VI-20図 高峰遺跡北区第7号住居跡実測図 (1:60) ..... (104)  
第VI-21図 高峰遺跡北区第6号住居跡内中央ピット (P3) 実測図 (1:20) ..... (105)  
第VI-22図 高峰遺跡北区SP2・3・5実測図 (1:20) ..... (106)  
第VI-23図 高峰遺跡北区SP1・4・6実測図 (1:40) ..... (107)  
第VI-24図 高峰遺跡北区第5・6号住居跡出土土器実測図 (1:3) ..... (108)  
第VI-25図 高峰遺跡北区第6・7号住居跡出土鉄器実測図 (1:2) ..... (108)

第VI—26図 高峰遺跡北区第7号住居跡出土土器実測図 (1:3) .....	(109)
第VI—27図 高峰遺跡北区出土土器実測図 (1:3) .....	(110)

### 松ヶ迫A地点遺跡

第VII—1図 松ヶ迫A地点遺跡構配図 (1:400) .....	(114)
第VII—2図 松ヶ迫A地点遺跡SK1・2・6実測図 (1:40) .....	(115)
第VII—3図 松ヶ迫A地点遺跡SK3～5実測図 (1:40) .....	(116)

### 図表目次

第1表 緑岩古墳出土土器観察表 .....	(42)
第2表 緑岩古墳出土埴輪観察表 .....	(50)
第3表 緑岩遺跡南区土塁一覧表 .....	(59)
第4表 緑岩遺跡北区土塁一覧表 .....	(73)
第5表 高峰遺跡第4号住居跡出土土器観察表 .....	(99)
第6表 松ヶ迫A地点遺跡土塁一覧表 .....	(118)

# I はじめに

## 1. 調査に至る経過

三次地区工業団地は、備北新都市調整整備計画の一環として広島県が造成した工業団地である。その範囲は、三次市東酒屋町～越神町の丘陵地域約53ha（うち工場用地は約33ha）に及ぶ広大なもので、昭和55年3月にはその造成を完了した。

この造成事業では用地内に多くの遺跡が発見されたことから、広島県教育委員会（以下県教委）では、事業者である広島県企業局（以下企業局）とその取扱いについて協議を重ねたが、現状保存できないものについては昭和52・53年の両年度に事前の発掘調査を行って記録保存の措置をとった。この調査では、当初の予想をはるかに上回る多様な遺構が検出されたが、このうち、「矢谷古墳」は古墳発生期の墳墓として他に例をみない遺跡として、調査後現状保存し、昭和54年3月13日付で史跡に指定、さらにこれを中心とした周辺地域約13,000m<sup>2</sup>は史跡公園用地として工業用地から除外されている。

その後、広島県は三次地区工業団地が県勢活性化に与える影響は極めて大きいとして、同工業団地の北東側への拡張を計画、第2期造成工事として約28haを造成することを決定した。本事業については、昭和55年9月に企業局から県教委あて用地内の文化財の有無ならびに取扱いについての協議があり、これに対して県教委は当該地内全域の踏査を実施して古墳1基を確認した。しかしこの地域は遺跡密集地の中央にあり、その立地も以前の第1期造成工事の立地に類似することから、広域に遺跡が分布していることが予想された。このため当該地については全域にわたり試掘調査が必要な旨企業局に回答した。昭和57年1月、企業局は県教委あて、当該地内の用地買収が終了し、立木伐開も終了したことから、この取扱いについて早急な対応をするよう依頼した。これをうけて県教委は、同年3月に再度の踏査と部分的な試掘調査を行い、上記の古墳を含む4遺跡（緑岩古墳、緑岩遺跡、松ヶ迫A地点遺跡、中嶽古墳）を確認した。しかし、対象範囲が広域にわたりこの他にも遺跡が存在する可能性が高いため、これら以外でも引き続き試掘調査を行って遺跡の有無及び範囲を確認する必要がある由回答した。また中嶽古墳については、用地の縁辺にあることから設計変更し造成区域外とし現状保存することとした。

こうした経過により、県教委は企業局と前記3遺跡の発掘調査及び全域の予備調査について委託契約を締結、昭和57年4月から8月までの予定で調査を実施することになった。また、その後の試掘調査により、新たに2遺跡（高峰遺跡、高峰東遺跡）が確認されたことから、契約を変更して、これもあわせて発掘調査することとした。

## 2. 調査の経過

調査は、昭和57年4月12日から開始し同年9月18日に完了したが、ほぼ同時に造成工事にかかったため常時工事と併行して調査を行う状況であった。

最初に緑岩古墳の発掘調査にかかったが、それに併行して古墳以西の区域を中心に調査予定の3遺跡の範囲の確定とそれ以外の遺跡の有無確認を行った。試掘調査には重機を使用し、幅2m長さ20~50mのトレッセを全域にわたって設定して総面積約5,000m<sup>2</sup>の調査を実施した。その結果、先の4遺跡の他に新たに2地点で遺跡を確認し、同時に調査予定の遺跡についても発掘範囲を更に限定することができた。結局当該地内で最終的に確認した遺跡は緑岩遺跡、緑岩古墳、松ヶ迫A地点遺跡、高峰遺跡、高峰東遺跡の5遺跡であった。

発掘調査の開始後、造成工事とのからみから調査の計画を若干変更し、緑岩古墳を中途で一時休止して高峰遺跡ならびに高峰東遺跡・松ヶ迫A地点遺跡の調査を行った。6月中旬にこれらの遺跡の調査を終え、7月からは緑岩古墳の調査を再開した。またそれに併行して緑岩遺跡の遺構検出を続けた。古墳を除く各遺跡は調査範囲が広く堆積土も厚いため重機使用によって堆土を行い調査期間の短縮を図った。9月初旬に緑岩古墳の調査を終了。引き続いて同月18日緑岩遺跡を終えてすべての発掘調査を完了した。最終的な調査面積は約12,000m<sup>2</sup>であった。

調査期間中の8月21日には緑岩古墳を中心に三次市教育委員会と共に遺跡見学会を催し、約70名の見学者があった。また、全期間を通じて延約580名の遺跡見学者があり、当地域の文化財に対する関心の根強さが窺われた。

### (1) 緑岩古墳

直径約20mの円墳で、480m<sup>2</sup>を調査した。内部主体は小形の堅穴式石室が2基検出された。遺物は周溝内より多量に出土し、種類も須恵器、土師器、埴輪、鉄器など多種に及んでいる。とりわけ埴輪は、通常の円筒埴輪、朝顔形埴輪の他に馬形埴輪と人物埴輪が出土しており、完形に復元できるものが多い。時期は6世紀初頭と考えられる。

### (2) 緑岩遺跡

遺跡が2つの尾根上に立地するため、南、中、北の3区に分けて調査した。調査面積は4,700m<sup>2</sup>である。古墳時代後半期の住居跡3軒、土塙41基などを検出した。

### (3) 高峰遺跡

遺跡が広範囲に広がるため、旧市道を境に南、北2区に分けて調査した。調査面積は5,100m<sup>2</sup>である。弥生時代前期および古墳時代後半期の住居跡計7軒を検出した。

### (4) 高峰東遺跡

調査面積は400m<sup>2</sup>である。土葬墓2基を検出した。

### (5) 松ヶ迫A地点遺跡

調査面積は1,000m<sup>2</sup>である。土塙8基を検出した。

### 3. 調査の体制

発掘調査は、広島県教育委員会が行い、文化課が担当した。

発掘調査及び報告書作成にあたっては次に掲げる人々及び機関の指導、助言・協力を得た。

松崎寿和 広島県文化財保護審議会委員

稻葉明彦 広島大学理学部付属向島臨海実験所所長・理学部教授

三浦亮 三次市文化財保護委員長

中村芳昭 三次市教育委員会社会教育課主事

落田正弘

三次市教育委員会、フジタ工業株式会社、広島県立歴史民俗資料館、三次教育事務所

この他の調査関係者は次のとおりである。

齊藤清三 広島県教育委員会教育部文化課長

藤井昭 " 主幹

金井亀喜 " 専門員兼埋蔵文化財係長

小都隆 " 文化財保護主事

植井勝 " 指導主事

佐伯邦芳 "

古瀬裕子 "

桑原隆博 "

桑田俊明 "

嶋田滋 "

青山透 "

鍛治益生 "

伊藤実 "

片山和哉 "

## I 遺跡群の位置と歴史的環境

本遺跡群は三次市南畠敷町字幕岩・高峰と東酒屋町字松ヶ迫に所在する。

三次地域は、広島県北部中央に位置し、岡山県の津山、落合、北房、新見に続く中国脊梁山地の南麓盆地列の一つを中心に構成されている。現在の三次市街地付近で合流する可愛川、馬洗川、西城川、神野瀬川は、小支流とともにそれぞれ大小いくつかの低平地を形成し、江川となって中国山地を横断し山陰の日本海にそいでいる。地形は市街地を挟んで北側では標高400m前後の断崖が連なるが、南側では比較的なだらかな低丘陵が展開する。

当地域は県内でも有数の遺跡の密集地として有名で、従来より多くの研究がなされてきた。それらのほとんどは当該地を『三次盆地』として一括りに把握してきた傾向があるが、近年では<sup>(1)</sup>『小盆地群』の有機的集合体としてとらえる視点も提起されている。

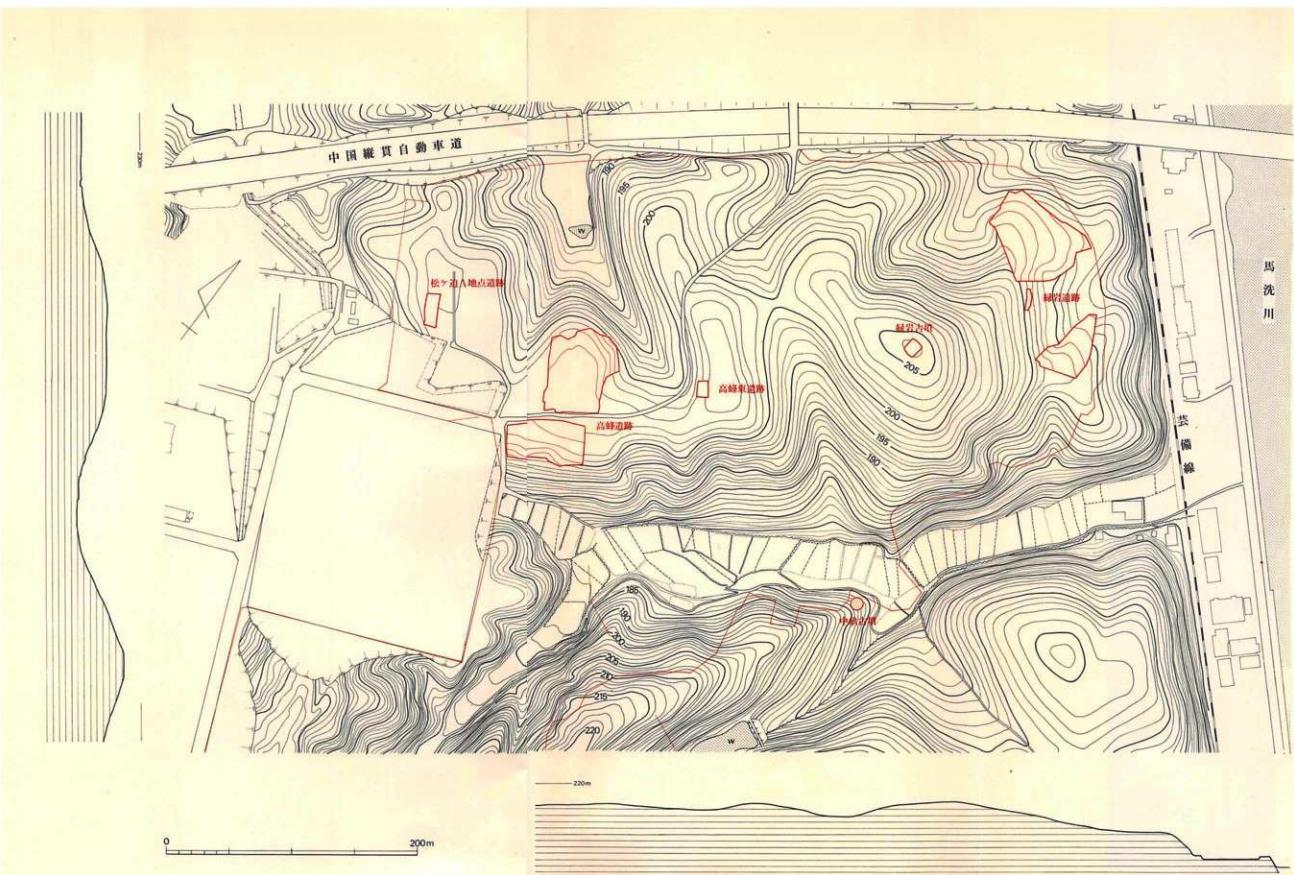
ところで本遺跡群は三次市街地から約3km南東に広がる標高200~350mの丘陵地帯の一角にあり、既設の三次地区工業団地の北東に隣接している。南西から北東に延びる標高170~230mの緩かな丘陵上に立地し、東端は馬洗川に面している。そして、丘陵の南側下方には狭小な谷が馬洗川に向って延び、谷湧水と溜池を利用して谷水田が古くより営まれてきた。

遺跡群の周辺一帯は三次盆地の中でも遺跡の密集地帯で、古墳時代を中心に多くの遺跡が知られている。ここでは本遺跡と関わりのある時代の遺跡を主に三次地域の歴史的環境を概観したい。

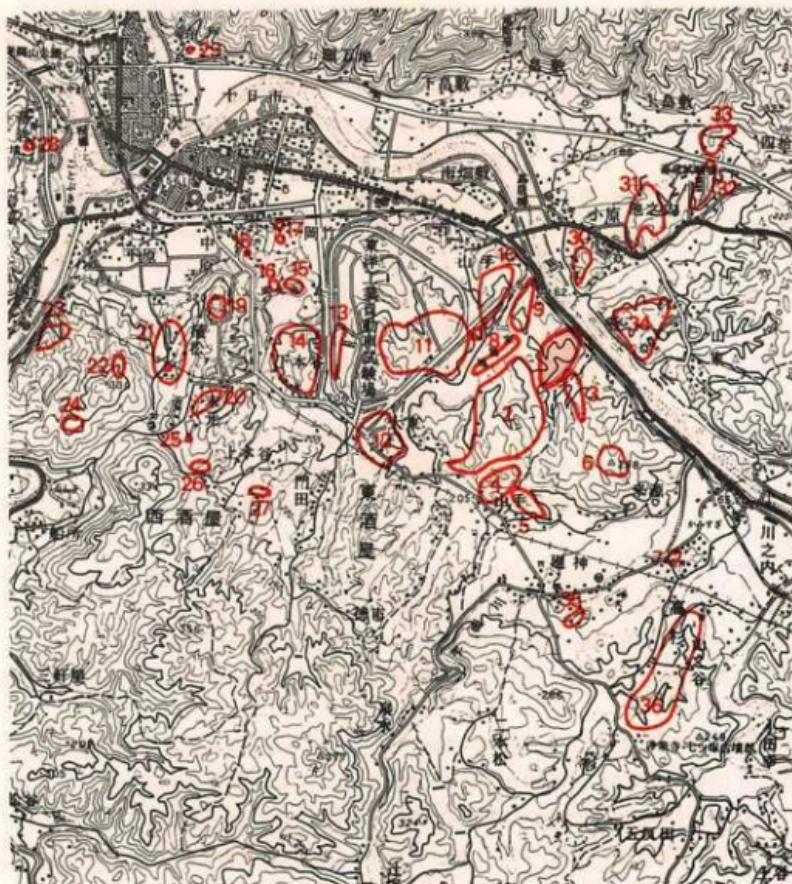
縄文時代以前の遺跡は、下本谷遺跡や松ヶ迫遺跡群など近年の調査により次第に資料の増加をみ、特に旧石器時代に関しては研究の途が開かれつつある。しかし、縄文時代の遺跡は極めて少なく、現状では早期と後期の遺跡がわずかに確認されているにすぎない。

弥生時代では前期の遺跡として大田幸町畠原遺跡、十日市町高平遺跡(19)などが少數例ながら知られている。これらはいずれも土塙墓などの墓制関係の連携で、小規模な墓群構成は山間部地域における農耕社会生成期の集団のあり方に示唆的である。一方、この時期の集落跡は当地域では今まで確認されていなかった。

中期になると集落跡として高平遺跡や塩町遺跡などがあげられる。高平遺跡では、中期前半の住居跡3軒が検出されている。そのうちの1軒は1辺約3.5~4mの隅丸方形に近い竪穴式住居跡と推定されており、規模などの点で今回調査した高峰遺跡の前期の住居跡と共通することは注目される。住居内からは土器の他に石錐、石庖丁、土製紡錘車(未製品)が出土している。一方、塩町遺跡では平面円形の住居跡が10数軒以上確認されており、時期は中期後半を中心につれて長期にわたっている。特に中期後半の土器は県北地域の凹線文盛行期の指標となつて久しい。その他、中・後期の集落跡としては高杉町知波夜比古神社裏遺跡、十日市町岡竹遺跡などがあるが、本地域では集落跡の調査例が少なくその実態は明確とはいえない。むしろ、近年墓制関係の遺跡の調査があいつぎ、弥生時代中期から古墳時代にかけての墓制の変遷過程



第 I-1 図 三次工業団地第 2 期建設地区周辺地形図及び本遺跡群位置図 (1 : 3,000)



- 1 本遺跡群 2 松ヶ迫遺跡群 3 挂原古墳群 4 西谷古墳群 5 金比羅古墳群  
 6 阿山古墳群 7 知波夜比古神社裏遺跡 8 宗祐池古墳群 9 宗祐池東古墳群  
 10 宗祐池西古墳群 11 天狗松北古墳群 12 天狗松南古墳群 13 善法寺古墳群  
 14 下本谷遺跡 15 日光寺遺跡 16 花園遺跡 17 回竹1号・2号遺跡 18 若宮  
 古墳 19 高平遺跡 20 大久保古墳群 21 酒屋高塚古墳群 22 板根古墳群  
 23 下原古墳群 24 植松西古墳群 25 大久保南古墳群 26 寄貞古墳群 27 大坂  
 古墳群 28 岩脇古墳群 29 寺戸庵寺跡 30 四拾貫下山遺跡群 31 四拾貫太郎丸  
 古墳群 32 四拾貫日南古墳群 33 四拾貫向山古墳群 34 山家古墳群 35 長尾古  
 墳群 36 淨業寺・七ツ塚古墳群

第二一図 本遺跡群周辺の遺跡分布図 (1 : 50,000)

とその地域的特質が次第に明らかにされている。とりわけ、本遺跡に近接する史跡「矢谷古墳」、南畠駒町宗祐西遺跡では山陵地方の墓制に特徴的な四隅突出型墳墓に共通する墳墓形態がみられた。しかも、前者では吉備地域に特徴的ないわゆる『特殊器合・臺』が供獻されており、出雲・吉備両地域と当地域の緊密かつ複雑な政治的一社会的関係の一面が窺われる。またこのことは見方をかえれば、前者について前方後方形という特異な形態にはそれらの他特性を越えて地域的な独自性が発揮されたことを示しており興味深い。このような墓制にみられる複雑な様相は、大局的にみれば他地方における階級発生の諸過程と軌を一にするものである。

しかしながら、当地域にあって特筆すべきことは、こうした多種多様で先進的な墓制を発達させながら、この地域では発生期の定型化した大形古墳の出現をみないことである。前半期古墳の代表例としては西酒屋町酒屋高塚古墳(21)、善法寺古墳群(13)、高杉町淨樂寺古墳群(36)、小田幸町七ツ塚古墳群(36)、糸井町糸井塚ノ本第1号古墳(糸井大塚古墳)などがあげられる。しかし、それらの大部分は5世紀代以降の古墳であり、現状では明確に発生期の古墳として位置づけられるものは確認されていない。今後発見される可能性も残されているが、このことは畿内を中心とする政治的同盟関係の直接的な影響下になかったためと考えられる。と同時に、そのことは当地域では発生期において傑出した豪族の出現がみられなかったことをも示している。

5世紀の後半期にはいると、小地域ごとに大形古墳が出現する。発掘調査例などから主な古墳をあげると、先述の酒屋高塚古墳、善法寺第8~10号古墳、島敷町太郎丸第2号古墳(31)、四拾貫小原第1号古墳(32)、高杉町淨樂寺第1号古墳(36)、・双三郡吉舎町三玉大塚古墳、八幡山第1号古墳などがあり、さらに当地域で最大規模を誇る糸井塚ノ本第1号古墳もこの時期前後に比定される。

酒屋高塚古墳は、全長約46m(推定)の帆立貝式古墳といわれ、岡山県茶臼山古墳、熊本県江田船山古墳出土品などと同様の画文帶神獣鏡を出土し、2基の竪穴式石室を有している。この古墳の東方1.5kmの丘陵一帯には善法寺古墳群、天狗松古墳群、やや離れて若宮古墳群があり、大形古墳の集中する地域となっている。このうち、善法寺古墳群は全長30~35mの帆立貝式古墳(第8号古墳)、前方後円墳(第9号古墳)、前方後方墳(第11号古墳)が同一丘陵上に並んでいた。一方、馬洗川北岸の丘陵一帯には四拾貫古墳群があり、大形古墳としては全長38mの太郎丸第33号古墳(前方後円墳)、太郎丸第2号古墳、四拾貫小原第1号古墳などがある。

(6) 太郎丸第2号古墳は径27m、高さ4mの円墳で竪穴式石室を主体とし、変形文鏡、鉄刀、鉄劍、刀子、箋、鐵鏡、ガラス小玉などが出土した。馬洗川の上流域では、三次地方で最大規模(径42m、高さ6m)の円墳である淨樂寺第1号古墳があり、その南方には全長67mを測り幅約20mの周庭帯がめぐる糸井塚ノ本第1号古墳(帆立貝式古墳)が存在し、そしてさらに上流域の三玉大塚古墳、八幡山第1号古墳へと続いている。三玉大塚古墳は全長41m、高さ7.9mの帆立貝式古墳で外堤をもち、竪穴式石室を内部主体とする。近年の発掘調査により、各種の埴輪(円筒・朝顔形、人物・器財形など)とともに古式須恵器が出土している。八幡山第1号古墳

も三玉大塚古墳とほぼ同じ墳形・規模をもち、周溝をめぐらしている。

以上のように、当地域では、全長40~60m級の古墳が大形古墳に属すが、それらの多くが前方後円墳でなく、帆立貝式ないしは円墳の形態をとる点はこの地域の特徴の1つである。

ところで、三次地域では、横穴式石室の採用がやや遅れるようで、三次市栗屋町若屋第9号古墳が出現期のものと考えられており、時期的には6世紀中葉をさかのぼるものではないとされ<sup>(7)</sup>ている。総体にこの内部主体をもつものは少なく、巨石墳も掛田第5号古墳や栗屋高塚古墳など数例を数えるにすぎない。

(桑田)

#### 注

- (1) みよし風土記の丘文化財公開講座(1982年度)における西川宏氏の講演「古代吉備における三次地方の位置」より。
- (2) 伊吹尚「畠原古墳群の発掘調査について」『広島県文化財ニュース』第46号 1970年
- (3) 広島県教育委員会「広島県三次市高平遺跡群発掘調査報告」「広島県文化財調査報告」第9集 1971年
- (4) 松崎寿和「古代農村の復元」『大学人会研究論集(広島の農村)』第2集 1955年
- (5) 広島県冥三郡三次市史料総覧編修委員会「広島県冥三郡三次市史料総覧」第5篇 1974年
- (6) 本村泰章「備後三次市太郎丸古墳調査報告」「古代吉備」第4集 1961年
- (7) 注(5)と同じ。

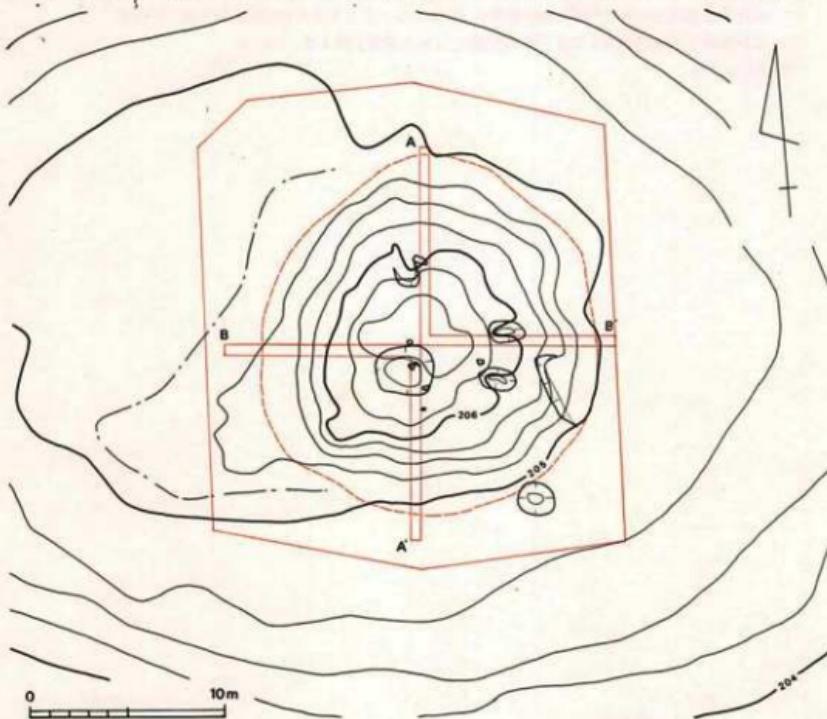
### III 緑岩古墳

#### (1) 位置と現状

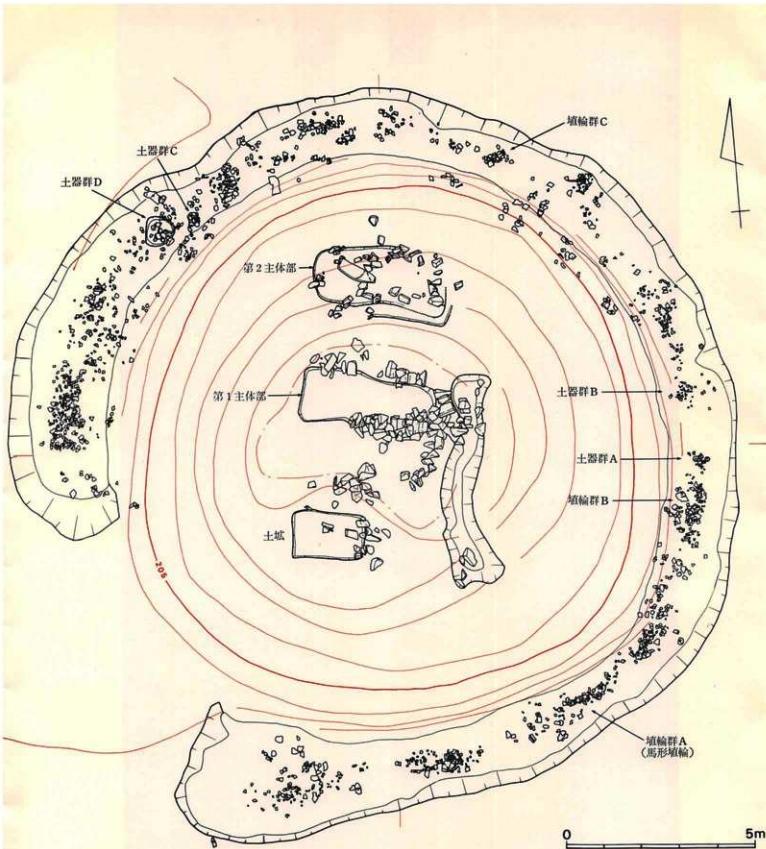
緑岩古墳は、今回の造成予定地内の北東部丘陵の頂部に位置し、最高所は標高206.5mを測る。後述の高峰遺跡の立地する丘陵の支丘陵上にあたり、高峰遺跡からは北東方向に直線距離300m、比高差7mを測る。また本古墳の立地する丘陵下方緩斜面には緑岩遺跡が存在し直線距離125m、比高差25mを測る。

本古墳が立地する丘陵の東側には三良坂方面より北流する馬洗川があり、馬洗川との比高差は55mを測る。馬洗川を挟んで対岸には四拾貫古墳群のある丘陵地帯を望むことができる。また南側には東西にのびる狭小な谷水田が存在し、この水田面との比高差は45mを測る。

本古墳の周辺一帯には多數の古墳が存在し、北側には中国縦貫自動車道を挟んで宗祐池東古



第三一図 緑岩古墳地形測量図(1:300)



第三一2図 網岩古墳遺跡図 (1:100)

墳群、東側には馬洗川を挟んで四拾貫古墳群、山家古墳群が存在する。一方南側には谷水田を挟んで中畠古墳、またその背後の丘陵上には掛原古墳群が遺なっている。このうち本古墳と時期

(1)・出土遺物・内容の諸点で近似する四拾貫小原第17号古墳は北方約1.7kmの距離にある。

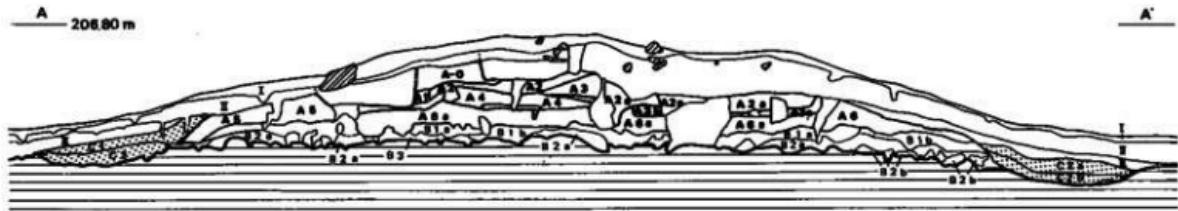
緑岩古墳の調査前の状況は、墳頂部と周辺との比高差がわずか1.5mを測るだけで、地形測量を行った段階では墳形は明らかでなかった。調査区墳丘を4分し、南西区を1区とし左回りに4区に分けた。

## (2) 墳丘及び周溝(第Ⅲ-2図)

本古墳は直径約19.5m、周溝幅約2.5~3m、周溝底面より墳頂部までの残存高は約2.2mを測る円墳である。墳丘は、本来緩やかに盛上っていた旧地表面上に周溝掘削の際の黒フク土及び地山土等を盛土し成形したもので盛土残存高は旧表土面より1.1mを測る。墳丘の残存状況が最も良好な部分は4区で、旧表土上に15~20cmの厚さで互層に、黒フク土及び地山土を版築した状況が明瞭に残存した。しかし他の地区については後世の搅乱や盛土の流出が著しいため4区で認められたような盛土状況を呈さなかった。(第Ⅲ-3図)

墳丘は4区で周溝底面より約30°の角度で立上った後、墳丘中位ほどで急激に緩やかとなり頂部にかけてほぼ平坦となる。これは盛土の流出及び後世の石室破壊の際の土取り等によるものと考えられ、本来の盛土はもっと高かったことが十分想定される。

周溝は幅約2.5~3m、周溝検出面よりの深さ約30~40cmを測り、1区南西部付近が約13mにわたって陸橋部となり、「C」字形を呈す。この陸橋部内の方針は本来の尾根線方向から若干南側に振っている。周溝断面は浅い「U」字形を呈しほぼ水平である。周溝覆土は墳丘の流出土である。周溝内では全域にわたって多量の埴輪片を検出したほか周溝中に於ける土器群を4カ所検出した。このうち2区の3区より検出した土器群Aは、須恵器の杯蓋・身が集まつた状況で7個体分を周溝底面に密着して検出したが、4区で検出したものとは異なり、蓋と身をセットにしたものではない。また3区の2区より検出した土器群Bは、周溝底面には密着した状況で、須恵器の要を故意に破碎したもので約0.5×0.4mの範囲内に散乱していた。復元の結果、この要は底部内面より穿孔した後、更に細片化され破棄されたものである。またこれより約40cm離れた箇所で鉄製鍬先を検出したが、この土器群Bに伴うものと考えられる。一方4区周溝中央付近で検出した土器群Dは、約85×80cmの不整円形プランを呈す深さ約10cmの浅い土塙中に、須恵器杯蓋・身をセットにし重ねた状態で12個体を検出した。これらの須恵器はほぼ完存しており、ある1セットの身の中にカワニナを盛ったものがあり墓前祭祀的意味合いを含んだ周溝内祭祀と考えられる。他のセットの中にも同様の供獻物を収納していると推定される。この祭祀遺跡東側に近接して、須恵器杯蓋・身及び土器長頸壺が集中する土器群Cを検出したが、他の3遺構とは異なり、周溝底面より浮き、また埴輪片と混在していた。



土層説明

墳丘断面

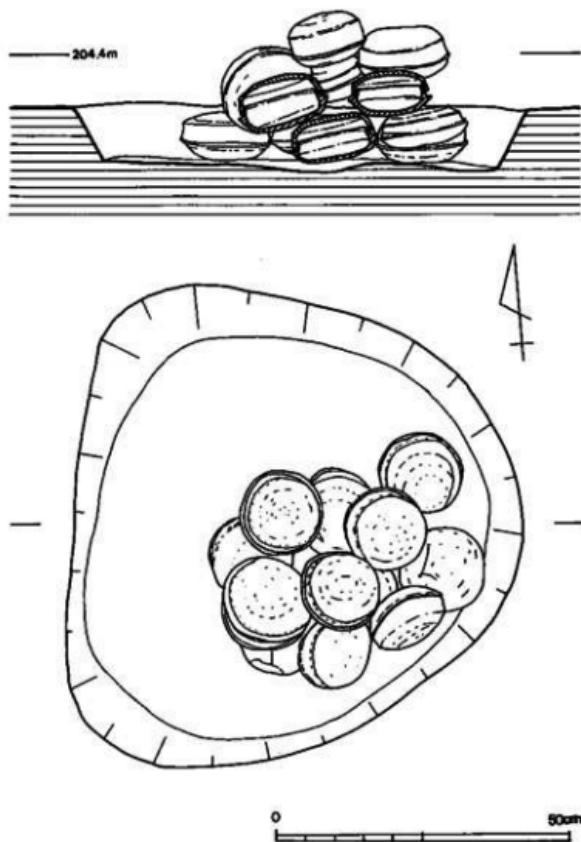
表 土 士	腐 殖 土	A 0	暗褐色粘質土	B 1 b	黑褐色粘質土	C 1	黑褐色土
Ⅲ	暗褐色土	A 1	淡褐色粘質土	B 2 a	暗黃褐色土	C 2	"
盛	暗褐色土	A 2	暗褐色粘質土	B 2 b	"	C 2 a	"
土	A 2 a	"	A 3	B 3	黃褐色土	C 2 b	"
	A 3	淡褐色粘質土					
	A 3 a	"					
	A 3 b	"					
	A 4	暗褐色粘質土					
	A 5	黑色粘質土					
	A 6	"					
	A 6 a	"					



第三一3図 緑岩古墳 墳丘断面実測図 (1:100)

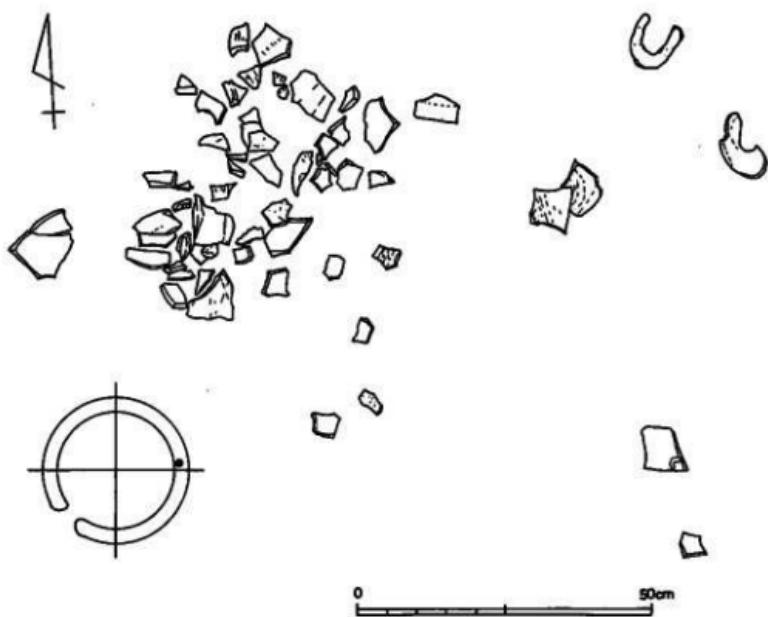
一方周溝内に転落した状況で検出した埴輪は、本来墳丘に据えられていたものと考えられる。しかし墳丘に埴輪基底部を埋込んだ状況のものはなく全て原位置より移動したものである。

周溝中で検出した埴輪片は陸橋部近付を除いて周溝全域にわたっているが、同一個体のものは比較的近接して出土した（埴輪群A～C）。出土した30数個体の円筒埴輪について1区間に8～9個体を据えていたものと考えられる。このことは、本来の墳頂平坦面の空間を考えた場合、円筒埴輪が墳頂平坦線辺部に隙間なく林立させていたものと想定される。また円筒埴輪以外の馬形埴輪、朝顔形埴輪については1・2区で検

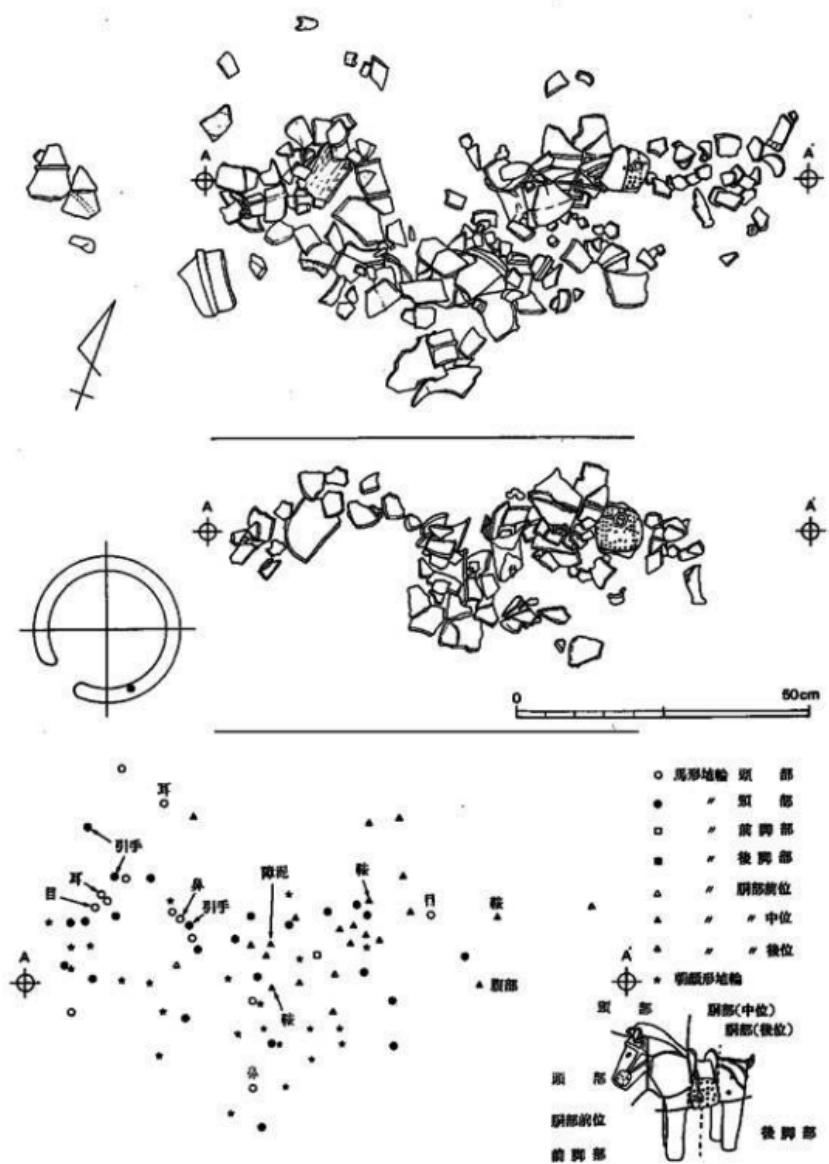


第三一四図 緑岩古墳周溝内土器群一D実測図（1：10）

出したのみである。このうち2区で検出した埴輪群Aは馬形埴輪1個体分と朝顔形埴輪・大形品1個体分・小形品1個体分が混在した状況であり、本来これらは近接して据えられていたものと思われる。馬形埴輪については比較的近接して出土するものなお各部位は離れて出土しており墳頂よりの転落時にはある程度壊れていたものと考えられる。このような状況は他の埴輪についても指摘できる。



第三—5圖 緑岩古墳周溝内土器群—B実測図 (1:10)



第三—6圖 綠岩古墳馬形埴輪出土狀況實測圖 (1:10)

### (3) 内部主体

#### 第1主体部(第III-7図)

墳丘のほぼ中央よりで検出した小形堅穴式石室と考えられるものであるが、後世の破壊によって本来の形状を留めてはいない。掘方は西側小口幅約1.45m、東側小口幅約0.95m、長さ約3.6m、深さ約10cmの台形プランを呈し、主軸方向はN86.7°Wを示す。石は東側小口、南側壁及び北側壁の一部を残すのみで南側壁で基底石より3段残存するほかは基底石だけを留めているにすぎない。使用された石材には幅20cm大のものが多く本古墳より約900m離れた宗祐池西側で産出される流紋岩質花崗斑岩であり、この角砾の小口面を側壁面として積重ねたものである。主体部底面はほぼ平坦で基底石より約10~20cm低くなっている。本主体内部からは中央付近より須恵器類の完形品が出土したほか、鐵錆1点を検出したがいずれも床面より浮いた状態であった。

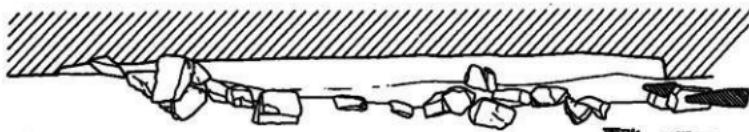
なお第1主体部東側小口部には排水溝が取付いていた。この排水溝は主体部東側小口南隅より連がるもので南側に約4.2mのびて2区墳丘中位で終っている。幅は約0.9~1.4m、深さ約40cmを測り、断面U字形を呈す。溝底面の取水部及び排水部に板石を敷いているが、排水溝全面には及ばず簡易な施設である。

#### 第2主体部(第III-8図)

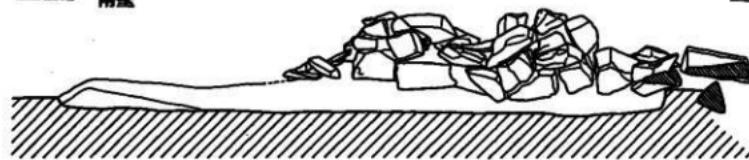
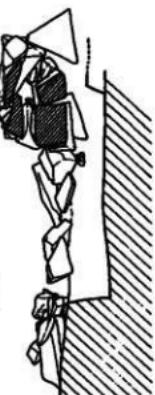
第1主体部より約3.5m北側で検出したもので、第1主体部同様小形堅穴式石室と思われ、後世の破壊が著しい。石室も南側及び北側の側壁の一部をわずかに残すのみであった。掘方は西側小口幅約1.3m、東側小口幅(推定)約2m、長さ約3.8m、深さ約10cmを測り主体部中央付近で南側にやや折曲ったような形状を示す。主体部の主軸方向はN83°Wを指向し、ほぼ第1主体部と平行する。石室は前述のように側壁の一部の基底石を残すのみであり、他の石材は石室内に崩落し散乱している。石材は第1主体部使用の石材とほぼ同質のもので本古墳周辺丘陵で産出されるものである。基底石は第1主体部同様主体床面より約20cm浮いた状況を示す。床面はほぼ平坦面を呈し水平である。なお西側小口部の内側に長さ約1m、幅40cmの石材が転落しているが、これは本主体部の天井石の一部と思われる。主体内部からは鐵錆が2点出土している。また主体部底面付近から円筒埴輪が出土しており、第2主体部が第1主体部構築後造られたことが窺われる。

### (4) その他の遺構(第III-10図)

墳丘中央第1主体より南へ約5m離れた位置で素掘りの土塙を検出した。規模は幅約1.15m、長さ約1.95m、深さ約20cmを測り方形プランを呈す。底面はほぼ平坦で、側壁はほぼ垂直に立上る。土塙中央付近の検出面で3個の石を検出する。覆土は暗褐色の軟らかい土で古墳主体部



4

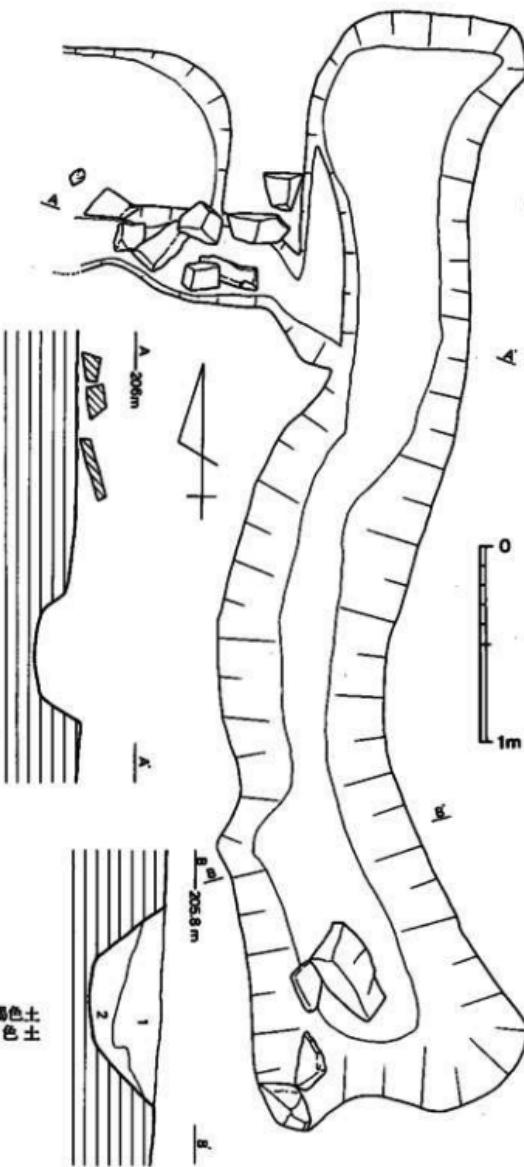


0 2m

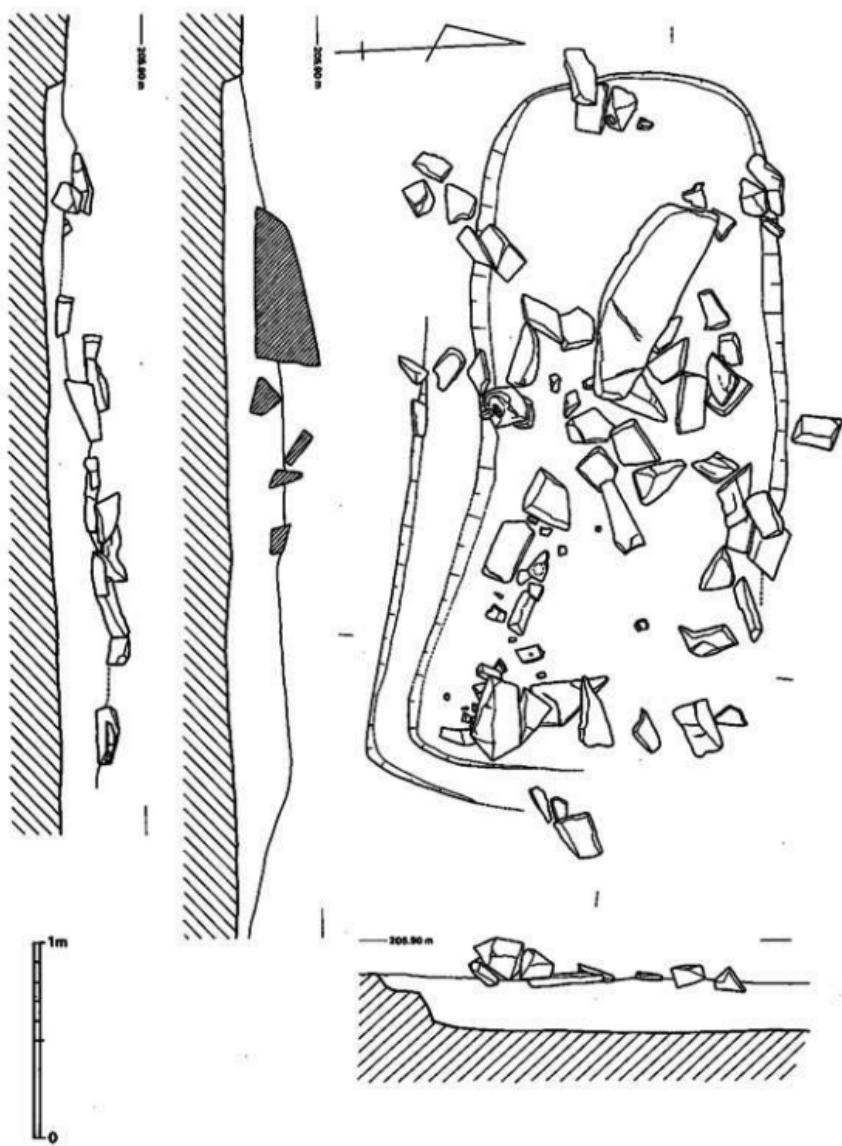
第三—7圖 石室古墳第1主体部剖面圖 (1:30)

のものとはかなり異っている。築造時期は明確にはしがたいが、1区墳丘斜面より中世・土師質土器が出土していることから中世古墓の可能性も考えられる。

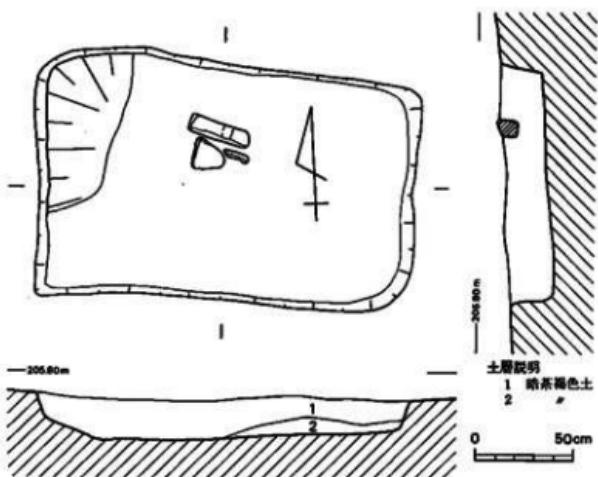
また周溝外側の調査区北東隅及び南西隅より土塗及び風倒木痕を検出した。北東隅で検出した土塗は直径約1mを測る円形プランを呈すもので深さは約35cmを測る。断面U字形を呈し覆土は黒色土、暗褐色土である。覆土中からは遺物を検出しないため時期は判らず、性格についても不明である。(殿治)



第三一八圖 緑岩古墳排水溝実測図 (1:30)



第三一九圖 緑岩古墳第2主体部実測図(1:30)



第三一10図 緑岩古墳土塁実測図 (1:30)

## (5) 出土遺物

遺物は廳(60)を除いてすべて周溝内からの出土である。これらのうちには、先述のように一括の出土状況を示すものが幾つかみられた。出土遺物の内訳は埴輪の他では須恵器が大多数を占め、杯蓋25点、杯身28点、高杯2~3点、廳1点、有蓋短頸壺4点、甕2点であった。土師器は比較的少なく計5点であった。その他、鉄器(鐵鏃・鎗先)が主体部・周溝より若干出土している。なお、周溝内、土器群Cより製塙土器が1点出土しており注意を引いた。

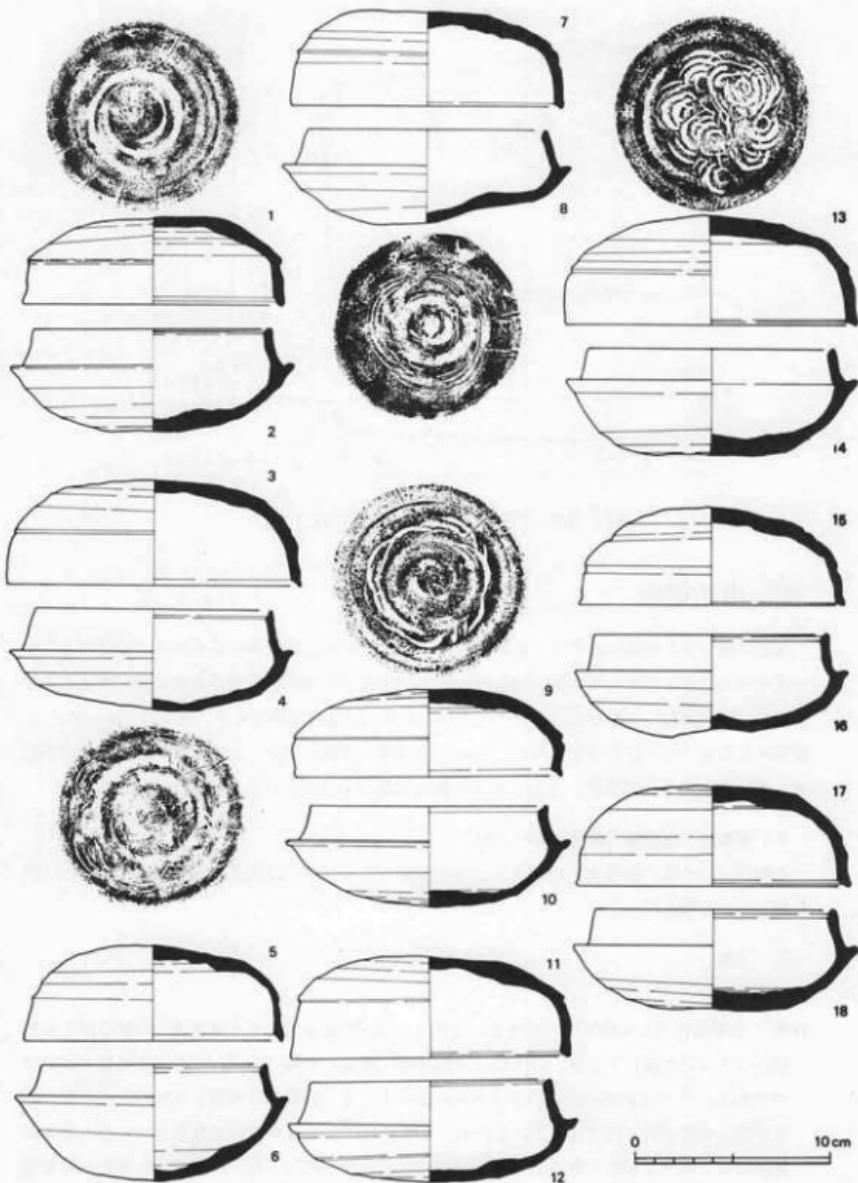
### a) 須恵器・土師器 (第三一12~17図)

土器については、器種ごとに大きく2つに類別でき、以下では出土状況を加味しながらI類・II類として分類を行った。

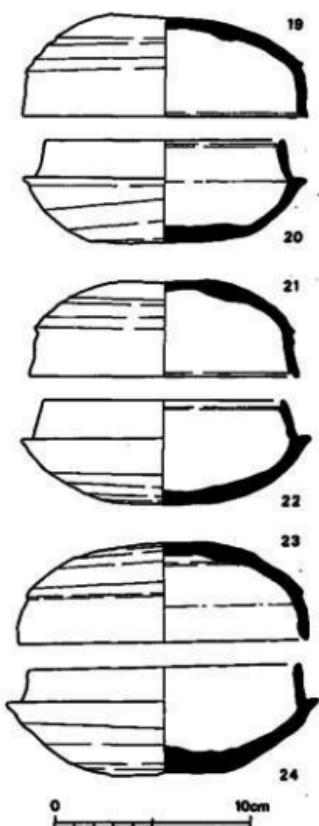
#### ① I類

##### (須恵器)

**杯蓋** 土器群D(1~24)で一括出土しており、25~34をはじめ3・4区出土の杯のはほとんどがこのタイプに属している。口径13.1~15.0cm、器高4.4~5.4cmで、やや大形に属するがいびつである。天井部内面の同心円タタキが特徴的である。口縁部は外開き気味のものが多い。天井部との境は段をなすがいずれもにぶく丸味をおびる。天井部は丸味をもつものもあるが、総体に少し扁平な感じである。回転ヘラ削りは天井部の約36~37とやや広い。また、口縁部は浅い沈線やナデにより凹面や内傾する段をなす。



第三—11図 緑岩古墳出土土器実測図(1) (1 : 3)



第三-12図 緑岩古墳出土土器実測図(3)  
(1:3)

#### （土器器）

長頸壺 (38) 頸部はやや短かく、胴部内面の調整はナデに近い。

#### ② II類

##### （須恵器）

杯壺 (40~43) 口径11.9~12.4cm, 器高3.9~4.3cmを測り、I類より小形である。外面の天井部と口縁部の境は不明瞭で、外面の回転ヘラ削りも後退し天井部の $\frac{1}{3}$ 以下となる。口縁部は端付近で小さく外反し端部内面に凹みを残すが、I類の段整形とはやや異なる。全体に調整は粗雑で内外とも器面の凹凸が著しい。

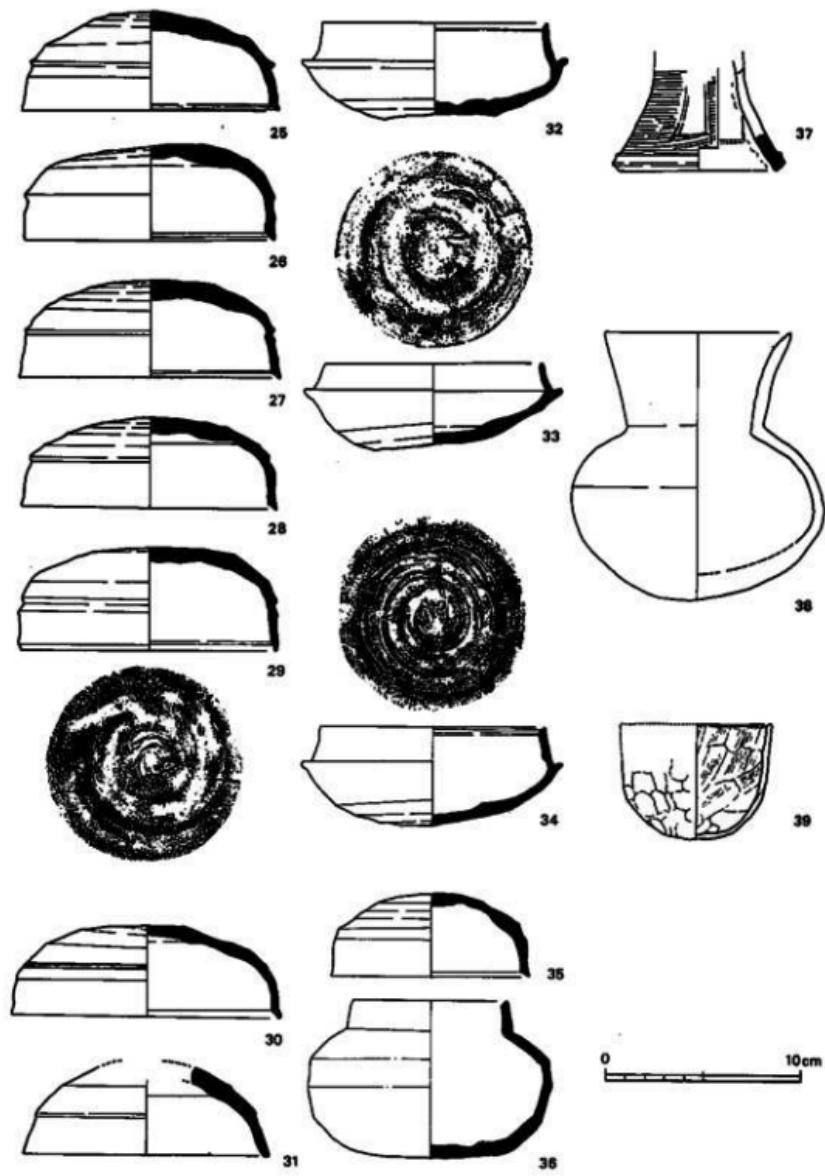
杯身 土器群Dの出土品などである。口径12.0~12.5cm, 器高4.9~5.5cm, 器高4.9~5.5cmで、たちあがり高1.8~2.1cmを測る。やや大形で、いびつなものもある。口縁端部の形状、調整技法は板ね杯蓋の特徴に一致する。口縁端部は大半がにぶい段もしくは凹面をなす。ただ、丸くおさめるもの(8・24)もある。調整は底部内面に同心円タタキ目をとどめ、また外面のヘラ削りも体部の $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{1}{2}$ におよぶ。なお、土器群Dの杯、身蓋のセットは、うまくかぶさらないものや調整に差がみられ、焼成後に適宜組合わされたものと考えられる。

高杯 (37) 幅広の方形透しをもつ高杯、脚部である。長脚と思われるが、短脚の可能性もある。

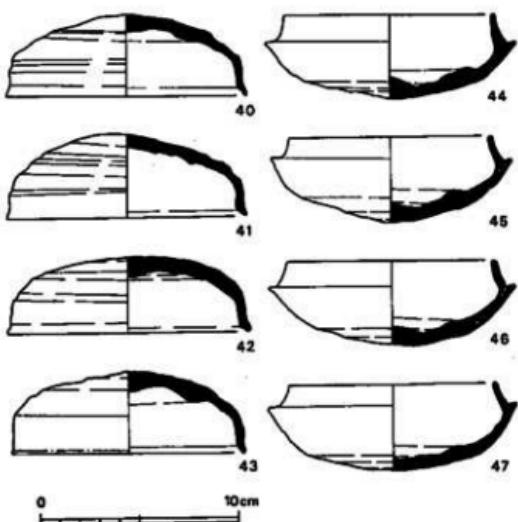
有蓋短頸壺 (35・36・64) 蓋・壺ともに口縁端部に特徴があり、明瞭な沈線を施して段を作る。蓋は口縁部が直立気味で全体に丸味をもつ。壺は外面部付近のヘラ削りの範囲が比較的広い。

壺 (60) 口径が体部最大径を越え、体部の形は球形をなす。頸部は太いが比較的短い。波状文をもつがやや粗雑である。口縁端部には段があり、杯身・蓋の特徴と共通する。第1主体部流入土中から出土した。

壺 (48) 土器群B(3区)出土の完形品で内面の同心円タタキ目は部分的にナデにより消されている。



第三—13圖 緑岩古墳出土土器実測図(3) (1:3)



第三一四図 緑岩古墳出土土器実測図(4) (1:3)

るものであるが、口縁端部が、蓋では段が不明瞭ながらみられるのに対し、蓋は丸くおさめられている。蓋は口縁部が外開きとなり破も不鮮明で扁平な感じである。蓋は底部ヘラ削りの範囲が狭い。

腹(49) 体部の破片で、内面同心円タタキはそのまま残っている。

#### (土器器)

長頸壺(67) 1類に比し頸部が長く、胴部内面の調整はヘラ削りである。

#### b) 製塙土器(第三一五図39)

土器群Cより出土した薄手の小形碗形土器である。調整は全体に粗雑であるが、内面は丁寧で細かい縦刷毛を施し、指頭による押圧気味のナデにより仕上げられている。調整の精粗により、器面は外面に比し内面が平滑になっている。器壁は通常の土器よりかなり薄く、2.5~3mm程度である。内外とも表面だけ2次的な焼成を受けている。胎土は1~2mm大の石粒を多含する。このような諸要素は、瀬戸内海沿岸部にみられる製塙土器の特徴に一致するものである。

#### c) 中世土器(第三一八図)

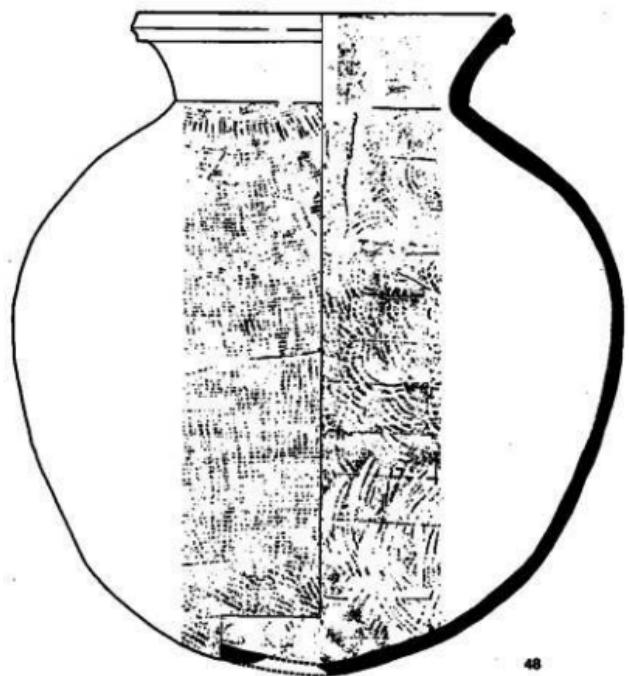
2区の墳丘外から出土した土師質土器(小皿)が数点ある。これらは流入土中に含まれていたものである。70は外反する短い口縁部をもち、底部外面は回転ヘラ切りである。71も同じタイプの皿である。

杯身(33・44~47・57)  
口径10.4~10.8cm、器高4.3~4.4cm、たちあがり高1.1~1.5cmで、1類に比し小形で器高・たちあがりともに低い。口縁端部は丸くおさまり、外面の回転ヘラ削りも体部の1/2以下となる。蓋同様に器面の凹凸が著しい。

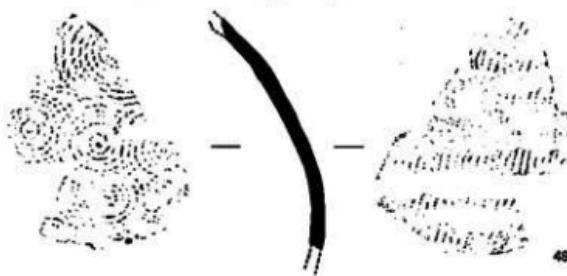
高杯(66) 長方形透しの長脚で、杯部は小形無蓋高杯の64が付くものかと思われる。

#### 有蓋短頸壺(61~63)

61・62は重ね焼き時の自然釉よりセット関係にな

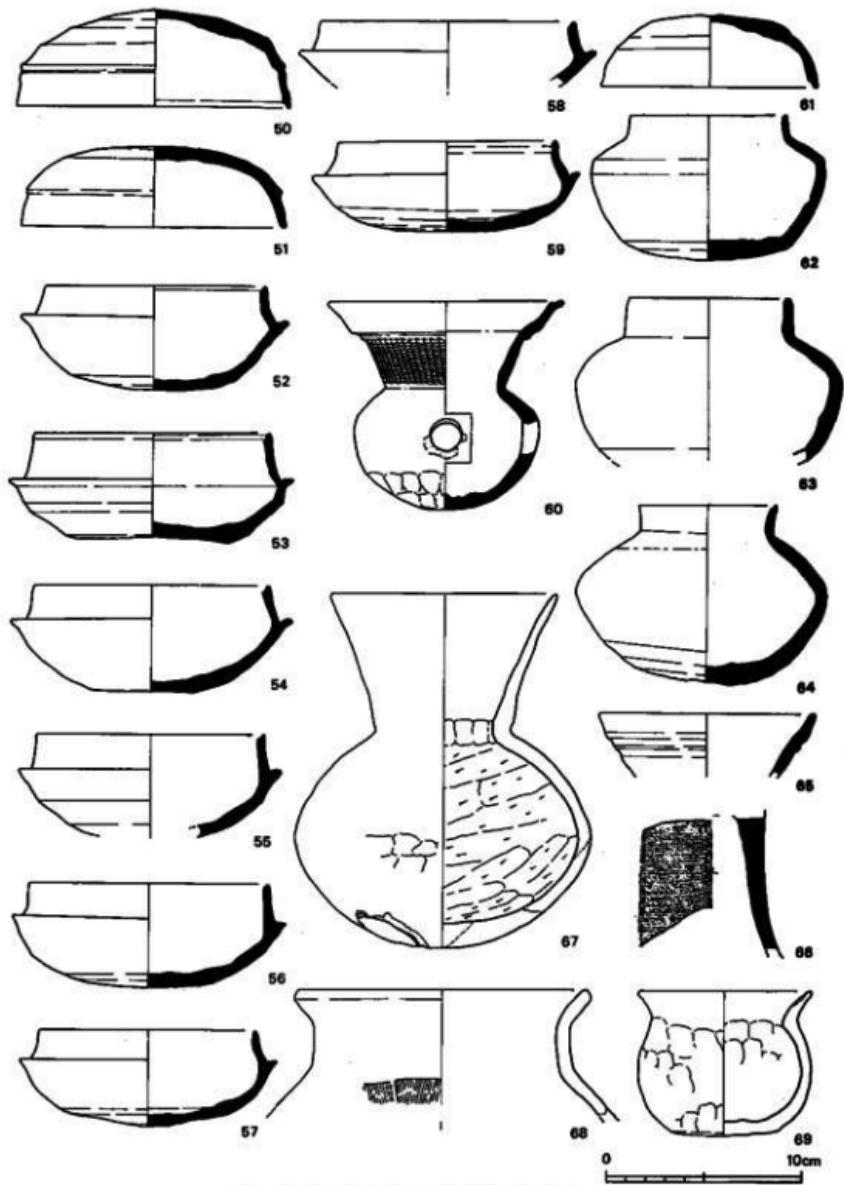


48

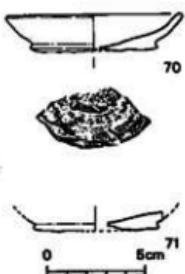


49

第三—15圖 緑岩古墳出土土器実測図(5) (1:4)



第三—162 綠岩古墳出土土器実測図(6) (1 : 3)



第三一17図 緑岩古墳出土土器  
実測図(?) (1:3)

#### d) 鉄器 (第III-19図)

第1・第2主体部および周溝内よりの出土品である。

鉄鎌 (72~75) 72は笠被ぎを有する有茎式で脇抉柳葉形のものである。造りは広鋒の両丸造りである。現存長は8.5cmを測る。75は刃部が片丸造りで、柳葉形を呈す。現存長1.8cm。73・74は刃部が欠損しているため形状は不明である。現存長は73が6.7cm、74が3.5cmである。

鎌先 (76) 周溝内で破壊された大甕 (48)とともに出土したU字形鎌先で、内側にV字溝を有す。内側の一部には木質が残存する。

#### e) 墳輪 (第III-21~30図)

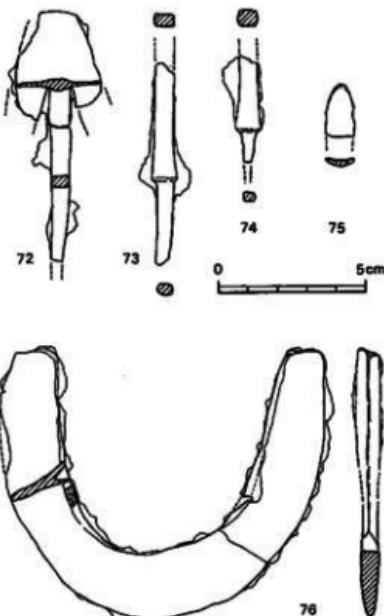
出土した埴輪のはほとんどは周溝内からである。大部分が円筒埴輪で占められるが朝顔形埴輪・馬形埴輪・人物埴輪も出土している。推定個体数は円筒埴輪30数個体、朝顔形埴輪3個体、馬形埴輪1個体、人物埴輪1~2個体である。

##### 円筒埴輪 (77~108)

円筒埴輪は土師質で軟質のものと須恵質に近く硬質で緻密なものとに分けられる。

本古墳の円筒埴輪は口径26.0~40.5cm、底径18.8~33.0cm、器高42.9~52.7cmの規模で亞みが大きく一見個体差が著しいが、口縁部の全周長は103~118cmと比較的一定しており、基底部についても同様に規格性が認められる。これらの埴輪はすべて4条のタガをもつ5段の形態をとり、最上段が幅狭となっている。

調整はタテハケ、ナナメハケ、指ナデ、ナデの組合せで行う。外面は1次調整をして左上りのタテハケを右下より左上方に向かって施しており、その後の2次調整は全く省略されている。ただ最上段のみは左上りのヨコハケとなっており、他の部位と異っている。口縁部は端部を最終調整として指頭による指ナデするが、基底部



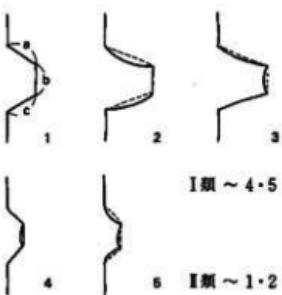
第三一18図 緑岩古墳出土鉄製品実測図 (1:2)

下面是未調整なものが大多数で作業台に敷いた禾本科植物の圧痕をよく残している。一方、内面調整は二種に分けられ、指ナデ、ナデ調整だけのもの(Ⅰ手法)と、その後に左上りのタテハケを全面に施したもの(Ⅱ手法)、そして、さらに縦方向のヘラナデを行いタテハケを消したもの(Ⅲ手法)がある。Ⅰ手法は、指頭圧痕を多く伴う縦方向の指ナデが主で、成形時の調整である。Ⅱ手法は、細かくみると、刷毛の比較的細かいもの(Ⅱ-1手法)と粗いもの(Ⅱ-2手法)がある。Ⅱ-1手法はハケの条数が5~6条/cmで外面の単位あたり条数と一致しており、内外ともに同一工具で仕上げられた可能性が強い。一方Ⅱ-2手法は内外面の条数が異っており、別個の工具で調整されたものと思われる。いずれのタイプも口縁部に限りヨコハケを行うものが多い。また、ほとんどは1段目にはタテハケが及んでいない。Ⅲ手法は少數であるが幅狭なヘラ状具を斜め方向に磨き風にナデつけてハケをきれいに消しており丁寧に仕上げている。

この内面調整の区分はタガの形状と対応している。断面の形態は、突出度が高く上辺が内湾するもの(A種)と低い台形のもの(B種)とに分類できる。両者とも、指ナデの強弱いかんによって1個体の埴輪でも上下のタガが若干異なる形をもっており、側面が凹んでM形を呈するものもみられる。しかし、A種とB種が同一個体に共存する例は皆無であり、両者間の意匠の相違が明確に認められる。第III-20図は、本古墳出土の埴輪についてタガの基本形を表示したものである。A種は(a)が内湾し逆に下端(c)は下ぶくらみなもの(①・②)が多い。これは指ナデの調整方法によるもので、上端は2度にわたって横ナデされ、意識的に凹曲させている。一方、B種は比較的癖が少なく、各辺は指ナデの強弱により多少凹みをもつが總体に台形もしくはM形を呈している。完形品をはじめすべての出土破片を観察すると、A種のタガをもつものは、Ⅱ-1手法の内面調整手法(=タテハケ調整)のものおよびⅢ手法(=タテハケ後ヘラナデ調整)のものに限られる。それに対し、タガB種は、Ⅰ手法の指ナデのみを内面調整とするものに多い。また少數例ではあるが、内面に荒いタテハケを行うⅡ-2手法もこれに含まれる。この内面調整にタテハケを行う点は、タガA・B両種の埴輪に共通する要素といえるが、先に述べたように内外面にハケ状工具の異同が認められることは手法的な差異を示している。

なお、タガは、通常接合時において器表面にあらかじめ沈線を一本引いて割付けの目安とする場合があるが、本例ではそうした痕跡は確認されなかった。各個体のタガに歪みがみられるのはそのためであろう。

ところで、本古墳の円筒埴輪で特徴的な点の一つは、すべての個体にヘラ記号がみられることである。記号は「へ」と「コ」の二種類があり、「へ」は左から右に、「コ」は下から上に、器外面のハケ調整の後にするどいヘラ状工具で施される。その位置は、



第三-19図 緑岩古墳出土円筒埴輪のタガの基本形態

ほぼ一致しており、原則として3段目透しの一方の直上に付される。そして注目されるのは、先に述べたタガ・内面調整との関係である。すなわち、「へ」記号の埴輪はタガA種・内面調整Ⅰ-1・Ⅱ手法のものに対応し、「コ」記号のものはタガB種・内面調整Ⅰ・Ⅱ-2手法の埴輪のみに限定される。

以上から、本古墳の円筒埴輪は、調整・タガ・ヘラ記号により大きく2種類に分けられ、(Ⅰ・Ⅱ類)さらに調整により各々が2つに細分されることが明らかとなった。これを整理すると以下のとおりである。

種類		内面調整	タガ	記号
Ⅰ	a	Ⅰ手法(指ナデ・ナデ調整)	B種(突出度低く台形)	コ
	b	Ⅱ-2手法(Ⅰ手法→粗いタテハケ調整)	B種	コ
Ⅱ	a	Ⅱ-1手法(Ⅰ手法→タテハケ調整)	A種(突出度高く上辺が内凹)	へ
	b	Ⅲ手法(Ⅱ-1手法→タテヘラナデ調整)	A種	へ

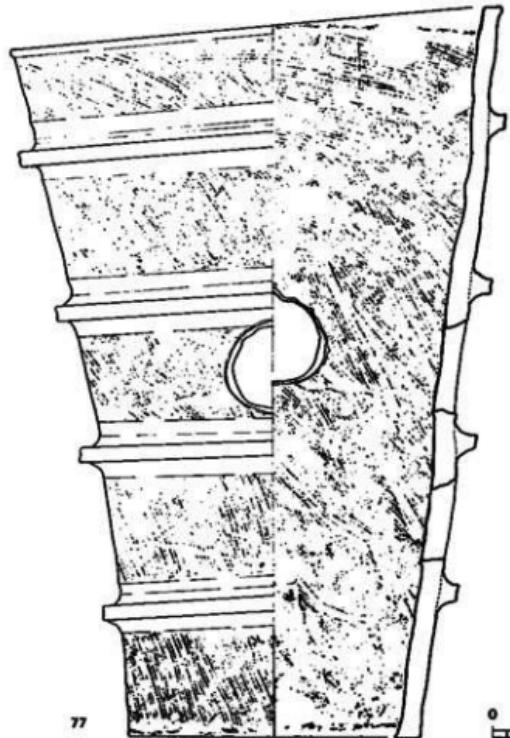
出土数は、Ⅱ類が圧倒的に多く、全体の約75%を占め、特にⅡ-a類が大多数である。それについてⅡ-a類が多く、Ⅱ-b類はⅡ-b類とともに少數である。また、少數例であるが、外面に赤色顔料の付着したものがみられた。

全形を復元した8例はいずれも焼成の際に大きな歪みを生じており、特に78・81は中央部や基底部で大きく内へ凹んでいる。

#### 朝顔形埴輪(109~113)

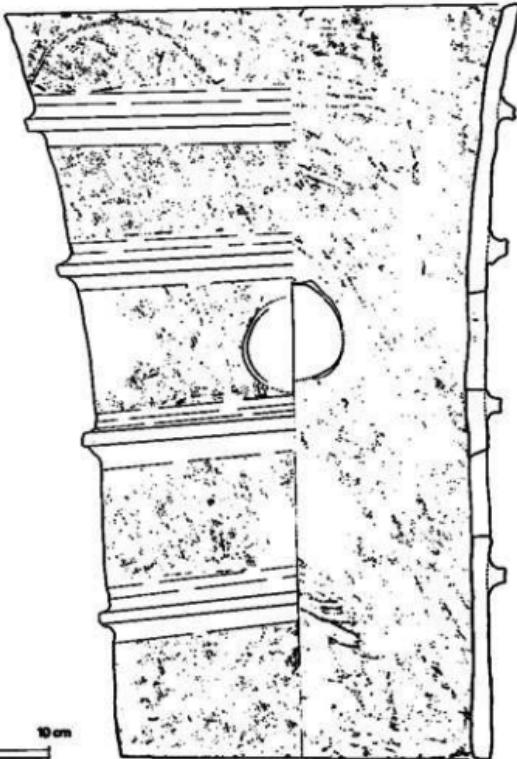
光形に復元できるもの(109)と口縁部破片2点(110・112)・くびれ部1点(111)、肩部1点(113)があり、111以外は軟質である。

109は、肩部の張りが弱く口縁部のたち上りも直立に近い。タガは先の円筒埴輪のA種に類し、突出度が高くしっかりしているが、最上段のタガは三角形に近い形状を呈す。透しは円形で、2段目と3段目に2個ずつ穿たれている。外面調整には整然としたタテハケが施される。内面調整ではくびれ部以上はナナメハケで特に口縁端部付近はヨコハケを施す。くびれ部以下は横方向もしくは左上り斜行の指ナデである。110と111は同一個体と思われる。口縁端部がやや大きく垂下しているが、形態・調整などの諸点より109と同形同大のものと推定される。112は前二者より小形品で、口縁部が大きく外反し、調整は109・110と同様に外面がタテハケ、内面が左上りヨコハケである。ただし、ハケ目は粗い。113は一応112と同一個体と考えられるが、透しの位置や中位の段の接合方法が他と異なるため別個体の可能性もある。



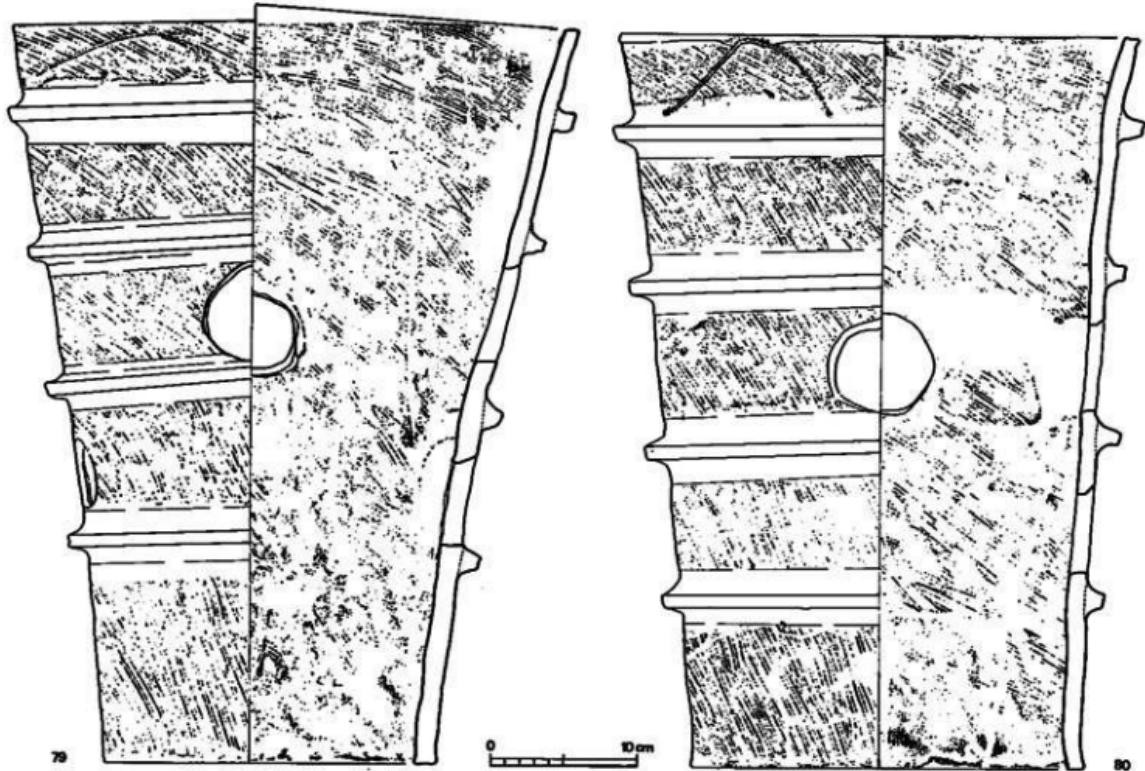
77

0 10 cm

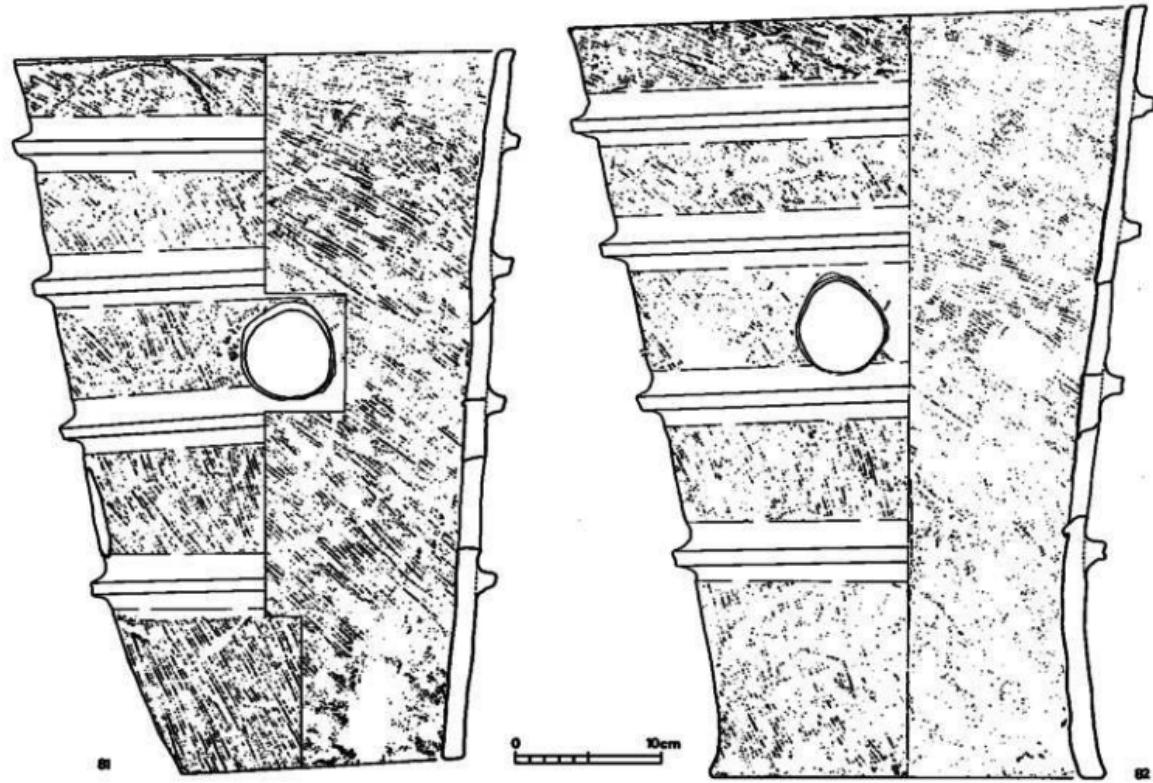


78

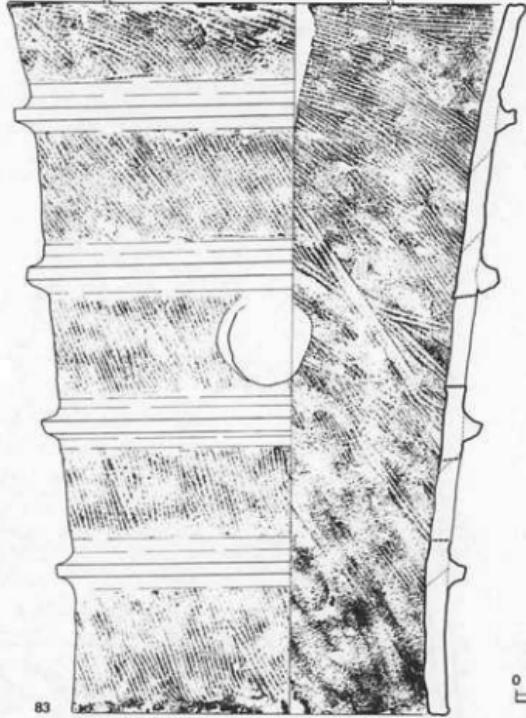
第三—20圖 緑岩古墳出土埴輪夾測圖(1) (1 : 4)



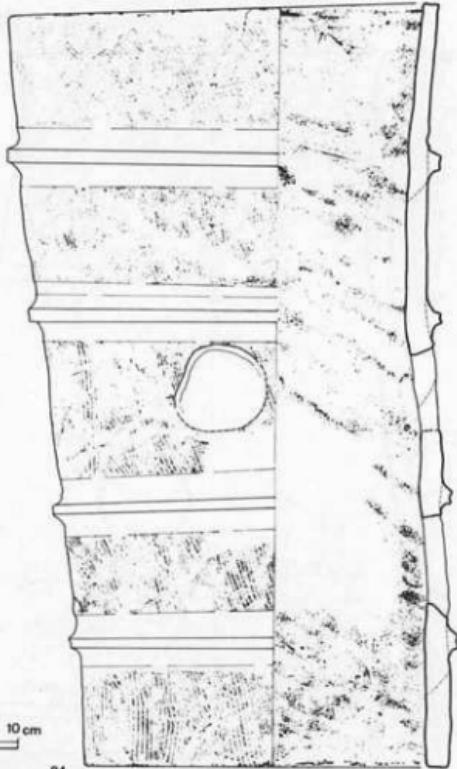
第三—21圖 綠岩古墳出土埴輪測量圖(1) (1 : 4)



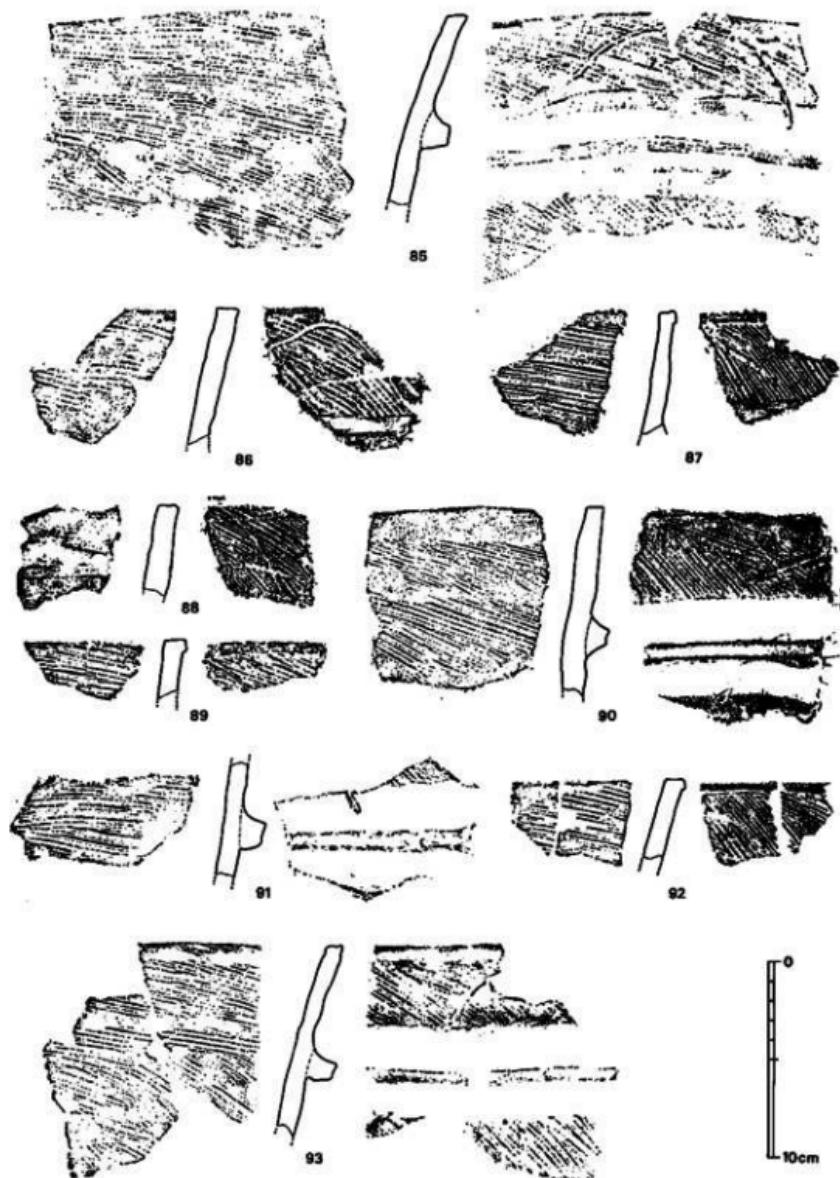
第三—22图 绿岩古墓出土埴輪实测图(1 : 4)



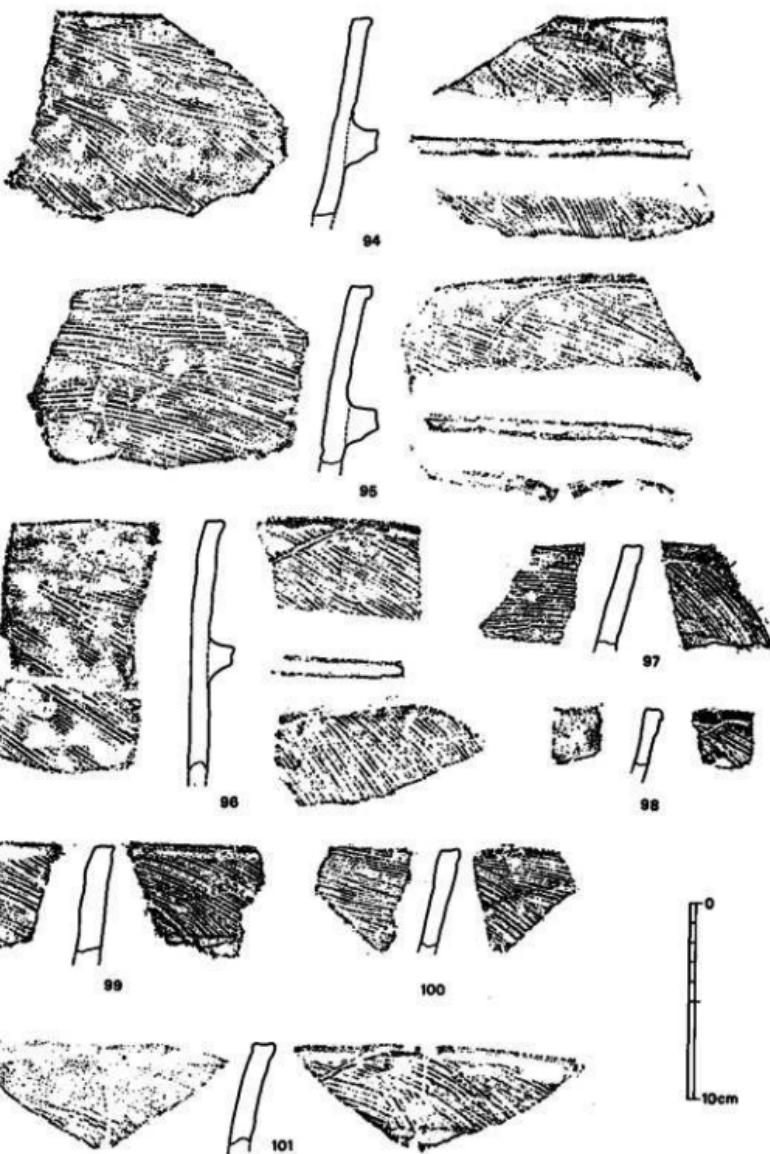
0 10 cm



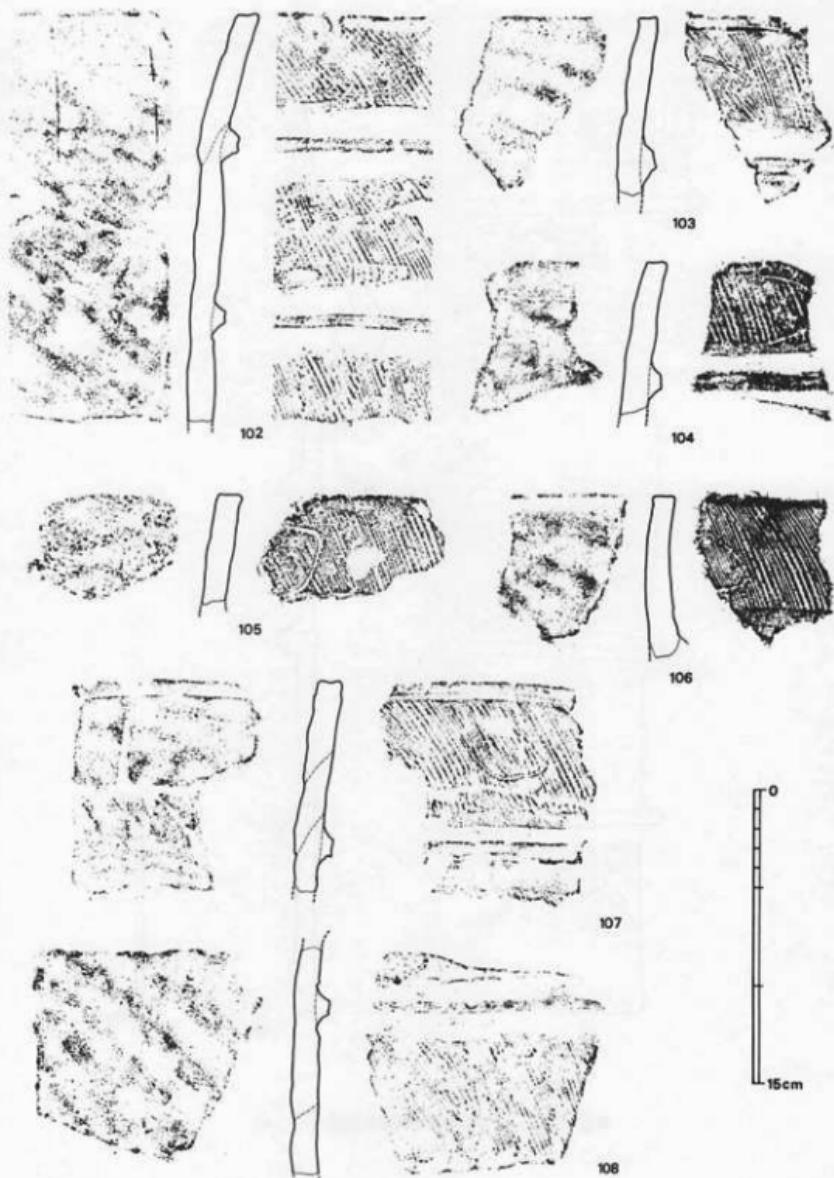
第三—23圖 緑岩古墳出土埴輪実測図(4) (1 : 4)



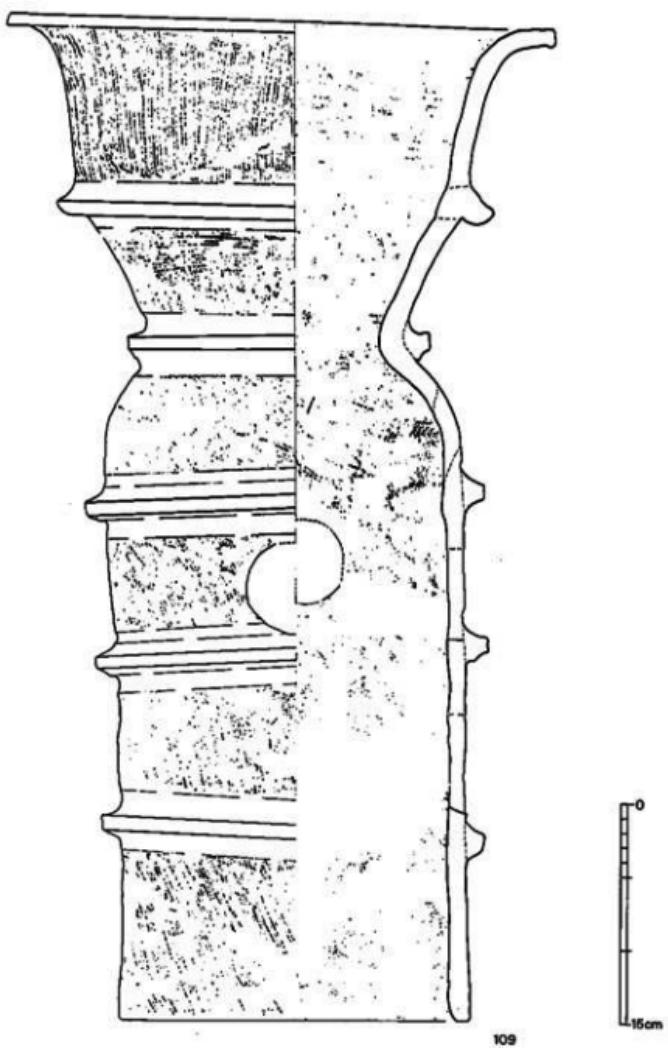
第三—24圖 綠岩古墳出土埴輪実測図(5) (1:3)



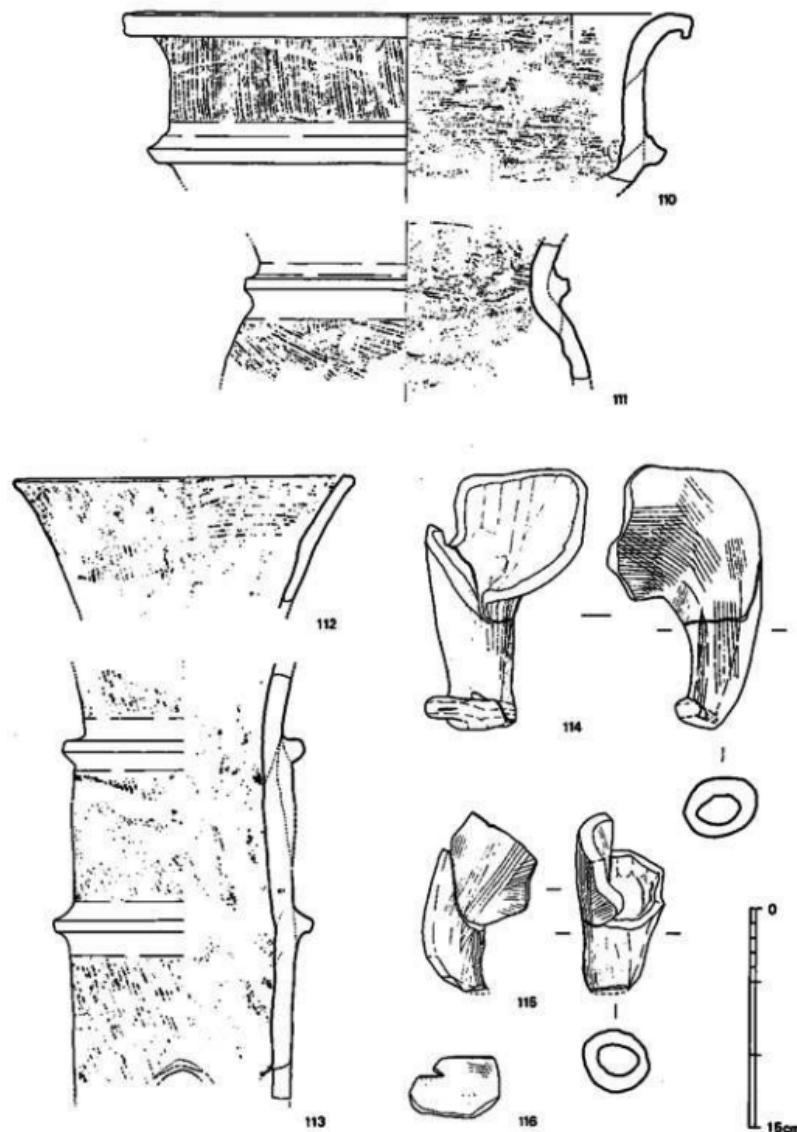
第三—25圖 綠岩古墳出土埴輪実測図(6) (1:3)



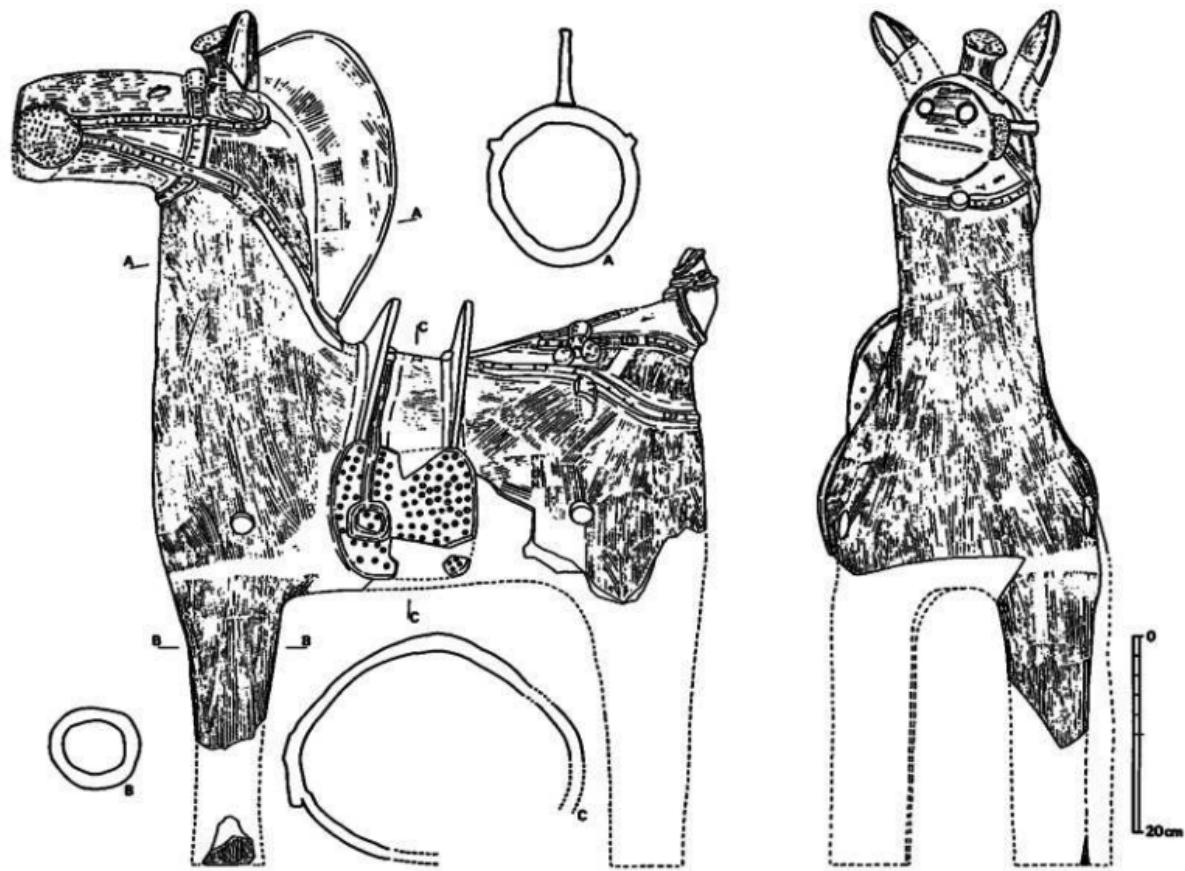
第三—26図 緑岩古墳出土埴輪実測図(?) (1:3)



第三—27圖 綠岩古墳出土埴輪夷面圖(3) (1:4)



第三—28圖 線岩古墳出土埴輪矣測圖(1:4)



第三—29圖 綠岩古墳出土馬形埴輪突厥圖 (1:6)

### 馬形埴輪（第Ⅲ-30図）

周溝内の2区より一括して出土した。造存は非常に良好で、頭から尻尾部まで脚部・腹部の一部を除いてほぼ完形に近く残っており完全復元できた。胎土に細石粒を多含し、焼成は普通でやや軟質である。色調は黄褐色～淡茶褐色を呈す。体高は41.5cm、全長73cmを測る。

全体のプロポーションは、首から頭部にかけてが大きく、頭部がほぼ垂直にあがって首と逆L字状につながっている。また、尻尾部は頭高で尾部の先端がかなり上向きに付けられている。一方、面簾、尻簾、鏡板、障泥などの各種の馬具は粘土の貼付けによって表現され、前後の足の上端、喉、尾部の下方にそれぞれ円孔をもつ。

調整は、内面が全面指ナデであり、外面は3～4条/cmの粗い刷毛目調整を基調とし、明瞭にその痕跡を残している。

頭部は、口の部分に円形の2鼻孔と切長な口腔を穿ち、側面に横円形の鏡板が貼付けられ、上面に縦長な刺突文と横方向のラフな沈線が施されている。目は杏仁様をなし、上・下両瞼部分に小さな起伏をつけて写実的に表現している。たて髪は、高さ4.5cm、厚さ1.1cmで綺麗に刈りそろえ、上縁は先端部が急角度に立上りながらかな傾斜となって鞍部へ続く。髪との間は少し離れており手綱がV字形に繋がれる。髪の先端は高さ5cm、径4.5cmに結んで飾りとし、上面に鏡板同様の刺突文を施して刈揃えた状態を表現している。面簾、手綱、引手は断面方形の粘土紐を貼り、上面に刺突文を施して組織を表わす。鞍部は棒状を呈する垂直軸で前輪と後輪、鏡、障泥からなる。前輪と後輪の距離は6.5cmと非常に狭い。鏡は輪盤で、輪の幅1cm、径4.5～5.1cmの円形、横円形を呈し、棒状部は長さ16.5cm、幅1.2cmで鞍部中央で円形の隆起をなす。障泥は、胴部にそって湾曲し、左右の上縁幅12.0cm、高さ12.5cmを測る。下縁は大きな円弧を描き、その上面には竹管文を施す。

後輪から出た尻簾は5本の粘土紐で表現され、左右の上段の帯には3鉢の雲珠が付けられ、下段には杏葉と思われる刺突文を伴う不整横円形の小さな貼付け文様がある。双方とも簡略化した装飾文である。尾部は、背部と同じ高さから取付けられ、長さ18.6cmで先端は完全に上を向いている。また、タスキ状に幅1cmの粘土紐（革紐）が巻きつけられている。下端の尻の穴は径3.1cmである。

脚部は、前脚左側の上半部、後脚右側のつけ根が残存しており、つけ根部径9.0cmの中空の円筒形を呈する。長さは不明であるが、先端部の破片より25～30cm程度と推定される。

### 人物埴輪（114～116）

114は腕部もしくは足部と思われ、先端部内側に棒状のものを付している。外面は粗い刷毛目調整、内面は指ナデである。115は腕の部分と考えられ、先端部は細くなっている。調整は114と同様である。116は顔面の一部かと思われ、ゆるやかに湾曲する器面の一角に切長な孔が穿たれている。これらはいずれも土師質で赤味の強い黄褐色を呈す。

（桑田）

## (6) 小 結

### (1) 立地について

本古墳の位置する丘陵周辺には中～後期かけての古墳群が数多く存在している。しかも1支丘上に小規模な古墳が点々と築造されるのが通例であり、本古墳のように1支丘上に単独に築造されている類例は少ないと言ってよい。しかも本古墳が立地する箇所は東側前面を北流する馬洗川を挟んで四拾貫方面から三良坂方向にかけての眺望が最も開けており、明らかにこの方向を意識して築造されたことが考えられる。このことは墓道と考えられる陸橋部が本古墳南西側に取付いていることからも窺えよう。

### (2) 墳丘について

墳丘は本来わずかに盛上っていたと考えられる旧地表面土に周溝掘削時等の堆土である黒フク土及び地山土を互層に盛土して築造したものと考えられる。現存高は周溝底面より約2.3mを測るが、この高さは破壊された状態で検出した主体基底石上面レベルとほぼ同じレベルを測るもので、この主体が小形堅穴式石室であること、またこの主体部を覆う盛土があったことを考慮すれば本来の古墳の高さは周溝底面より約3m近くはあったのではないかと想定される。また周溝については古墳の全周を堀るものではなく南西部が途切れ陸橋部を形成している。この陸橋部は一般的に考えて墓道としての機能を果していたものと考えられるが、前述のよう北東ないし南東方面を意識して造出されている。このことは、本来の尾根線筋がほぼ東西方向に走向していた状況を考えると、若干南側方向、つまり谷方向に墓道を取付けねばならない何らかの規制の存在した可能性が考えられる。

### (3) 周溝内祭祀について

周溝内で4ヶ所の土器群を検出した。検出した箇所は本古墳東側2ヶ所及び北西部2ヶ所で陸橋部に対して相互の距離がほぼ等しい状況を呈す。このうち東側の大形の甕を打割った状態のものと北西部の須恵器杯蓋・身を12セットにしたものとは周溝底面に密着しないしはわずかに掘りくぼめた状態のものの中に一括して存在するものであり、また東側の須恵器杯蓋・身が7個体分集中して検出したものと北西部須恵器杯蓋・身及び土器群が集中した箇所はともに周溝底面より若干浮いた状態で検出したものである。これらのこととは主体部が2基存在することを考え合せるとそれぞれ主体が築造された時点で祭祀が行われたことが想定され、しかもその場所が前の祭祀の箇所と近接すること、また陸橋部との位置関係で一定の方向性があることなど、その場所選定に規則性があったとも考えられる。また北西部で検出した須恵器のセットの一つの中にカワニナが盛られていたことは、周溝内祭祀が墓前祭祀と同義的意味合いをもつものとして行われたことを窺わせる。

#### (4) 内部主体について

内部主体は2基でともに小形堅穴式石室であったと考えられる。三次地域への横穴式石室の導入期が6世紀中頃とされる事実を考える時、本古墳が小形堅穴式石室を採用するのは時期的に考えてうなづける。また第1主体部に排水溝が取付いているが、近年県内においても堅穴式石室に排水溝が取付く類例が知られてきた。<sup>(2)</sup> 福山市加茂町の石鶴山第1号古墳、福山市駅家町の長迫古墳等がそれであるが、ともに5世紀代の古墳であり本古墳のように6世紀下る類例は知られていない。一方第1主体部と第2主体部の新旧関係については前述したように第2主体部床面に貼付いた状態で埴輪片が出土していることから、第1主体部築造後に第2主体部が營まれたものと考えられる。周溝等で検出した埴輪は第1主体に伴うものと思われる。

#### (5) 墓輪の出土状況について

周溝及び墳丘斜面で検出した埴輪はいずれも原位置を保っているものではなく、墳丘盛土流出が開始してある程度時間が経過した後周溝内に転落したものと考えられる。検出の埴輪は円筒埴輪30数個体、朝顔形埴輪3個体、馬形埴輪1個体で、本来陸橋部正面を除いた墳頂周全に据えられていたものと考えられる。このことを円筒埴輪に例をとってみると陸橋部を除く各区に8~9本の円筒埴輪が据えられていたものと思われ、本来の墳頂面の大きさは明確ではないにしても直径約20m、推定高約3mの本古墳の墳頂部の面積はそれほど広いものとは考えられず、復元口径約34cmの円筒埴輪が各区に8~9本据えられた時、ほとんど墳頂周辺空間を埋めつくしたものと考えても差支えないと思われる。

#### (6) 築造年代と被葬者の性格について

最後に本古墳の築造年代と被葬者の性格について若干述べたい。後述のように本古墳の築造年代については周溝内祭祀遺構等より検出した須恵器から陶邑編年のⅠ期からⅡ期への過渡期と見るのが妥当と考えられる。しかしこれらの須恵器を細かく見た場合周溝北西部で12個体セットで検出したことと考え合わせると検出の須恵器に2時期存在することもうなづける。しかしこの差異は大きく隔たるものではなく、また各主体が切合うことなく主軸方向もほぼ同一であることを考えると本古墳の主体がさほどの時期的経緯を経ないうちに構築されたことが窺える。一方第2主体部床面で埴輪片を検出したことはひとつには本古墳の崩廻時期が第1主体部構築後早い段階から進行した可能性も考えられる。

本古墳の被葬者については、本古墳が周辺地域の古墳と比してずば抜けて大規模なものとは言いがたく、副葬品の点でも見おどりがする。しかし周辺古墳で埴輪をこれほど多量に検出した発掘例は少なく、その点本地域内で検出しているとは言える。本古墳とは馬洗川を挟んで対峙する四拾貫小原第17号墳については、墳丘が完全に失われているためその全容は明らかではないが、内容的・時期的にはほぼ同時あるいは本古墳がやや後出的である。このことは本古墳の被葬者と四拾貫小原第17号墳の被葬者との連がりを考える意味で重要であり、また本古墳が周辺古墳と異なり単独で營まれ、四拾貫方面に向け視界が開けていることなど興味ある実態を示す

が、周辺古墳の調査が進展していない現状においては早急に本古墳の被葬者の性格を決定することは困難である。

(原治)

#### 注

- (1) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『下山遺跡群発掘調査報告』 1980年
- (2) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『石越山古墳群』 1981年
- (3) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『長迫遺跡発掘調査報告』 1982年
- (4) 注(1)と同じ。

#### (7) 出土遺物について

本古墳からは多種多様な遺物が出土したが、ここでは2,3の主要なものについてふれたい。

##### ○須恵器について

周溝内の土器群は大きく2類型に分類できた。両者は同時併存の可能性もあるが、ほぼすべての器種にわたって類別でき、相互に新旧関係が認められたので、時期的に異なるものと考えられる。検出した2基の内部主体はこれに対応するものであろう。

I類は、杯身・蓋において大形化の傾向が窺われ、調整には一部に同じ円形タタキが用いられる。しかし他方では口縁端部内面に退化しながらも段とどめ、蓋外面の口縁部一天井部間の稜および段にもぶいが残っており古い様相をみせる。この口縁端部の段は短頸壺にも共通する。杯では回転ヘラ削りも比較的広範囲である。高杯はすでに長脚化が始まっているが、短脚の可能性もあり、中間的な形態をとる。また蓋では口径が胴部の最大径を越え、新しい様相が窺われる。このようにI類は、中村治氏の陶邑編年によるとI~II期の過渡的様相を示すものである。さらに細かくみれば、II期1段階に属するものと考えられるが、I期に遡る可能性もある。

一方、II類は、杯身・蓋では小ぶりなものが多く、外面の稜線は不明瞭でヘラ削りも後退し調整は粗雑である。杯身のたちあがりも低く、口縁端部は丸くおさまる。高杯は長脚である。短頸壺では口縁端部が丸く底部へラ削りも狭い。II類は、調整、形態などからみてI類と大きく隔たるものではないが、全体的に後出的な要素が多い。

I類について周辺部で類例を求めるとき、四拾貫小原第17号古墳(三次市)、勇免第4号古墳<sup>(5)</sup>(三次市)、古保利第44号古墳(千代田町)などがあげられる。本古墳に近接する四拾貫小原第17号古墳では円筒埴輪とともに杯・壺などの須恵器が出土しており、中村・陶邑編年ではI期4段階に比定されている。また、古保利第44号古墳は本例に最も近い時期のものであり、各種の須恵器が出土した。杯・身蓋や壺などでみるとかぎり、本例より若干先行する様相を呈している。勇免第4号古墳出土土器とは本例の方が古いようなので、I類は両者の中間に位置するものと思われる。

##### ○製塙土器について

本古墳より出土した製塙土器は原位置を保つものではないが注目に値する資料である。

西日本の内陸部における製塙土器の出土例は近年かなり増加し、近隣では松ヶ迫F地点遺跡、

大成遺跡（庄原市）、境ヶ谷遺跡（庄原市）の発掘調査例がある。いずれも古墳時代の集落跡からの出土であるが、全国的にみてもこの時代の内陸部出土例は集落跡などに限られ、本例のように古墳から出土する例は今日知られている限りでは極めて稀である。そのため、内陸部の製埴土器については「…大半は古墳における『墓を基軸とした祭祀』とは性格を異にして」いるとも考えられている。海浜部の古墳では製埴土器を副葬するものがよくみられるが、本例のような内陸部での古墳出土例をどう理解していくのか。その性格について問題を投げかける資料である。

#### ○埴輪について

出土埴輪の大半を占める円筒埴輪は、外面が一次調整のタテハケのみで二次調整を省略されている。内面はハケメとナデのものがあるがハケメを施すものが多い。また、タガの形態は突出度が高いものと低いものがある。川西宏幸氏の編年によると、これらの特徴は一部の内面調整やタガにやや古い要素がみられるが概ね第V期に相当するものであると考えられる。ただ、同氏によれば底部調整はこの時期の特徴とされるが、本例では認められなかった。

ところで、本例では土師質のものもあるが、須恵質に近い硬質のものがかなりを占め、全体に黒斑をもつものがないこととあわせて、薪窯による焼成が想定される。このことは同時に須恵器の地方窯の存在を意味しており、当地域では少くともⅠ～Ⅱ期の過渡期にはすでにその生産が行なわれていたことが明らかとなった。このような須恵質の埴輪は県内でも数ヶ所で確認されているが、特に三玉第4号古墳（吉舎町）・瀬崎古墳（三原市）では本例と同様な4本のタガをもつと思われる須恵質の円筒埴輪が出土している。<sup>(9)</sup>

なお、円筒埴輪は先述のとおりヘラ記号・調整・タガの形態などより大きく2類（Ⅰ・Ⅱ類）に分けられ、各々が更に2つに細分できた。これは埴輪工人の員数を想定する際に有効であるが、この点については細部の検討を行った上で改めて問題にしたい。

最後に本古墳の埴輪を特色づける今一つのものは馬形埴輪である。非常に良好な状態で遺存しており、ほぼ完形に復元できた。県内では、三ツ城古墳（東広島市）、三玉大塚古墳（吉舎町）、久々原第6号古墳（三次市）、池の内第4号古墳（駅家町）などで出土している。確実なものとしては本例が5例目になり貴重な資料である。

（桑田）

#### 注

- (1) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『石鏡山古墳群』 1981年
- (2) (財)広島県埋蔵文化財調査センター『長迫遺跡発掘調査報告』 1982年
- (3) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『下山遺跡群発掘調査報告』 1980年
- (4) 大阪府教育委員会『陶邑』 1978年
- (5) 福井万千「三次市免古墳群の調査」『史学研究』第110号 広島史学研究会 1971年  
広島県及三郡三次市史料総覧編修委員会編『広島県及三郡三次市史料総覧』第5篇 1974年
- (6) 龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団『龍岩・古保利・上春木埋蔵文化財発掘調査報告書』 1976年
- (7) 岩本正二「製埴土器の分布と流通」『考古学研究』第27巻2号 1980年
- (8) 川西宏幸「円筒埴輪論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978年
- (9) 向田裕始氏（広島県立三次高等学校教諭）の御教示による。

第1表 緑岩古墳出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	調整技法の特徴	備考
1	須恵器杯蓋	口径 13.4 器高 4.5	天井部は平坦面を呈し、わずかに稜線を有し、垂下して口縁部となる。端部は沈線化されているがあま。	天井部回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。ロクロは左回り。天井部内面にわずかに同心円印を残す。	色調 濃灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
2	須恵器杯身	口径 12.1 受部径 14.5 器高 5.2	底部はわずかに平坦面を呈し、体部にかけて丸みをもつ。受部はやや外上方にのび、立上りはやや内傾する。端部は沈線化されるがあま。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。底面は回転ヘラ削り。ロクロは右回り。	色調 白灰色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 良好。
3	須恵器杯蓋	口径 15.0 器高 5.4	天井は丸みをもち、腰は丸く、沈線化される。体部はややふくらみ口縁部となる。端部は内傾し浅い沈線を入れる。	天井部回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。ロクロは左回り。	色調 白灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。 外側方に自然釉付着。
4	須恵器杯身	口径 12.0 受部径 14.5 器高 5.1	底部から体部へ丸みをもつ。受部はやや外上方にのび、立上りはやや内傾する。端部は内傾し浅い沈線を入れる。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。底面は回転ヘラ削り。ロクロは右回り。内面底部に同心円印をわずかに残す。	色調 灰色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 良好。
5	須恵器杯蓋	径口 13.1 器高 4.9	天井部はやや丸みをもち、腰はなく丸くなる。体部はやや外下方に閉く。端部は内傾する。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。ロクロは左回り。	色調 灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 色好。
6	須恵器杯身	口径 11.4 受部径 13.9 器高 6.0	底部から体部へ丸みをもち深い。受部はやや外上方にのび、立上りは内傾する。端部は内傾する。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。底面は回転ヘラ削り。ロクロは左回り。	色調 灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
7	須恵器杯蓋	口径 13.8 器高 4.9	天井部はやや平坦面を呈し、にぶい稜線をもつ。体部はやや丸みをもち口縁部となる。端部は内傾し浅い沈線を入れる。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。ロクロは右回り。	色調 灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。 外側方に自然釉付着。
8	須恵器杯身	口径 12.2 受部径 14.7 器高 4.9	底部より体部へ丸みをもち、ややひずみが生じる。受部は外方にのびる。立上りは内傾し、端部は丸い。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。底面は回転ヘラ削り。ロクロは右回り。底部内面に同心円印を残す。	色調 濃灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
9	須恵器杯蓋	口径 13.6 器高 4.4	天井部はやや丸みをもち、にぶい稜線をもつ。体部は短く丸みをもつ。端部は内傾する。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。ロクロは左回り。天井部内面にわずかに同心円印を残す。	色調 白灰色～灰色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 良好。

10	須恵器杯身	口 径 12.0 受部径 14.5 器 高 5.1	底部より体部へ丸みをもち、受部は外上方にのびる。立上りはやや外反気味になり、端部は内傾して浅い沈線を入れる。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロは右回り。	色調 淡灰褐色。 胎土 砂粒を含む。 焼成 良好。
11	須恵器杯蓋	口 径 14.3 器 高 5.2	天井部はやや丸みをもちにぶい接線をもつ。体部は丸みをもち、端部は内傾して浅い沈線を入れる。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。 ロクロは右回り。	色調 淡灰褐色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 良好。。
12	須恵器杯身	口 径 12.1 受部径 14.7 器 高 5.2	底部より体部にかけ丸みをもち、受部は外上方にのびる。立上りは内傾し浅い沈線を入れる。体部と受部の境界に深い沈線を入れる。	立上りはハリツケ手法か。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロは右回り。	色調 灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
13	須恵器杯蓋	口 径 14.9 器 高 5.2	天井部は丸みをもち、にぶい接線をもつ。体部は丸みをもち口縁部となる。端部は内傾し浅い沈線を入れる。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。 ロクロは右回り。天井部内面に同心円叩きを明瞭に残す。	色調 淡灰褐色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
14	須恵器杯身	口 径 12.5 受部径 14.9 器 高 5.4	底部は平坦面を呈し、体部は丸くなる。受部は外上方にのびる。立上りは内傾し、端部は内傾し沈線を入れる。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロは右回り。	色調 白灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
15	須恵器杯蓋	口 径 13.5 器 高 5.0	天井部は丸みをもち接線はない。体部は丸みをもち口縁部となる。端部は内傾し浅い段をなす。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。 ロクロは左回り。	色調 暗褐色～ 淡茶褐色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 良好。
16	須恵器杯身	口 径 12.0 受部径 14.0 器 高 5.2	底部はわずかに平坦面を呈し、体部へ丸くなる。受部は外上方にのび、端部は内傾し浅い沈線を入れる。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロは右回り。	色調 白灰色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 良好。
17	須恵器杯蓋	口 径 14.0 器 高 5.2	天井部は丸みをもち、接線なく丸みをもつ。体部は短くやや外反する。端部は内傾し浅い沈線を入れる。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。 ロクロは左回り。天井部内面にラフな仕上げナデ。	色調 白灰色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 良好。
18	須恵器杯身	口 径 12.2 受部径 14.6 器 高 5.0	底部はわずかに平坦面を呈し、体部へ丸みをもつ。受部は外上方へのび、立上りは内傾する。端部は内傾して浅い沈線を入れる。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロ左回り。底部内部にラフな仕上げナデ。	色調 白灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。

19	須恵器杯蓋	口径 14.6 器高 5.1	天井部はわずかに平坦面を呈し、にぶい稜線をもつ。体部はわずかに丸みをもち口縁部となる。端部は内傾して浅い沈線を入れる。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。 ロクロは左回り。	色調 白灰色～淡灰褐色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 良好。
20	須恵器杯身	口径 12.2 受部径 14.4 器高 5.3	底部は平坦面を呈し、体部へ丸みをもつ。受部は外方へのび、立上りは内傾する。端部は内傾し浅い沈線を入れる。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロは右回り。 底部内面に指圧痕が明瞭に7個残る。	色調 白灰色～淡灰白色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 良好。
21	須恵器杯蓋	口径 13.7 器高 4.9	天井部はわずかに平坦面を呈し、にぶい稜線をもつ。体部はわずかに丸みをもち口縁部となる。端部は内傾し沈線を入れる。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。 ロクロは左回り。	色調 灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
22	須恵器杯身	口径 12.3 受部径 14.8 器高 5.3	底部から体部へ丸みをもち、受部は外方にのびる。立上りは内傾し、端部は内傾し、浅い沈線を入れる。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロは左回り。 底部内面に同心円印きがわずかに残る。	色調 白灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
23	須恵器杯蓋	口径 17.7 器高 5.1	天井部は丸みをもち、にぶい稜線をもつ。体部は丸みをもち口縁部となる。端部は丸みをもち浅い沈線を入れる。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。 ロクロは右回り。	色調 灰色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 良好。
24	須恵器杯身	口径 13.9 受部径 16.0 器高 5.5	底部から体部へ丸みをもち、受部は外上方へのびる。立上りは内傾した口縁部となり、端部は丸く浅い沈線を入れる。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロは左回り。	色調 灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
25	須恵器杯蓋	口径 13.2 器高 5.1	天井部は丸みをもち、鋭い稜線をもつ。体部はわずかに丸みをもち口縁部となる。端部は内傾し浅い沈線を入れる。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。 ロクロは右回り。	色調 淡灰色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 良好。
26	須恵器杯蓋	口径 12.7 器高 4.9	天井部はわずかに平坦面を呈し、にぶい稜線をもつ。体部は垂下し口縁部になる。端部は内傾し沈線を入れる。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。 ロクロは右回り。	色調 白灰色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 普通。
27	須恵器杯蓋	口径 13.4 器高 5.0	天井部は丸みをもち、にぶい稜線をもつ。体部は外傾し口縁部となる。端部は内傾し浅い沈線を入れる。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。 ロクロは右回り。	色調 灰色。 胎土 砂粒を含む。 焼成 良好。

28	須恵器杯蓋	口 径 13.1 器 高 4.6	天井部は丸みをもち、わずかににぶい稜線をもつ。体部は垂下し口縁部となる。端部は内傾し浅い沈線を入れる。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。ロクロは右回り。	色調 白灰色～灰色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 普通。
29	須恵器杯蓋	口 径 13.1 器 高 5.3	天井部は平坦面を呈し、にぶい稜線をもつ。体部は垂下し、端部は尖り浅い沈線を入れる。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。ロクロは右回り。天井部内面に同心円印きをわずかに残す。	色調 灰色～濃灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
30	須恵器杯蓋	口 径 13.8 器 高 4.7	天井部は丸みをもち、体部との境界は丸く稜線ではなく、沈線を2条回す。体部は丸く口縁部となる。端部は内傾し尖る。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。ロクロは左回り。	色調 灰色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 良好。
31	須恵器杯蓋	口径(推)12.6	天井部から体部へ丸くなり、にぶい稜線をもつ。体部は強く開いて口縁部となる。端部は丸くおさめる。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。ロクロは左回り。	色調 灰色。 焼成 良好。
32	須恵器杯身	口 径 11.4 受部径 13.6 器 高 4.7	底部はわずかに平坦面を呈す。受部は外上方へのび、立上りはわずかに内反する。端部は内傾して浅い沈線を回す。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。底部は回転ヘラ削り。ロクロは右回り。	色調 灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
33	須恵器杯身	口 径 11.1 受部径 13.2 器 高 4.2	底部は旋きひずみのため凹凸が生じる。受部はわずかに外上方にのび、立上りは内反する。端部は丸くおさめる。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。底部は回転ヘラ削り。ロクロは右回り。底部内面にわずかに同心円印きを残す。	色調 灰色～濃灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
34	須恵器杯身	口 径 11.5 受部径 13.3 器 高 5.1	底部から体部へ丸みをもち、受部は外上方にのびる。立上りは内傾して口縁部となり、端部は内傾して浅い沈線を回す。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。底部は回転ヘラ削り。ロクロは右回り。底部内面にわずかに同心円印きを残す。	色調 濃灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
35・36	須恵器 有蓋短頭壺	蓋口径 10.1 器 高 4.3	蓋 天井部から体部へ丸みをもち、体部は垂下して口縁部となる。端部は内傾し段を造出す。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。ロクロは右回り。天井部内面にラフな仕上げナデ。	色調 濃灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
		壺口径 8.0 器 高 8.0	壺 口頭部は基部より内傾して立上り、端部は内傾し浅い沈線を回す。体部は基部より外反して下り、更に内湾して底部に至る。	底部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。ロクロは右回り。	色調 濃灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。

37	須恵器高杯	杯脚部径 8.0	底部よりやや外反して開き、やや外方に肥厚して段をなし、内腹にして輪郭となる。脚部の三方に下辺 2.2cm の方形透しを外から内へ穿っている。	ミズヒキ成形。脚部にカキ目痕あり。	色調 濃灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
38	土師器壺	口 径 9.4 最大胴径12.9 器 高 13.6	胸部はほぼ球形を呈し、口縁部は外反して外上方にのび、端部は丸くおさめる。	内面 体部上半ヘラ削り、下半は指頭による調整。口縁部横ナデ。 外面 体部下半ラフな刷毛調整。上半ナデ。口縁部横ナデ。	色調 赤褐色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
39	製塙土器	口径(推) 7.8 器高(推) 5.8	底部はわずかに平坦面を呈し、体部より口縁部にわずかに内湾して立上る。端部は丸くおさめる。	内面 口縁より体部に継位の刷毛調整。 底部は指頭圧痕有り。 外面 体部下半より底部へ指頭圧痕有り。	色調 白灰色、内外面とも底部赤姿。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 普通。
40	須恵器杯蓋	口 径 12.3 器 高 4.3	天井部より体部へ丸みをもち後線はない。体部はやや外方へ開き、口縁部は更に外方へ開く。端部は尖る。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。 ロクロは左回り。	色調 濃灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
41	須恵器杯蓋	口 径 12.2 器 高 4.3	天井部より体部へ丸みをもち後線はない。体部はわずかに丸みをもち、端部は内傾して浅い沈線を出す。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。 ロクロは左回り。	色調 灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
42	須恵器杯蓋	口 径 12.4 器 高 3.9	天井部より体部へ丸みをもち後線はない。体部はわずかに外方に開き、口縁部は更に外方に開く。端部は内傾し浅い沈線を出す。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。 ロクロは右回り。	色調 灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
43	須恵器杯蓋	口 径 11.9 器 高 4.2	天井部より体部へ丸みをもち後線はない。体部はやや丸みをもち口縁部になる。端部は内傾して浅い沈線を出す。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。 ロクロは左回り。	色調 濃灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
44	須恵器杯身	口 径 10.8 受部径 12.8 器 高 4.4	底部より体部へ丸みをもち、受部は外方へのびる。立上りはやや内反して立上り、端部は丸くおさめる。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロは左回り。	色調 濃灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
45	須恵器杯身	口 径 10.4 受部径 12.3 器 高 4.4	底部はやや尖り、体部へは丸みをもつ。受部は外方へのび、立上りは内反して立上り、端部は丸くおさめる。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロは左回り。	色調 灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。

46	須恵器杯身	口 径 10.6 受部径 12.6 器 高 4.3	底部より体部へ丸みをもち、受部は外上方へのびる。立上りはやや内反してのび、端部は丸くおさめる。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロは左回り。	色調 淡灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
47	須恵器杯身	口 径 10.6 受部径 12.7 器 高 4.4	底部より体部へ丸みをもち、受部は外上方へのびる。立上りはやや内反し、端部は丸くおさめる。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロは左回り。	色調 淡灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。 体部外面に自然釉付着。
48	須恵器要	口 径 18.9 最大胴径31.2 器高(推)33.8	頸部より口縁部にかけては外反気味に立上り、端部は断面M字状に肥厚させ、やや上方につまみあげる。体部は球形を呈し、最大胴径は中位に有る。底部は丸底。土器破壊の際、内側より穿孔。	内面 口縁部横ナデ。体部より底部同心円叩き。 外面 口縫部横ナデ。口頭部縦脚毛後横ナデ。体部上半平行叩きの後、ヘラ状工具によるカキ目。体部下半より底部格子目叩き。	色調 淡灰色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 良好。
49	須恵器要		胸部破片。	内面同心円叩き。外面平行叩き。	色調 淡灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
50	須恵器杯蓋	口 径 14.0 器 高 5.0	天井部は丸みをもち、にぶい後線をもつ。体部は外方に開いて口縁部となる。端部は内傾する。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。 ロクロは左回り。天井部内面に仕上げナデ有り。	色調 淡灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
51	須恵器杯蓋	口 径 13.6 器 高 4.3	天井部より体部へ丸みをもち、にぶい後線をもつ。体部は内湾気味に外方に開き口縁部となり、口端部は丸くおさめる。	天井部は回転ヘラ削り。ミズヒキ成形。 ロクロは右回り。	色調 灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
52	須恵器杯身	口 径 11.3 受部径 13.7 器 高 5.4	底部はわずかに平坦面を呈し、体部にかけ丸みをもつ。受部は外上方にのび、立上りは強く内傾した後、更に上方にのび端部となる。端部は内傾し沈線を回す。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロは右回りか。	色調 淡灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
53	須恵器杯身	口 径 12.0 受部径 14.6 器 高 5.4	底部は広い平坦面を呈し体部へは丸みをもつ。受部は外上方のび、立上りはやや内反気味に立上る。端部は内傾し浅い沈線を入れる。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。 底部はラフなヘラ削りで体部との境界付近のみ回転ヘラ削り。ロクロは右回り。	色調 淡灰色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 良好。

54	須恵器杯身	口径 12.0 受部径 14.4 器高 5.5	底部より体部へは丸みをもち、受部は外上方にのびる。立上りはわざかに内反してのび、端部は内傾し浅い沈線を入れる。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロは不明。	色調 灰褐色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。 底部外面に自然釉付着。
55	須恵器杯身	口径(推)11.7 受部径(推)13.5 残高 5.2	体部は丸みをもち、受部は外方にのびる。立上りはやや内傾し、端部は内傾し浅い沈線を入れる。	立上りはオリコミ手法か。ミズヒキ成形。 体部は回転ヘラ削り。ロクロは左回り。	色調 淡灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
56	須恵器杯身	口径 12.2 受部径 14.0 器高 5.4	底部より体部へは丸みをもち、受部は外方にのびる。立上りはやや内反気味に立上り、端部は尖る。	立上りはオリコミ手法か。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロは右回り。	色調 淡灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 普通。
57	須恵器杯身	口径(推)11.1 受部径 13.2 器高 5.0	底部より体部へは丸みをもち、受部は外上方にのびる。立上りはやや内反してのび、端部は尖る。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロは左回り。	色調 淡灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
58	須恵器杯身	口径(推)13.0 受部径(推)15.1 残高 3.1	受部は外上方にのび、立上りは内傾して端部となる。端部は内傾し浅い沈線を入れる。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。	色調 灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 良好。
59	須恵器杯身	口径(推)11.1 受部径(推)13.7 器高 4.1	底部は平坦面を呈し、体部にかけ丸みをもつ。受部は外上方にのび、立上りはやや内反してのび、端部は丸くなり内側に沈線を回す。	立上りはオリコミ手法。ミズヒキ成形。 底部は回転ヘラ削り。ロクロは右回り。	色調 淡灰色。 胎土 細砂粒を多含。 焼成 普通。
60	須恵器壺	口径 11.7 器高 10.7 最大胴径 9.5	口頸部は直線的に外反し口縁部との境に凸線を有する。口縁部は外反し、端部内面に一段の沈線を有する。	口頸部に波状文を施す。底部静止ヘラ削りの後ナデ。口縁内外とも横ナデ。マキアゲ、ミズヒキ成形。	色調 淡青灰色。 胎土 密。 焼成 良好。
61	須恵器有蓋短 頸壺 (瓶)	口径 10.9 器高(推) 3.8	天井部は丸みを帯び、ゆるい稜線を有する。口縁部はやや外反する。端部は内傾し1条の沈線を有する。	天井部は回転ヘラ削り。ロクロは右回り。マキアゲ、ミズヒキ成形。	色調 灰をかぶっている。 胎土 1mm内外の砂粒を多含。 焼成 良好。
62	須恵器有蓋短 頸壺	口径 7.9 器高 7.4	口縁は基部より内傾し立上る。肩部と体部の境は明確な稜線を有す。	底部は回転ヘラ削り。ロクロは右回り。マキアゲ、ミズヒキ成形。	色調 暗緑灰色。 胎土 やや密で砂粒を含む。 焼成 良好。 自然釉付着。

63	須恵器有蓋短 頸壺	口径 8.2	口縁は直立気味に立上る。肩部は外反し 体部に至る。	体部にカキ目有り。マキアゲ、ミズヒキ 成形。	色調 淡灰色。 胎土 密。 焼成 良好。
64	須恵器有蓋短 頸壺	口径 7.0 器高 9.1	口縁部はやや外反気味に立上る。肩部は 内傾し浅い沈線を有する。	底部は回転ヘラ削り。コクロは右回り。 マキアゲ、ミズヒキ成形。底部以外回転 ナデ調整。	色調 淡青灰色。 胎土 密。 焼成 良好。
65	須恵器	口径(推) 11.0	口頸部に浅い沈線を2条有する。肩部は 丸い。	回転ナデ調整。	色調 淡青灰色。 胎土 密。 焼成 良好。
66	須恵器高杯脚			カキ目文様。透しは3つか。	色調 暗灰色。 胎土 密で細散砂粒を 含む。 焼成 良好。
67	土師器壺	口径(推)11.4 器高(推)18.0 最大肩径 (推)15.0	口頸部は肩部より外反しながら立上る。 口縁端部は丸い。底部は球形を呈してい る。	口頸部は内外ともナデ。体部は指頭調整。 内面はヘラ削り。底部は穿孔か。	色調 赤褐色。 胎土 白石砂粒を含む、 焼成 普通。
68	土師器壺	口径(推)14.6	肩部より直立して立上り、さらに外反し て口縁に至る。	肩部に刷毛目。口頸部は内外ともナデに よる。	色調 淡乳褐色。 胎土 1mm大の砂粒を 含む。 焼成 不良。
69	土師器壺	口径(推)8.7 器高 7.3	口縁部はく字状に立上る。体部はゆるや かな曲線を呈し平面的な底部に至る。	体部は内外とも指頭成形。口縁は内外と もナデによる。手づくね土器か。	色調 淡赤褐色。 胎土 やや密。 焼成 普通。
70	土師質土器皿	口径(推)8.9 器高(推)1.8	口縁部は内傾しながら外反する。	底部は回転ヘラ切り。口縁の内面はナデ 調整。	色調 淡灰色。 胎土 密。 焼成 普通。
71	土師質土器皿	底部径 (推)6.2		底部は回転ヘラ切り。内面はナデ調整。	色調 淡灰色。 胎土 やや密。 焼成 普通。

第2表 緑岩古墳出土埴輪観察表

出土 区名	番号	器種	法量・残存部位 (cm) タガ 形狀	形態の特徴		整形技法の特徴					備考	
				透し孔	その他の 記号	ヘラ 記号	口縁調整	ハケ条数	タガ	その他の 記号		
2区	77	円筒	(完形) 口径31.6～33.9 底径18.8～20.0 器高42.9～49.8	A	2段目(2) 3段目(2)	基底部より外反 しながら立上り、 口縁に至る。	欠損	指ヨコナデ (端部)	(内外) 6条/cm	指ヨコナデ	(内外) 左上り斜 行タテハケ。	色調 茶褐色。 胎土 1～2mm大 の石粒及び砂 粒を多含。 焼成 良好。
4区	78	円筒	(完形) 口径32.0～37.0 底径26.5 器高52.4	A	2段目(2) 3段目(2)	基底部より第2 段、3段目まで 直立的に立上 り、そこから外 反しながら口縁 に至る。焼きひ ずみが大きい。	~	指ヨコナデ (端部)	(内外) 5～6条/cm	指ヨコナデ	(内外) 左上り斜 行タテハケ (外) (右一左, 下→上)	色調 暗褐色～淡 赤褐色。 胎土 1～2mm大 の石粒及び砂 粒を多含。 焼成 上半 分は特に硬 質。
3区	79	円筒	(完形) 口径26.0～39.5 底径22.2～30.0 器高50.0～51.6	A	2段目(2) 3段目(2)	基底部より口縁 まで外反しなが ら立上る。 端部は平面である。 焼きひずみが大 きい。	~	指ヨコナデ	(内外) 4～6条/cm	指ヨコナデ	(内外) 左上り斜 行タテハケ	色調 茶褐色。 胎土 1～2mm大 の石粒及び砂 粒を多含。 焼成 良好。堅板。
4区	80	円筒	(完形) 口径36.2～39.1 底径(推) 26.5～30.5 器高49.8	A	2段目(2) 3段目(2)	基底部より4段 目までゆるやかに 外反し、5段目 よりさらに外 反し、口縁に至 る。端部は少し 凹んでいる。逆 L字状を呈する	~	指ヨコナデ	(内外) 3～5条/cm	指ヨコナデ	(内外) 左上り斜 行タテハケ 外面口縁部のみ 左上りヨコハ ケ	色調 暗黄褐色を 基調。一部、 暗褐色、暗茶 褐色。 胎土 1～2mm大 の石粒及び砂 粒を含む。 焼成 良好。
3区	81	円筒	(完形) 口径33.1～35.6 底径15.2～33.0 器高48.6	A	2段目(2) 3段目(2)	基底部より口縁 までゆるやかに 外反しながら立 上っている。 1段目の焼きひ ずみで大きいため 一定ではない。 端部少し凹 み有り。	~	指ヨコナデ	(外) 4～5条/cm	指ヨコナデ	(内外) 左上り斜 行ハケ 口縁部のみヨ コハケ (外) (右一左, 下→上)	色調 暗茶褐色～ 暗黄褐色。 胎土 砂粒を含む。 焼成 良好。硬質。

1区 2区	82	円筒	(完形) 口径(推) 26.5~40.5 底径27.1 器高52.7	A	2段目(2) 3段目(2)	基底部より1段目はやや内傾して立ち上り、2段目から5段目までゆるやかに外反しながら立ち上り、口縁に至る。端部は少し凹んでいる。	~	指ヨコナデ	(外) 3~5条/cm	指ヨコナデ	(内外) 左上り斜行タテハケ 口縁部のみヨコハケ (右一左、ヨコハケ)	色調 暗褐色~黄褐色。 胎土 砂粒を含む。 焼成 良好。堅致。
4区	83	円筒	(完形) 口径(推)33.9 底径(推)24.9 器高47.3	A	2段目 3段目	基底部より4段目までゆるやかに外反しつつ立ち上る。5段目よりさらに外反し、口縁に至る。口縁端部は少し凹んでいる。上下端はひずみが著しい。	~	指ヨコナデ	(内外) 4条/cm	ヨコナデ 上端のみ重複する。	(内外) 左上り斜行タテハケ (内) 部分的に指圧痕	色調 上半は灰褐色で硬質、下半は明赤褐色。 胎土 3mm大の石粒及び砂粒を多含。 焼成 良好。堅致。
1区	84	円筒	口径29.7+α 底径24.8前後 器高52	B	2段目 3段目	基底部よりゆるやかに外反しながら口縁に至る。口縁端部は少し凹んでいる。	~	指ナデ	(外) 3~6条/cm	指ヨコナデ	(外) 左上り斜行タテハケ (内) 指ナデ	色調 淡褐色。 胎土 砂粒を多含 5~7mm大の石粒も含む。 焼成 良好。
4区	85	円筒	口縁部	A		口縁端部はやや内傾している。	~	指ヨコナデ	(内外) 5条/cm	指ヨコナデ	(内外) 左上り斜行タテハケ (内) ヨコハケに近い	色調 茶褐色。 胎土 砂粒を含む。 焼成 良好。
4区	86	円筒	口縁部				~	指ヨコナデ	(内外) 4条/cm		(外) 左上り斜行タテハケ (内) 黒いヨコハケ	色調 暗褐色。 胎土 1~2mm大の石粒多含。 焼成 良好。
1区	87	円筒	口縁部				~	ヨコナデ	(内外) 6条/cm		(外) 左上り斜行タテハケ (内) やや左上りヨコハケ	色調 淡褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 普通。
2区	88	円筒	口縁部				~	ヨコナデ	(内外) 4~5条/cm		(外左) 上り斜行タテハケ (内) タテハケの後、ヘラナデ	色調 (外) 淡赤褐色 (内) 暗黄褐色。 胎土 砂粒を多含。 焼成 普通。

4区	89	円筒	口縁部			~	指ヨコナデ (内外) 6条/cm		(外) 左上り斜行 タテハケ (内) やや左上り のヨコハケ	色調 黄褐色。 胎土 石粒多し。 焼成 普通。
3区	90	円筒	口縁部	A		~	ヨコナデ 内面一部に 及ぶ	(内外) 5~6条/cm	指ヨコナデ (内) 左上り斜行 タテハケ	色調 茶褐色(タ ガ部のみ赤褐色) 胎土 1mm以下の 砂粒を含む。 焼成 良好。
3区	91	円筒	口縁部	A		~		(外) 5条/cm (内) 6条/cm	指ヨコナデ (内) ヨコハケ 一部指頭圧痕	色調 淡褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 普通。
3区	92	円筒	口縁部			~	ヨコナデ 内面の一部 に及ぶ。	(内外) 6条/cm	(外) 左上り斜行 タテハケ (内) 左上りのヨ コハケ	色調 黄褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 普通。
4区	93	円筒	口縁部	A		~	ヨコナデ (内外) 5条/cm	指ヨコナデ	(外) 左上り斜行 タテハケ (内) 左上り斜行 タテハケ	色調 赤褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 普通。
1区	94	円筒	口縁部	A		~	ヨコナデ 内面の一部 に及ぶ。	(外) 4条/cm (内) 5条/cm	指ヨコナデ (内) 左上りのヨ コハケ 一部指頭圧痕	色調 暗茶褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 良好。
4区	95	円筒	口縁部	A		~	ヨコナデ (内外) 5条/cm	指ヨコナデ	(外) 左上り斜行 タテハケ (内) ヨコハケ→ 左上りのヨコ ハケ	色調 黄褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 普通。
4区	96	円筒	口縁部	A		~	ヨコナデ 内面の一部 に及ぶ。	(内外) 5条/cm	指ヨコナデ (内) 左上りのヨ コハケ 一部指頭圧痕	色調 淡赤褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 普通。

3区	97	円筒	口縁部			ヘ	ヨコナデ 内面の一部 に及ぶ。	(内外) 6条/cm		(外) 左上り斜行 タテハケ (内) ヨコナデ	色調 茶褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 良好。
1区	98	円筒	口縁部		口縁部はわずかに逆L字を呈す。	ヘ	ヨコナデ 内面の一部 に及ぶ。	(外) 5条/cm		(外) 左上り斜行 タテハケ (内) ヨコハケ	色調 淡褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 普通。
3区	99	円筒	口縁部			ヘ	ヨコナデ 内面の一部 に及ぶ。	(内外) 5条/cm		(外) 左上り斜行 タテハケ (内) 左上りのヨコハケ 一部指頭圧痕	色調 淡褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 良好。
3区	100	円筒	口縁部			ヘ	ヨコナデ	(内外) 5条/cm		(外) 左上り斜行 タテハケ (内) 左上りのヨコハケ	色調 淡褐色。 胎土 砂粒含。 焼成 普通。
2区	101	円筒	口縁部			ヘ	ヨコナデ 内面の一部 に及ぶ。	(内外) 4条/cm		(外) 左上り斜行 タテハケ (内) 左上りのヨコハケ	色調 淡赤褐色。 胎土 砂粒含。 焼成 普通。
4区	102	円筒	口縁部	B	口縁部は強く外反して開く。	コ	ヨコナデ	(外) 4~5条/cm	指ヨコナデ	(外) 左上り斜行 タテハケ (内) 指ヨコナデ 一部指頭圧痕	色調 淡茶褐色。 胎土 砂粒含。 焼成 やや良好。
3区	103	円筒	口縁部	B		コ	ヨコナデ 内面の一部 に及ぶ。	(外) 6条/cm	指ヨコナデ	(外) 左上り斜行 タテハケ (内) 指ヨコナデ	色調 淡褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 良好。

3区 4区	104	円筒	口縁部	B			□ ヨコナデ	(外) 4条/cm	指ヨコナデ	(外) タテハケ (内) 左上りの指 ヨコナデ	色調 淡赤褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 普通。
1区	105	円筒	口縁部				□ ヨコナデ	(外) 6条/cm		(外) 左上り斜行 タテハケ (内) 指ヨコナデ	色調 淡褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 普通。
3区	106	円筒	口縁部				□ ヨコナデ	(外) 5条/cm		(外) 左上り斜行 タテハケ (内) 左上りの指 ヨコナデ	色調 淡褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 普通。
1区	107	円筒	口縁部	B			□ ヨコナデ	(外) 6~8条/cm	指ヨコナデ	(外) タテハケ (内) ヨコナデ 一部指頭圧痕	色調 淡茶褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 普通
	108	円筒	口縁部	B			□ ヨコナデ?	(外) 6条/cm	指ヨコナデ	(外) 左上り斜行 タテハケ (内) 左上りの指 ナデ	色調 赤褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 やや質硬。
2区	109	朝顔	(完形) 口径 37.5 底径 23.9 器高 68.6	A	2段目(2) 3段目(2)	口縁部は直立気味に外反し端部付近は水平に近く開く。肩部の張りは弱くなく肩である。全体に焼き歪みは少ない。	(内) ヨコナデ (外) タテハケ 端部付近はハケ後指ナデ。	(内外) 3~5条/cm	指ヨコナデ	(外) 左上り斜行 タテハケ(上段へいくに従い継続方向となる) (内) くびれ部以上はヨコ・左上りヨコハケ以下は指ナデ	色調 黄褐色~ 暗黄褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 やや軟質。
1区	110	朝顔	口径 38.2	A		口縁はほぼ垂直に立ち上り、より大きく外反し、水平よりもさらに反りかえる。端部はやや凹んでし字を倒した状態となる。	指ヨコナデ (端部)	(外) 3~6条/cm (内) 4~5条	指ヨコナデ	(外) 整然とした タテハケ (内) ヨコハケ	色調 赤味かかった 黄褐色。 胎土 砂粒多含、 3mm大石粒含。 焼成 やや良好。

1区	111	朝顔	くびれ部	A	内傾しながら立ち上り、36より外反する。		(外) 3~5条/cm (内) 5条/cm	指ヨコナデ	(外) 左斜タテハケ (内) 左上りヨコハケ後、部分的に指ナデでハケ目を消す	色調 赤味かかった黄褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 やや良好。
2区	112	朝顔	口径 21.6		口縁へ向って外反し、端部は凹んでいる。	指ヨコナデ	(外) 3条/cm (内) 3条/cm		(外) 左上り斜行タテハケ(やや荒い) (内) 荒いヨコ、左上ヨコ方向のハケ	色調 淡赤褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 やや軟質。
2区	113	朝顔	体部	A	垂直に立ち上りやや内傾した後外反する。		(外) 3条/cm	指ヨコナデ	(外) やや左上り斜行タテハケ (内) 左斜押圧気味に指ナデ成形接合痕を残す。	色調 淡赤褐色。 胎土 砂粒多含。 焼成 やや軟質。 タガに丹塗り痕有り。
2区	114	人物					(外) 4~5条/cm		(外) 多方向のハケ目調整、1部分に限もうの為か消滅している。 (内) ナデ	色調 淡赤褐色。 胎土 やや密、砂粒含。 焼成 軟質。
2区	115	人物					(外) 3~5条/cm		(外) ほぼ一定方向のハケ目調整、部分的にハケ目隠滅 (内) ナデ	色調 淡赤褐色。 胎土 1mm内外の砂粒含。 焼成 軟質。
2区	116	人物	顔の一部か?				(外) 3~4条/cm		(外) 多方向ハケ目調整 (内) ナデ	色調 淡赤褐色。 胎土 比較的密。 焼成 軟質。

\* 底部調整はすべての個体にみられないため省略した。

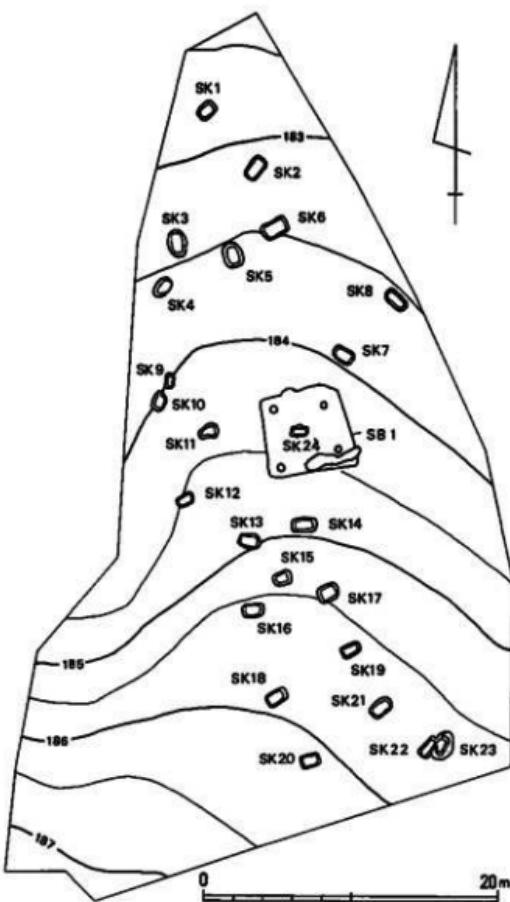
## IV 緑岩遺跡

本遺跡は、緑岩古墳のある丘陵の東側先端部にあり、前面眼下には馬洗川および四拾貫町の丘陵地帯を見おろすことができる。標高は180~190mで現水田よりの比高は約20mである。遺跡は、2つに分岐した緩斜丘陵の尾根上に立地し、調査の便宜上、南調査区・中調査区・北調査区に区分して調査を実施した。

### (1) 南・中調査区

南調査区は、東西約50mの東側先端部に向って扇状に広くなる丘陵上に立地し、遺構は尾根主軸より北側寄りの緩斜面に偏っていた。検出した遺構は住居跡1軒、土塙24基である。住居跡は平面がややいびつな台形で、4本柱を伴い、須恵器、土師器が出土している。時期は6世紀後半である。土塙群は遺物を伴わないので時期不明であるが、住居跡や土塙相互の切り合い関係より下限および共存関係の一面向を知ることができた。

一方、中調査区では、不整形な土塙や風倒木状遺構が確認されたが、明確に遺構と認められるものはなかった。遺物は鉢形土器1点が出土しているが遺構に伴ったものではない。

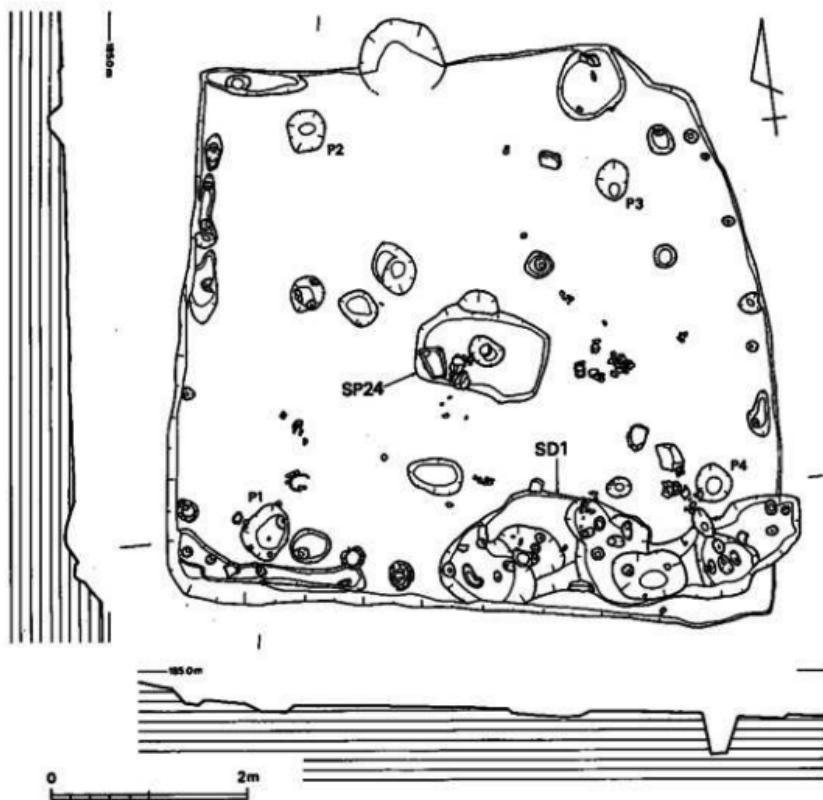


第IV-1図 緑岩遺跡南区遺構配置図 (1:400)

## 1) 検出の遺構

### a) 第1号住居跡 (第VI-2図)

北に緩やかに下降する調査区のほぼ中央に位置する。いびつな台形を平面形とする堅穴式住居跡で、西辺5.2m、南辺6.4mを測る。北壁が南壁に比して約1.5m短いため東壁の北半が不揃いとなっている。現存壁高は3~20cmで北側は遺存が悪い。住居跡内西半には幅25~30cm、深さ6cm程の堅溝がめぐる。東半は溝SD1に切られていることなどから遺存状態が良好でない。主柱穴はP1(径45×60cm、深さ12cm), P2(径40cm、深さ20cm), P3(径30×40cm、深さ7cm), P4(径40cm、深さ42cm)の4本である。ただ、深さがやや不揃いでP1・P3が極端



第VI-2図 緑岩遺跡南区第1号住居跡実測図 (1:60)

に浅い。柱間は P 1—P 2 間が 4.2m, P 2—P 3 間が 3.2m, P 3—P 4 が 3.2m, P 4—P 1 で 4.6m を測る。住居跡南辺のほぼ中央西寄りでは西側の壁溝がとぎれており、上部がほぼ完形の土師器（甕）が出土したことなどから、造付けカマド部分かと推定された。ただ、壁外周辺の精査にもかかわらず、煙道等は確認できなかった。南壁の東半付近には不整形な溝（S D 1）が検出された。この溝は、幅 0.3~1m, 長さ 3.7m で東に向って幅狭となっている。溝内には大小様々なビットがあり、そのため深さは一定しないが、5~20cm 程度である。性格については住居内の床下排水溝かと思われたが、溝東端が住居跡の東壁の一部を切っているところから、SB 1 に伴うものではなくそれより後の遺構の可能性が強い。また住居跡中央からは長さ 134cm, 幅 84cm, 深さ 51cm の土塙（SK 24）が検出された。検出当初は住居跡に伴うものかと思われたが、住居内流入土や土塙内の状態より、SB 1 より先行するものであることが明らかとなつた。住居跡床面に相当する土塙直上部には、焼成を受けた扁平な石材（20×30cm 大 1 個、15×20cm 大 2 個）が検出され、その周辺から瓶の把手部が 3 点出土した。この点も SB 1 と SK 24 の先後関係を示すものである。同大の石材は住居内東半より点々と検出されたが、付属施設らしきものではなかつた。

遺物としては、須恵器の杯身 3 個体（1~3）、土師器の甕および瓶 5~7 個体（4~12）、高杯 1 個体（13）がある。大半は床面上から出土で、住居跡南半に点在していた。

#### b) 土塙群 SK 1~24 (第 VI-3~8 図)

土塙群は、丘陵平坦部より北側の小谷部へ向けて群在している。これらは、分布状態・規模及び構造・流入土の状況などより幾つかのグループに分類できる。

まず土塙群の分布についてみると、4ないし 5つの群に分けられる。第 1 群（SK 1~6）は最も北側に位置するものである。土塙間の距離は 1.6~4m で、他の土塙のうち最も近い SK 9 からは 5.2m、SK 8 では 8m と隔たつてある。また各土塙の主軸方位では SK 1・2・4・6、SK 3・5 がそれぞれ同一方向を示している。第 2 群は SK 7・8・24 であり、土塙間隔は 4~5m で、方位はほぼ一定している。第 3 群は SK 9~12 である。各土塙は間隔がやや不定で、方位も 2 つに分けられる。最後に SK 13~23 は 4ないし 2つのグループに分けられる。SK 15 を除く各土塙は、南から北方向へ緩やかな弧を描きながら並んでおり、間隔・主軸方位ともほぼ一致する。しかも、2列縦帶であるので SK 13・16・18・20 と SK 14・17・19・21・22 (あるいは 23) の 2 群に分けられる可能性もある。SK 22 と SK 23 は切り離し関係にあり、SK 22 が SK 23 によって切られていた。

次にこれらの分類に基づいて各々の土塙自体の比較をすると、第 1 群については平面形は SK 3 が不整橢円形を呈す以外は長方形である。さらに底部ビットについても同様に SK 3 だけが伴わないので、この土塙は他のものと区別できる。規模は上縁で長さ 137~177cm、幅 90~127cm、深さ 55~131cm と格差が大きく、共通点は見出しづらい。それに対し第 2 群（SK 7・8・24）は比較的共通する要素が多く、平面形は長方形で底部には小ビットを伴い、規模も本来はほぼ同等であったと思われる。第 3 群（SK 9~12）では、SK 9・10 が平面形・底部ビット

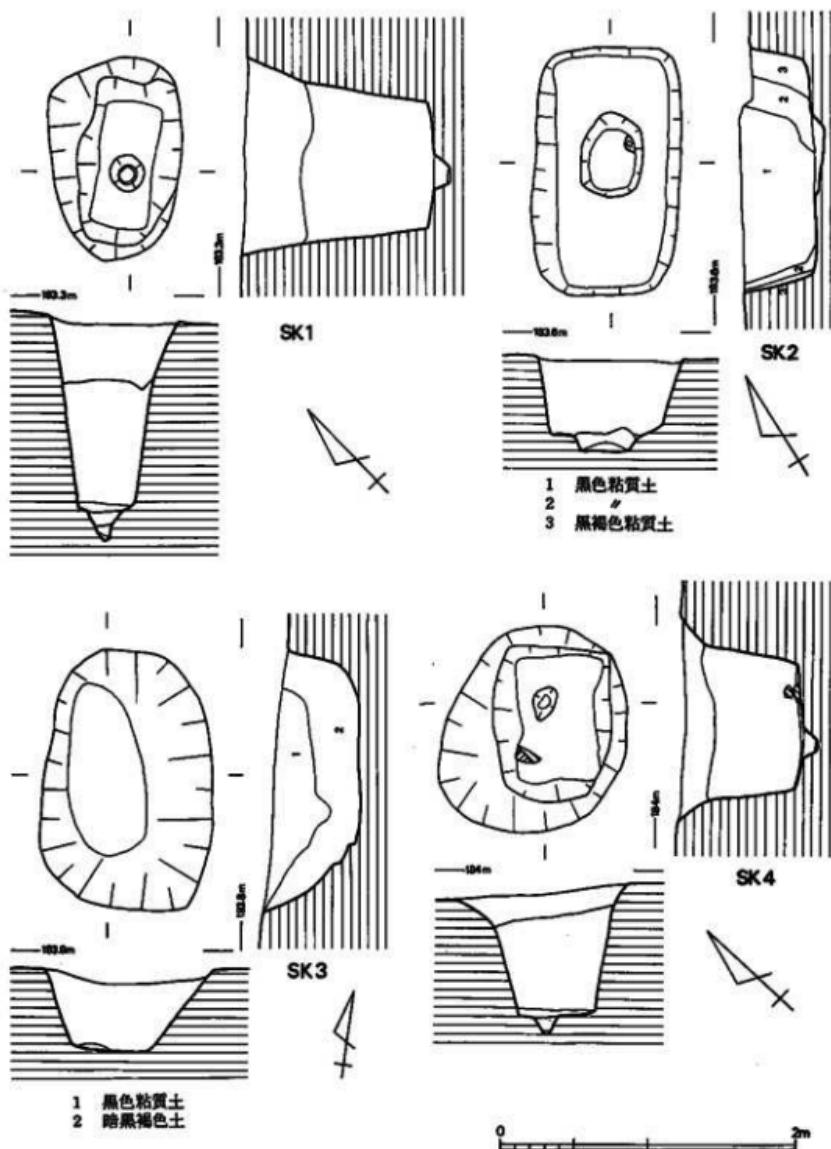
・規模（深さ）の諸点で SK11・12と区別される。第4群は平面形はいずれも長方形であるが、長さに対する幅の比率の大きいもの（SK16・17・20・23など）と比率が小さく細長いもの（SK18・19・21など）がある。規模は長さ120～169cm、幅72～118cm、深さ62～100cmである。

以上のように、各グループの土塙は形態・規模・構造などの諸点において各種各様の様相を呈し、必ずしも明確な類型をなしているとはいえない。

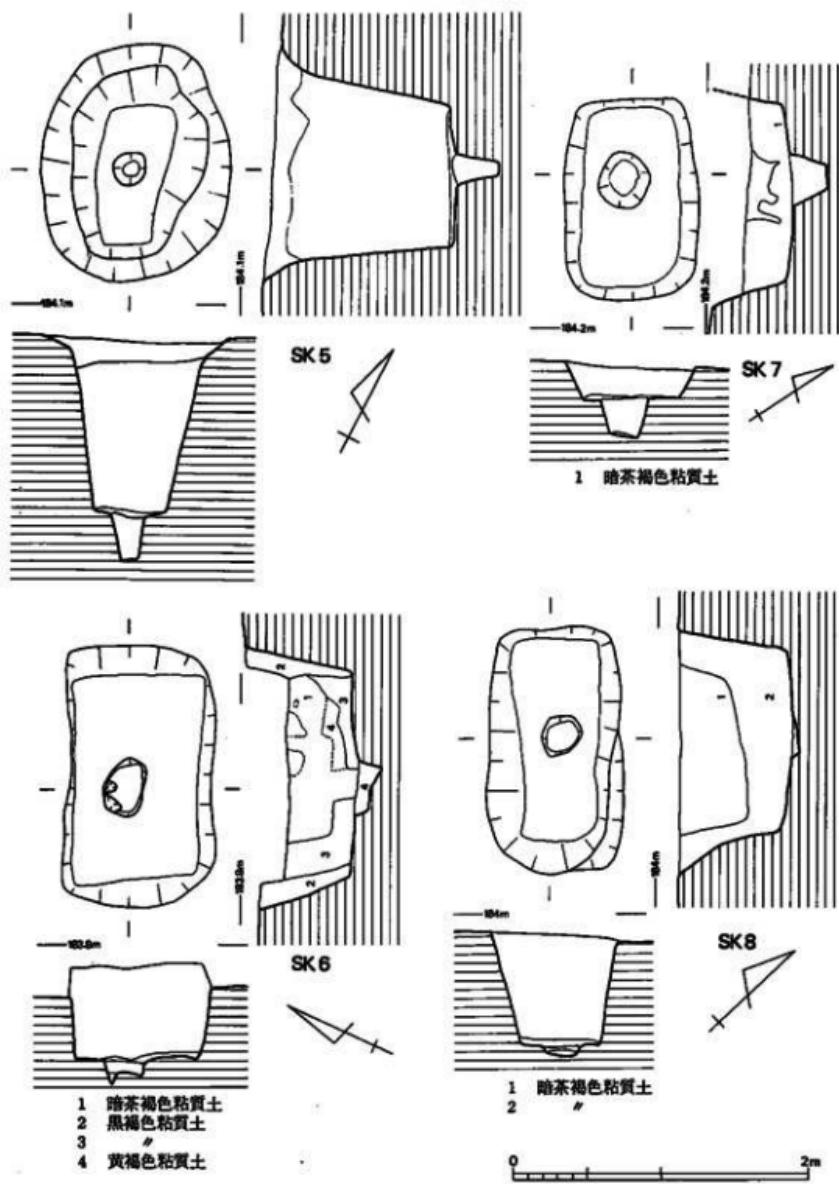
ところで、これらの土塙の時期については、遺物等からの手がかりが得られないため断定はできない。ただ、SK24が住居跡SB1と切合っているので、土塙群の下限についてはある程度知ることができる。すなわち、土塙群がほぼ同時代のものであることを前提とするならば、それらは6世紀以前に造られたものといえる。また、土塙群が一時期に属するものか否かについても、SK22とSK23の重複関係より少なくとも2時期はあることは明らかである。

第3表 緑岩遺跡南調査区土塙一覧表

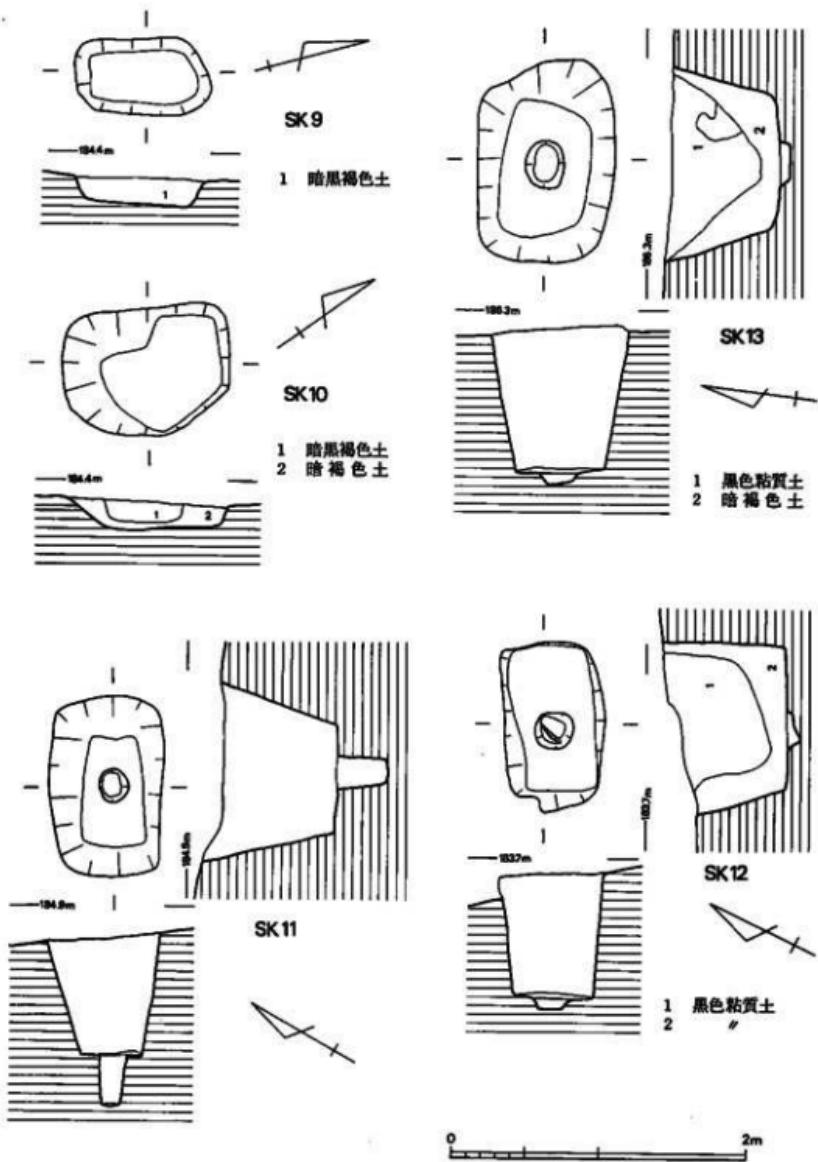
土塙 番号	土塙上端			土塙底		主軸の 方 位	尾根 稜線と 等高線 に對し て	底部 ピット	形 状	備 考
	長さ cm	幅 cm	深さ cm	長さ cm	幅 cm					
1	137	90	130	86	40	N53°E	直交	○	長方形	
2	140	120	80	84	59	N47°E	平行	×	楕円形	形はやや不整
3	174	116	55	116	53	N17°E	平行	○	長方形	
4	167	99	64	157	77	N32°E	平行	○	長方形	
5	162	127	131	96	48	N24°W	平行	○	長方形	
6	177	103	72	140	90	N65°E	直交	○	長方形	
7	137	92	53	122	68	N57°W	直交	○	長方形	
8	165	93	78	137	61	N46°W	平行	○	長方形	
9	91	53	18	73	37	N15°E	平行	×	楕円形	
10	113	85	29	88	63	—	—	×	不整形	
11	122	76	83	74	43	N60°W	直交	○	長方形	
12	115	68	85	98	56	N60°E	直交	○	長方形	ピット内に砂有り
13	132	92	99	94	60	N86°E	直交	○	長方形	
14	169	115	95	130	64	N78°E	直交	×	長方形	
15	120	89	82	89	51	N74°E	直交	○	長方形	
16	137	95	100	90	60	N88°E	直交	○	長方形	
17	143	118	86	96	67	N62°E	直交	○	長方形	
18	136	77	82	115	43	N75°E	直交	○	長方形	
19	154	78	81	136	49	N60°E	直交	○	長方形	
20	123	83	95	69	45	N71°E	直交	○	長方形	
21	162	92	62	148	72	N52°E	平行	○	長方形	
22	126	72	68	105	51	N49°E	平行	×	長方形	23と切り合う
23	221	141	62	81	62	N3°E	平行	○	長方形	22と切り合う
24	134	81	51	122	72	N73°W	直交	○	長方形	SB1と切り合う



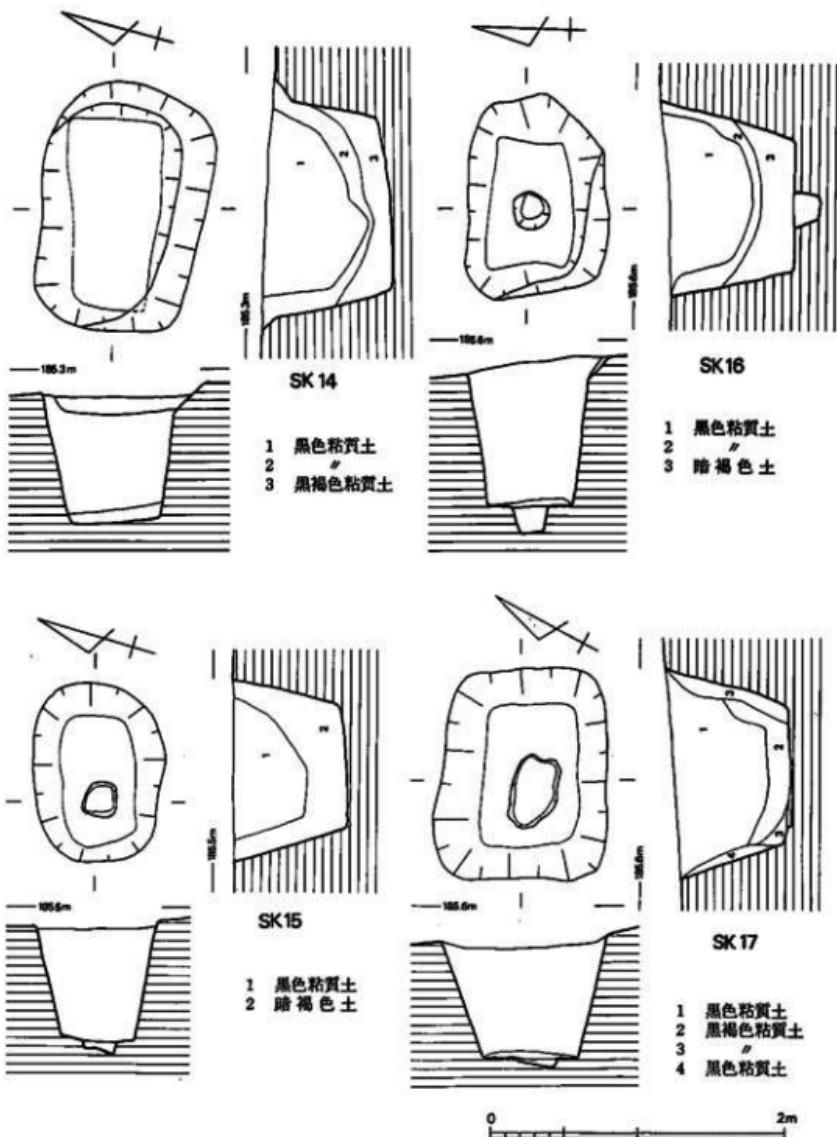
第IV-3図 緑岩造跡南区土坑実測図(1)SK 1~4 (1:40)



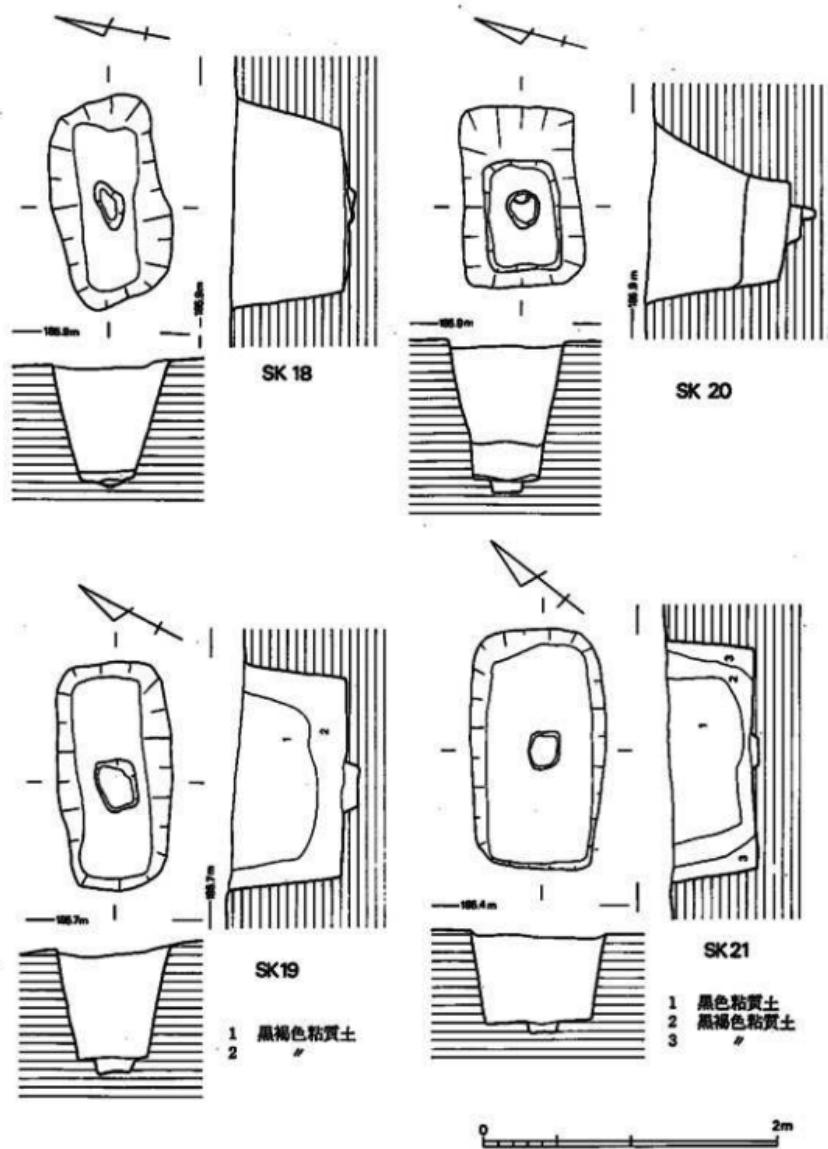
第IV-4圖 緑岩造跡南区土壤実測図(3)SK 5～8 (1:40)



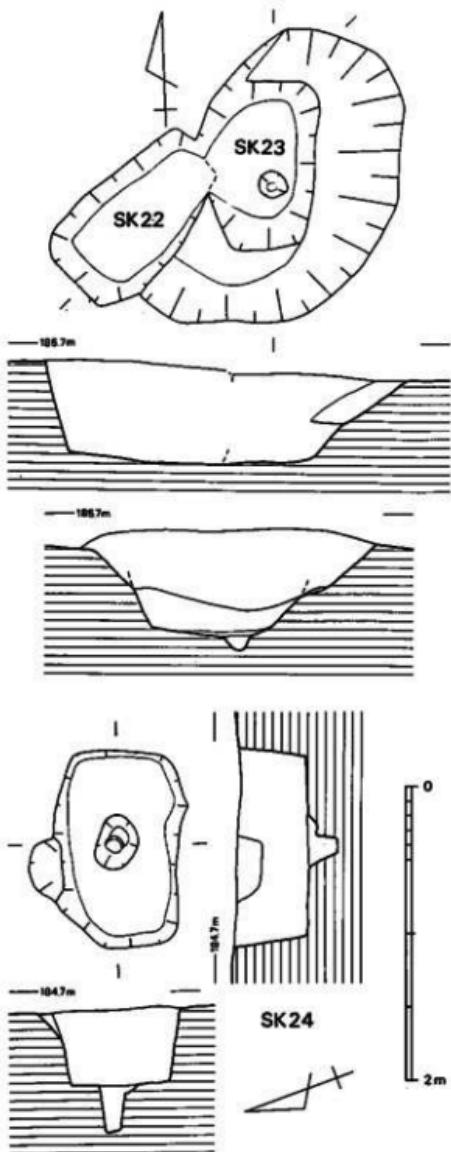
第IV-5図 緑岩道路南区土坑実測図(3) S K10~13 (1 : 40)



表IV-6図 緑岩遺跡南区土塙実測図(4)SK14~17 (1:40)



第IV-7図 緑岩遺跡南区土域実測図(6) S K 18~21 (1:40)



第IV-8図 器窯遺跡南区土塙実測図(8)  
SK22~24 (1:40)

## (2) 出土遺物

(第IV-9図)

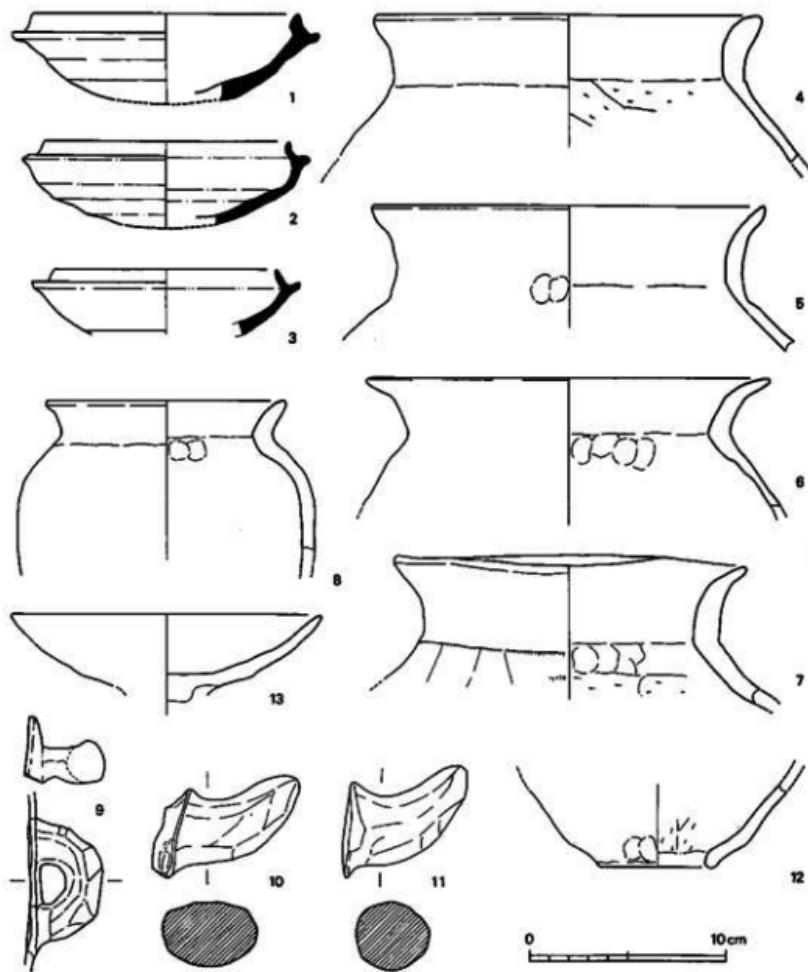
本調査区での出土遺物は、住居跡からのみで土塙群からは土器類などは一切認められなかった。

須恵器 1~3は杯身で、1は口径13.6cm、現存器高4.3cmを測る。口縁部たちあがりは器壁が厚く、内傾して先端を丸くおさめている。底部はヘラ削りを行っているが範囲はせまく、全体に横ナデが主である。2・3は1に比して器壁が薄い。たちあがりは低く内傾する。ヘラ削りの範囲は1同様にせまい。口径は2が12.5cm、3が11.3cmで、1・2に比べ3はやや小ぶりである。

土師器 壺(4~8)、瓶(9~12)、高杯(13)がある。4・5は口縁部が緩やかに外反し、頸部付近で小さく内湾する。外面および口縁部内面は横ナデ、内面胴部はヘラ削りである。4には外面の胴部最上位に繊細な弦線が1本施される。6・7は口縁端部下方が外反し屈曲するものである。内面の調整は、口縁部横ナデ、胴部ヘラ削りであるが、胴部の最上部はヘラ削りの後指頭による押圧気味の横ナデが及んでいる。外面は、6では全面横ナデであるが、7は胴部を小口板で縦方向に削り気味にナデており、その後で口縁部を強いタッチで横ナデしている。8はやや小形の壺である。口縁部はく字形に小さく屈曲し端部を丸くおさめる。調整は外面横ナデ、内面は胴部はヘラ

削りで最上部から口縁部にかけては横ナデが行われる。10~12は瓶の把手部と底部である。胎土や焼成等より同一個体と思われる。12は底面端部付近を指頭により屈曲させ、端部をナデで仕上げる。内面は下より上へテラ削りを行っている。13は高杯の杯部で、中位や下方に不鮮明ながら段差をもち、内湾気味に口縁端部にいたる。杯部の深さは浅い。内外面とも横ナデである。これらの須恵器・土師器は6世紀後半期の特徴を示すものである。

(桑田)



第IV-9図 緑岩遺跡南区第1号住居跡出土土器実測図 (1:3)

## (2) 北 調 査 区

北区では、調査区の東西両端部の緩斜面に偏向して遺構が確認され、丘陵中央部では遺構は皆無であった。検出した遺構は住居跡2軒、土塁15基、集石遺構2基である。住居跡は平面方形の竪穴式住居跡で、6世紀後半期に属す。土塁群は東端付近に集中し、同遺跡南区の一群との共通性が窺われる。なお、調査区の中央では遺構は認められなかつたが、旧石器時代の遺構・遺物の所在有無を確認するため、 $2 \times 2$ mのグリッドを丘陵尾根にそってT字形に設定し、調査を行つた。遺構検出面より更に60~80cm掘下げたが、遺物等は出土しなかつた。

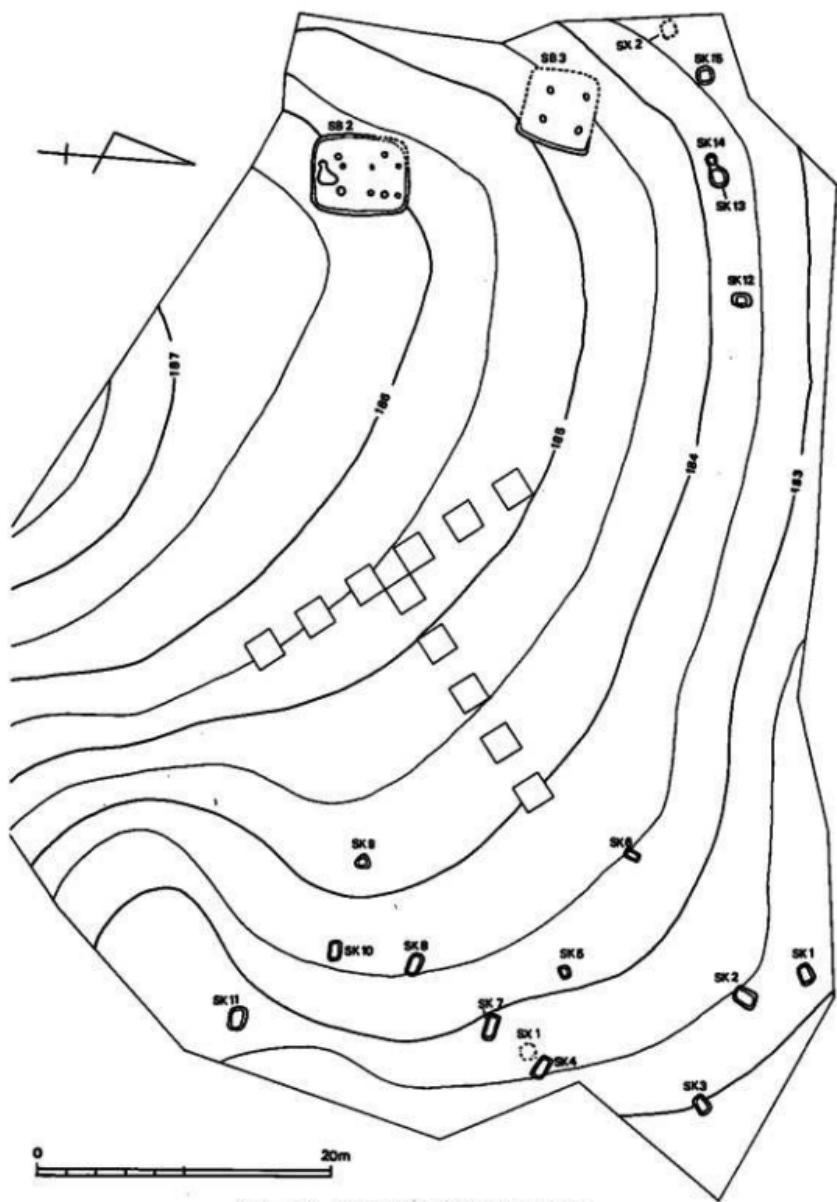
### 1) 検出の遺構

#### a) 第2号住居跡(第VII-11・12図)

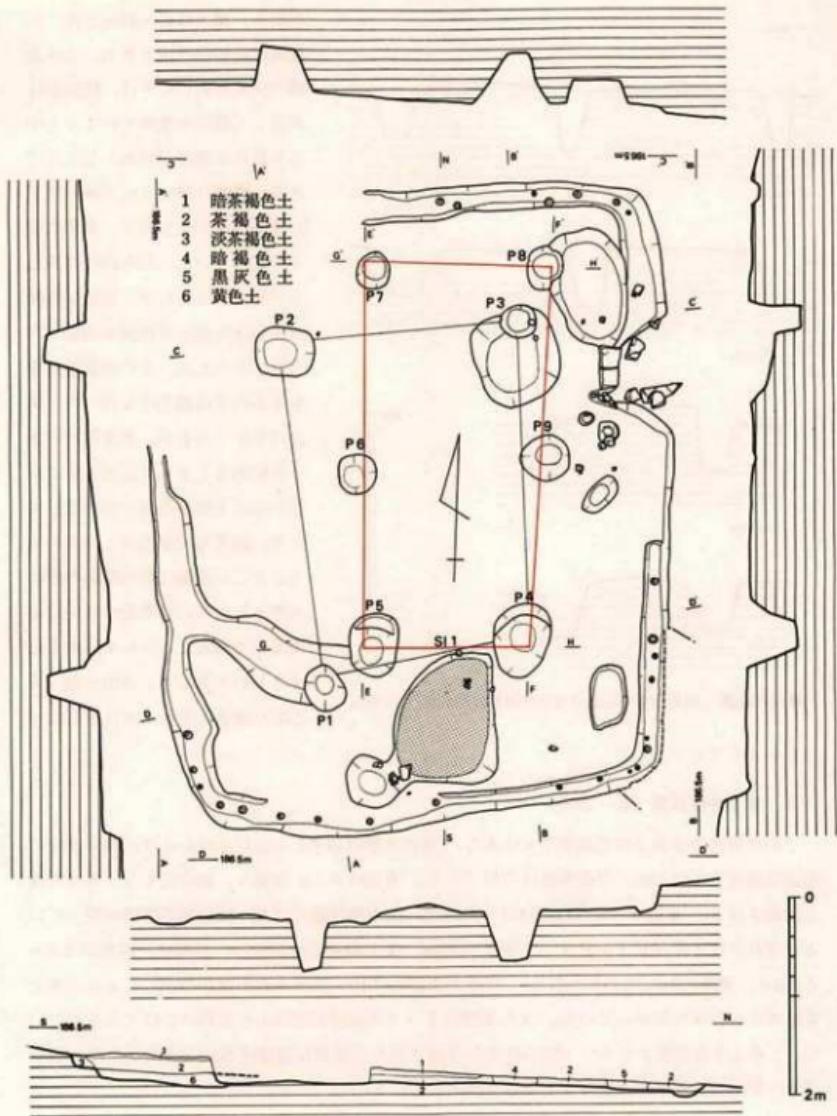
この住居跡は、SB3とともに調査区の東端緩斜面に位置し西方の小谷部に面している。平面は長方形で、東辺6.1m、南辺4.7mを測る。西辺および北辺は北西隅付近が欠失している。現存の壁高は20~30cmで、住居跡には幅25~30cm、深さ3cm前後の壁溝がめぐる。主柱穴は4本柱で、P1(径40×55cm、深さ55cm)、P2(径50×60cm、深さ45cm)、P3(径35cm、深さ40cm)、P4(径55×75cm、深さ50cm)である。各柱穴内には暗黄褐色土が流入していた。これらの柱穴を結ぶ線はほぼ住居跡の各辺にそっている。柱間はP1-P2間が3.4m、P2-P3が2.4m、P3-P4が3.2m、P4-P1が2.1mを測る。東壁の中央北寄りには造付けカマドがある。コの字形に扁平な角石を組んでおり、規模は東西80cm、南北65cmである。前面たき口部分に長さ45cm、幅23cm、厚さ10cmの扁平な石を水平に配し、側辺には16×46cmの細長い角石や15~20cm大の石材を用いている。石材は特に焼成を受けた様子はなく、カマド内には焼土や炭等は確認されなかつた。煙道についても精査にもかかわらず検出できなかつた。カマド跡の南側は壁溝が切れて南北1m余りのスペースがあり、カマドに関係した空間かと思わたる。この部分の北側には、口縁部を下に向いた甕が出土している。

ところで、この住居跡内では先述の4柱穴(P1~4)以外に規則性をもつ柱穴群(P5~9)が検出された。これらは、P4を加えると南北3.9m×東西1.7~1.9m、2間×1間の南北に長い柱穴配置をなしている。P5は径50×70cm、深さ55cm、P6は径40cm、深さ65cm、P7は径35×40cm、深さ60cm、P8は径35×45cm、深さ60cm、P9は径45cm、深さ60cmを測り、いずれも柱穴内には暗褐色土が流入していた。柱間は、長辺は2m前後であるが、南・北両側の短辺はやや不揃いでP4-P5間(南辺)が1.7m、P7-P8間(北辺)が1.9mとなつてゐる。平面長方形のこの柱穴群は、住居跡の各辺に平行しているが、北壁および東壁にかなり接近しているための住居内の南側と西側が広くなつてゐる。なお、P5から小片ながら鉄滓が出土し注目された。

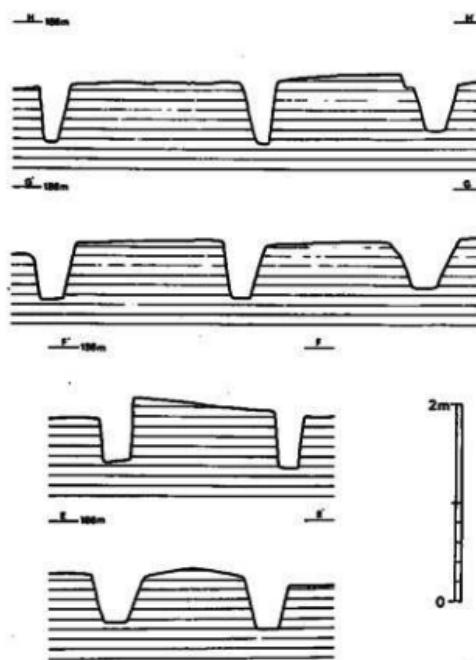
この柱穴群の南辺と住居跡南壁の間に東西約13m×南北約1mの不整円形の凹み(SI1)



表IV-10図 緑岩鉱脈北区造構配位置図 (1:400)



第IV-11図 緑岩遺跡北区第2号住居跡実測図 (1:60) (アミ目は燒土面)



第IV-12図 緑岩遺跡北区第2号住居跡柱穴断面図 (1:60)

はないようである。

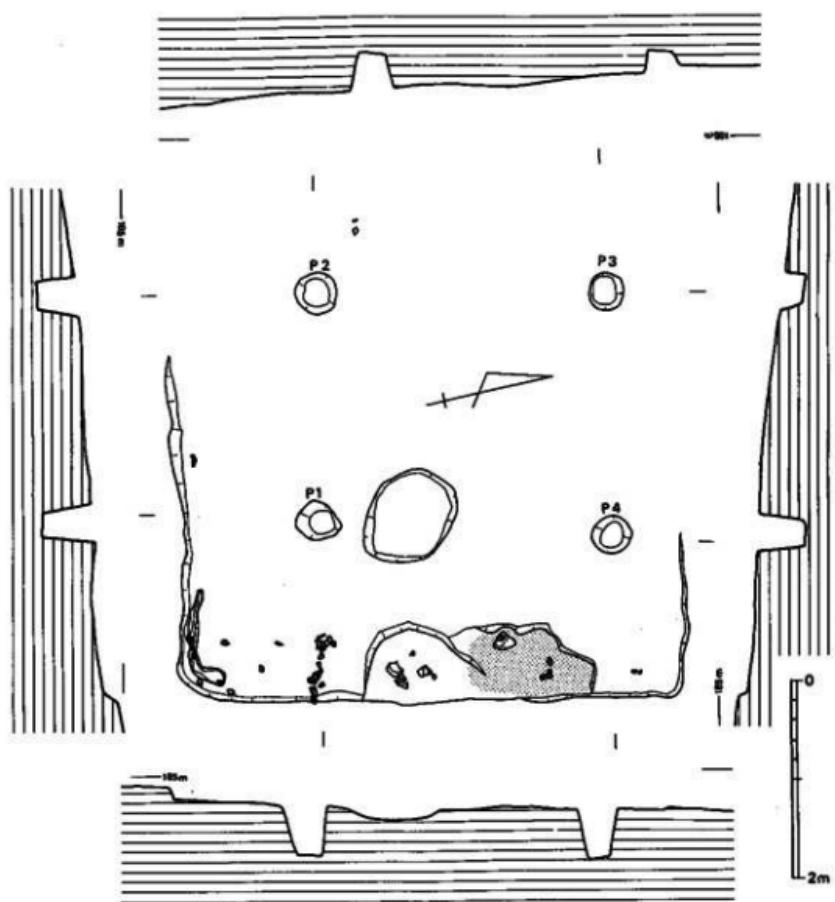
#### b) 第3号住居跡 (IV-13図)

この住居跡はSB2の北側約7mにある。遺存状態は必ずしも良好とはいえない、西半部分の壁面は流失しているが、平面形態は方形である。東辺は5.1mを測り、他の辺も5~6m程度と推測される。東辺での現存壁高は6~20cmで、南東隅付近には8~16cm幅の壁溝が残っている。主柱穴は4本(P1~P4)で径35~45cm、深さ40~55cmを測る。柱間は、南北が2.9mと3.0m、東西2.3mと2.5mである。東壁中央部には10~30cm大の石材が散在しており、焼土が厚さ3~12cmで広がっていた。また東壁にそって炭化材が南隅から北隅にかけて点在していた。このような状態よりカマド跡の存在が予想されたが確実な遺構は検出できなかった。遺物は先の炭化材と同じく東辺寄りから数点出土している。

#### c) 土塙群SK1~15 (IV-16~18図)

土塙群は、丘陵の先端部にあたる調査区北東部(第1土塙群)とSB3の北側(第2土塙群)に集中して検出された。第1土塙群は、10基の長方形土塙を中心に構成されており、南北と同

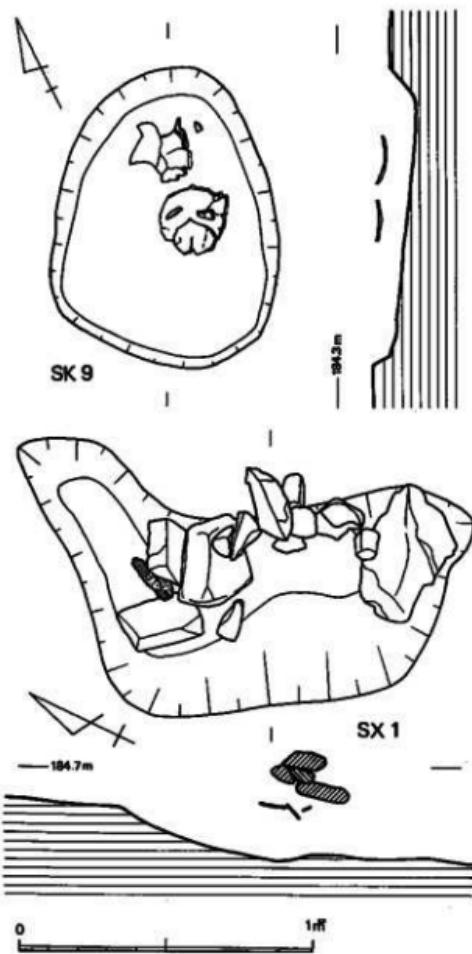
がある。深さは6~13cmと浅いが、底面は比較的平坦である。この遺構で注意を引いたのは、底面全体が著しく焼成を受けていくことと中より散片の鉄滓が出土したことである。底面は厚さ2~5cmの焼土が全面に広がっており、非常に硬くしまっていた。凹み内には黄色土が流入していたが、住居跡の検出当初は床面との色別が困難であった。そのため、この底部焼土面を手がかりに掘下げを行った。鉄滓は小片であるが、北東隅付近より比較的まとまって認められ、周辺からは土師器の細片が伴出している。頗る底面焼成と鉄滓の出土よりこの遺構は鍛冶関係の炉跡と考えられる。時期的には住居跡床面下であることからそれに先行するものであるが、伴出土器でみると兩者は大きく隔たるものである。



第IV-13図 緑岩遺跡北区第3号住居跡実測図(1:60)(アミ目は焼土面)

様な様相を示している。これらの土塹は分布状態・規模・構造などの諸点から幾つかに類別できる。

まず、土塹の規模・構造より4類型に分類される。1類はSK1～4が相当する。土塹上縁の長さが141～178cm、幅が62～102cmを測る比較的大形の長方形土塹である。底面にピットをもつが、浅くて凹みに近いかもしくは数個の小ピットにわかれて中央ピットをなさない点が特徴である。それに対し、1類と規模は同じであるが、底面にしっかりしたピットを伴う一群がある。SK7とSK11は、それぞれ上端の長さが165cmと147cm、幅が90cmと93cmで、1類とは



表IV-14図 畠岩遺跡北区SK 9・SX 1実測図(1:20)

ている。一方、SK 5・6はやや離れており、距離的にはSK 5はⅡ群に含まれる可能性もあるが、長軸の方位や占地条件などの点ではⅠ群に共通する要素もみられるため、一応Ⅲ類として他と区別したい。

ところで、以上分類してきた長方形土壙群の中にあって、2つの特徴的な遺構が検出されている(第IV-14図)。1つはSX 1である。SK 4とSK 7の間に位置する集石遺構で、表土剥ぎの段階からすでに石材が露呈し、遺構の存在が確認されていた。遺構は、20~45cm大の角石

柱同規模である一方で、底面にはSK 7で径20×35cm、深さ20cm、SK 11で径23×30cm、深さ40cmの深く明瞭なピットが伴っている。これらをⅢ類とする。Ⅲ類は、Ⅰ・Ⅱ類同様に底面中央にピットをもち、その直上面に小児頭大の円石・角石あるいは拳大の砾石を数個もしくは多量に配置した土壙である。この類はⅠ・Ⅱ類に比べてやや規模が小さい点も特徴としてあげられる。SK 6・10がこれに属している。Ⅳ類は、底面にピットをもたないもので、SK 5・8がある。規模はSK 5が長さ108cm、幅61cm、深さ840cm、SK 8が長さ151cm、幅75cm、深さ54cmを測り、大小の差がみられる。

次に、分布状態よりグルーピングを行うと、2ないし3に分けられる。Ⅰ群はSK 1~3である。これらは他の土壙と少し離れて存在し、長軸の方位もほぼ一致する。また、丘陵の主尾根線上に占地することも見受けない。Ⅱ群は、丘陵の東側斜面に位置するSK 4・7~11が該当する。これらは、一定の方向に長軸を向けながらほぼ同じ間隔をもって弧状に配列され

を南北両側に並置し、その東側に10~20cm大の小形の角石を並べてコ字形の配置をなしていた。規模は東西約60cm、南北約110cmで、東辺および北辺では2~3段に石材を組み重ねた部分もみられた。そして、この集石部の直下より土器器の瓶が出土した。出土した20片余りの土器片は同一個体であり、口縁部から、底部にいたる各部位の破片がある。出土土器のレベルはほとんど同じであり、上部の石材により破碎されたかのような状態であった。また、遺構北側の石材中より長さ約15cmの炭が出土している。遺構の掘方は土器群の下方約20cmで小さな凹みをなすが、集石・造物と隔てていることや凹み自体が不明確なことから直接遺構と結びつくか疑問がある。むしろ、先に述べたように集石部分が表土直下の黒フク面に含まれることから、遺構自体はかなり上層に構築されたものと考えられる。土器出土面が遺構の最下部になるかもしれない。

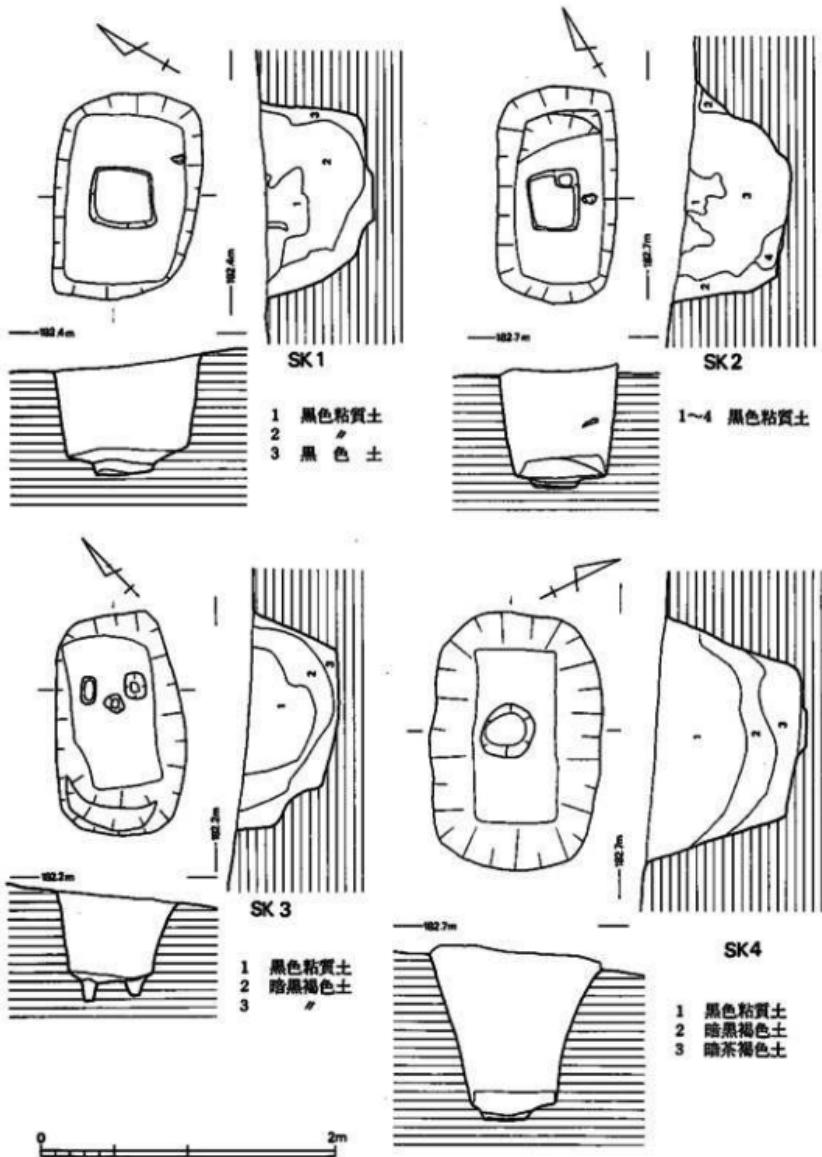
SX1と共にもう1つ看過すことのできない遺構はSK9である。これは、長径100cm、短径75cm、深さ6~10cmの卵形の土塙であるが、塙中の遺構検出面とほぼ同レベルから甕が出土した。土器は一括土器で、口縁部から胴部にかけての破片と胴部の破片が横転しており、時期は古墳時代後半期に属する。

第1土塙群の中で遺物を含むものはSX1とSK9のみであり、土塙群の時期ならびに性格を考える上でこれらは有効な手がかりとなるものと思われる。そこで、この点については次項で若干ふれることにする。

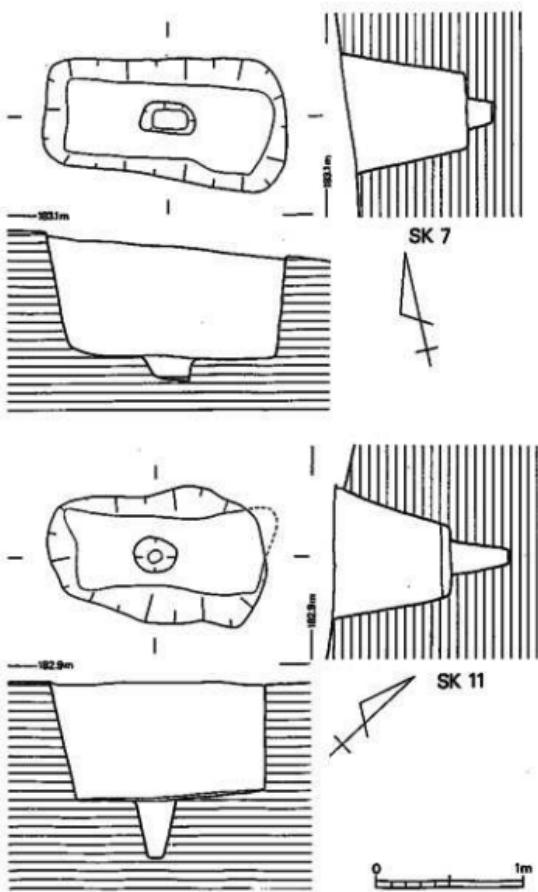
なお、第2土塙群は、集石遺構(SX2)がみられたが、すべて円形もしくは不整円形の浅い土塙で構成されており、第1土塙群とは性格を異にするものと考えられる。

第4表 緑岩遺跡北調査区土塙一覧表

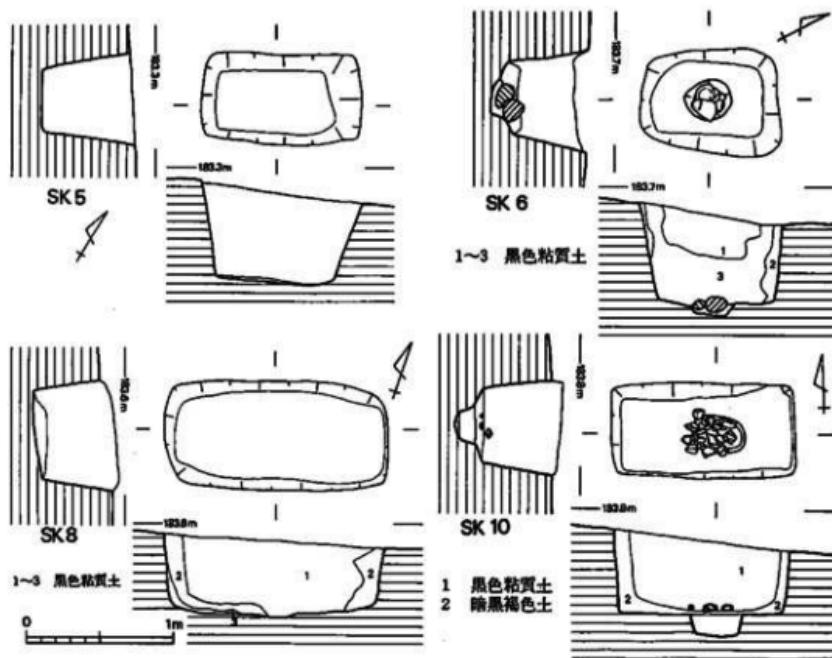
土塙番号	土塙上縁			土塙底		主輪の方位	尾根稜線と等高線に対して	底部ピット	形状	備考
	長さ cm	幅 cm	深さ cm	長さ cm	幅 cm					
1	141	99	67	126	81	N25°E	平行	直交	○	長方形
2	147	80	75	97	61	N31°E	平行	直交	○	長方形
3	148	88	62	104	56	N37°E	平行	直交	○	長方形 ピット数3個
4	174	116	102	116	56	N64°W	直交	平行	○	長方形
5	108	61	84	80	44	N59°E	平行	直交	×	長方形
6	95	73	83	76	49	N27°E	平行	直交	○	長方形 ピット内に石有り
7	165	90	79	138	58	N78°W	直交	直交	○	長方形
8	151	75	54	142	60	N71°W	直交	直交	×	長方形
10	124	65	76	116	55	N89°W	直交	直交	○	長方形 ピット内に石有り
11	147	93	83	142	55	N45°E	平行	直交	○	長方形



第IV-15圖 雜岩造跡北区土壤実測図(I) SK 1~4 (1:40)



第IV-16圖 緑岩遺跡北区土塁実測図(2)SK 7・11 (1:40)



第IV-17図 緑岩遺跡北区土塙実測図(3)SK5・6・8・10 (1:40)

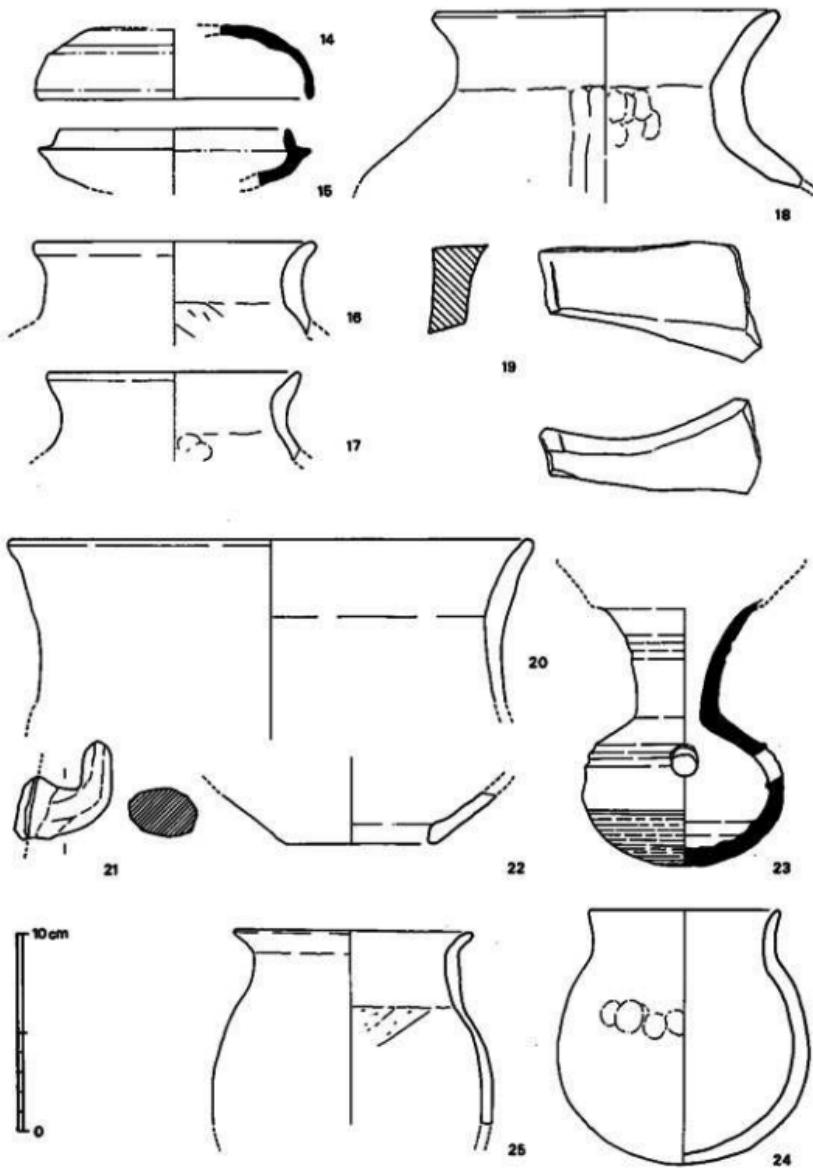
## (2) 出土遺物 (第IV-18図)

本調査区からは、住居跡などから遺物が十数点出土した。いずれも古墳時代後半期のものである。

### a) 第2号住居跡 (14~19)

須恵器 (14~15) 杯身・蓋各1点が出土した。14は口縁部が少し内湾して丸い端部に至る。天井部は比較的浅く平らである。15は、たちあがりが短く内傾しており、端部はやや厚く丸い。内面および外面受部までは回転ナデである。

土師器 (16~18) 壺が3点出土した。16・17はやや小ぶりなもので、口縁部はゆるく外反し端部を丸くおさめる。外面および口縁部内面は横ナデ、胴部は下より上方向のヘラ削りである。18はやや大形品で、直立気味の口縁部は端部付近で外反し端部は丸くおさまる。外面と口縁部内面は横ナデで、胴部内面はヘラ削りである。内面の口縁部と胴部の境では指頭圧痕が多くみられる。



第四—18圖 榛岩遺跡北區出土土器・石器夾測圖 (1:3, 19+21:2)

石器（19） 砧石は4面とも研磨を受けており、長軸方向に削痕がみられる。幅の広い表面2面は特に使用の頻度が高く断面の凹曲が大きい。

b) 第3号住居跡（25）

25は、小形の壺で、胴部は上方で直立気味になり小さく外反する口縁部に続いている。外面と口縁部内面は横ナデ、内面は胴部上方は押圧気味のナデ、それ以下はヘラ削りである。

c) SX1（20～22）

集石部分の下部より出土した土器で、1個体分の壺である。口縁部（20）はゆるく外反し端部を丸くおさめる。調整は内外とも横ナデである。胴部外面は不明瞭ながら縱方向の粗い刷毛目がみられ、後にナデにより消去されたものと思われる。胴部の内面は横方向の比較的丁寧なヘラ削りである。把手部（21）は調整が粗雑である。底部（22）は内面をヘラ削りの後ナデで仕上げる。色調は黄褐色を呈すが、口縁部付近に黒斑を有している。

以上の遺物の他に、遺構に伴わない土器が2点出土している。23は、口縁部を欠くがほぼ完形の須恵器（壺）である。口頭部は外反しながら上方にのびる。胴部は丸味をもち、胴部最大径が中位に位置する。底部は丸底で、中位やや上方に円孔を穿っている。口頭部上方と胴部中位上方に各2本の幅広い沈線が施されている。24は土器の壺である。小さく外反する口縁部をもち、調整は全面ナデである。胴部外面には煤が付着する。

### (3) 小 結

今回の調査により、暴岩遺跡は南北2つの低丘陵に古墳時代後半期の住居跡3軒と時期の不明確な長方形土塙群多数から構成されることが判明した。以下ではこの集落跡と長方形土塙群について少し検討を加えることとする。

#### 1) 集落跡について

3軒の住居跡は、出土遺物より6世紀後半に属するものである。構造的には4本柱の方形あるいは長方形の竪穴式住居跡で、規模にも特別の格差は認められない。その中で、注目されるのは第2号住居跡内の鍛冶炉跡と6本の柱穴群である。両者は、柱穴群の1つに鉄滓が流入していることや平面配置などから同時期の遺構と判断されるが、問題はこの6本柱群と第2号住居跡の関係である。いいかえれば、工房関係の作業場をもつ6本柱建物の上層構造が竪穴式住居の形態をとるのか掘立柱建物となるのかという問題である。結論的には、建替えにより同じ竪穴式住居を使用したものと考えられる。根拠としては、第1に、もし掘立柱建物を想定するとなれば、炉跡が建物の外になり何らかの上屋が必要となるはずである。しかし、炉跡の周辺にはその痕跡はみられない。第2に、6本柱群が第2号住居跡の中におさまり方位が同一であること、さらにP1を同住居跡の4本柱の1柱と兼用している点である。そして、それと関連

して第3に6本柱群は住居跡の中で北に偏っており意識的に南側に空間を作り出し、そこに炉跡が設置されている。以上より第2号住居跡は本来4本柱竪穴式住居として構築されたが、その後6本柱構造の竪穴式住居として建替えが行われたものと思われる。その際、鍛冶炉の設定が住居設計上大きなウェイトを占めていたであろうと考えられる。当遺跡でみる限り、6世紀後半期では鍛冶一おそらくは小鍛冶関係一の生産は居住空間の一角で行われ、須恵器生産にみられるような専業的な生産形態は一般的ではなかったようである。この点は、以前調査を行った松ヶ迫遺跡群A地点遺跡の同時期の集落跡からも窺われ、12軒の住居跡のうち7軒から鉄滓や鉄製品、工具石などが出土地している。そのうちにはカマドを伴うものもみられ、各住居内での小鍛冶生産=鉄製品の個別所有の拡大と専業的手工業の未分化の一端を示唆している。

## 2) 長方形土塙群について

南北両区にわたって計33基の長方形土塙が検出されたが、同様の造構は今回調査した松ヶ迫A地点遺跡からも確認されている。これらの土塙の特徴は以下のとおりである。

- ①丘陵尾根上および斜面に占地すること。
- ②群をなし、一定の分布上のまとまりや規則性をもつこと。
- ③土塙の規模は長さ0.9~1.9m、幅0.6~1.5m、深さ0.5~1.3mで長方形を呈し、底部に小ピットをもつものが多いこと。
- ④いずれも土器等の遺物を伴わないこと（ただし、底面に礫を伴うものは2例ある）。

長方形土塙の分類については各遺跡別に分析を行ってきたが、ここではそれをもとに土塙群の所属時期と性格について若干ふれることにする。

①時期について 遺物を伴わないため直接的には知り得ないが、状況証拠としては幾つかの手がかりがある。南区では、第1号住居跡とSK24との重複関係およびSK22・23の切合関係より土塙群の一部もしくは全部が6世紀後半以前に属し、しかも2時期以上にわたって構築されたものであることが判明した。北区では切合関係はみられなかったが、群中に6世紀代の土師器を伴う遺構（SX1・SK9）が存在し、土塙の周辺より同じく6世紀代の須恵器・土師器が出土している。また、松ヶ迫A地点でも重複による表土剥ぎの時点では、土塙群の周辺より6世紀代の土師器が表採されている。これらの点より、土塙群は、6世紀代の所産である可能性が高いと思われる。ただし、次で述べる土塙群の性格と関連して、さらに古い時代に属す可能性も考慮しなければならない。

②土塙群の性格について 横浜市多摩丘陵の鶯丘遺跡で120基にのぼる穴状遺構が発見されて以来、各地で狩猟用のおとし穴が確認され、近くでは鳥取県米子市青木遺跡A地区に発掘例がある。これは、沢にむかって下る丘陵上のけもの道にそって掘られた深い穴状遺構で、通常底面には杭を打込むためのピットをもつものが多い。この点は本遺跡群の長方形土塙群の特徴とも共通しており、一見して同様の性格をもつものかとも思われる。しかし、反面で、青木遺跡にみられるように落し穴が不整形な平面形態を含むのに対し、本例では全部が長方形という規

格性をもっている。また、北区で分類したように、分布上の同一グループ中に構造の異なるものが組合わさっており、複雑な構成をなしている。

本来、落し穴は、形態はどうあれ多數の穴が群在することによって初めて有効性を發揮するのであって、形態や構造上の規格性は2次的な要素にすぎないはずである。したがって、本例は、1グループ内に多彩な構造類型を含む北区の状況や、1列に土塙が並列するだけのA地点の様相などからみて、落し穴としての機能を考えるには無理が多いように思われる。むしろ、本例については土塙群の所属時期や構造・分布上の諸類型および規格性より、古墳時代の土塙墓とする方が適当であると思われる。類例としては、三次地域内では轍ヶ谷北第1号古墳<sup>(1)</sup>（三次市青河町）がある。2基の主体部のうちA主体とするものは、木棺直葬と考えられるが、塙底の中央に硃の入ったビットを掘っており、本遺跡のⅢ類土塙と構造的に似ている。また、県内では真龜第1号古墳<sup>(2)</sup>（広島市高陽町）の粘土床に硃は入っていないが同様なビットが確認されている。これらのビットはいずれも排水的な性格が考えられており、時期的には5世紀代のものとされている。

（桑田）

#### 注

- (1) 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1979年
- (2) 広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977年

## V 高峰東遺跡

本遺跡は造成予定地のほぼ中央にあたり、高峰遺跡の東方丘陵上（標高202～204m）に位置する。

調査はまず重機で尾根筋に沿って試掘溝を入れ、2基の円形土塁を検出した。その試掘溝を拡張したところ、さらにもう1基の円形土塁を検出した。そこで拡張した試掘溝を中心に長さ約26m、幅約18mのほぼ長方形に調査区を設定し、発掘を行った。その結果、新たに1基の不整形土塁を検出し、計4基の土塁を検出した。

### (1) 検出遺構

#### a) SK2・SK3（第V-2図）

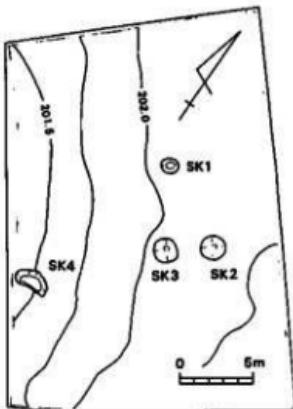
SK2、SK3はいずれも直徑が1.6m前後、検出面よりの深さが2.0～2.1mの円形土塁といわゆる座塙を埋納したものである。両土塁とも出土遺物はなかったが河原石が数個入っていた。

SK2は検出面より深さ約70cm（以後深さは検出面より）のところまで斜めに掘下げ、そこから垂直に約1.5mまで掘下げ、そこで一段テラスを設けてさらに約2.1mまで掘下げている。

覆土は基本的には黒褐色土（黒フク）であるが、上層の茶褐色腐植土と下層の地山（黄褐色土）が混入している。第4層中には一辺約10cmの角の丸くなった四角錐形の石が含まれていた。この石は北北西を向いて埋っていた。垂直に掘下げた部分の直徑は約90cmでテラスの部分で約80cmとなっている。このテラスの下の部分には直徑約43cm余、幅0.5～1cmの炭の環が深さ約1.6～1.7mにかけて続いている。また、ここには多くの炭が点在していた。

SK3は試掘溝の壁面に断面がかかるており、先述したように黒褐色土（黒フク）層から斜めに切込んでいるのがわかった。これで見ると切込面は検出面より約20cm上であった。SK2同様に約60cm余まで斜めに掘下げ、次で約145cmまで垂直に掘下げ、やはりテラスを設けた後約2mまで掘下げている。

覆土もSK3とはほぼ同じで第3層中に一辺約10～15cm、長さ約30cmのこれも角の丸くなった三角すい形の石が含まれていた。方向も同じ北北西を向いて埋っていた。垂直に掘下げた部分の直徑は約90cm、テラス部分で70cmである。SK3はこの辺りから水が湧き始めた為、炭の環は見つけられなかったが、深さ175～180cmの壁面に炭の層の跡が薄く残っていた。



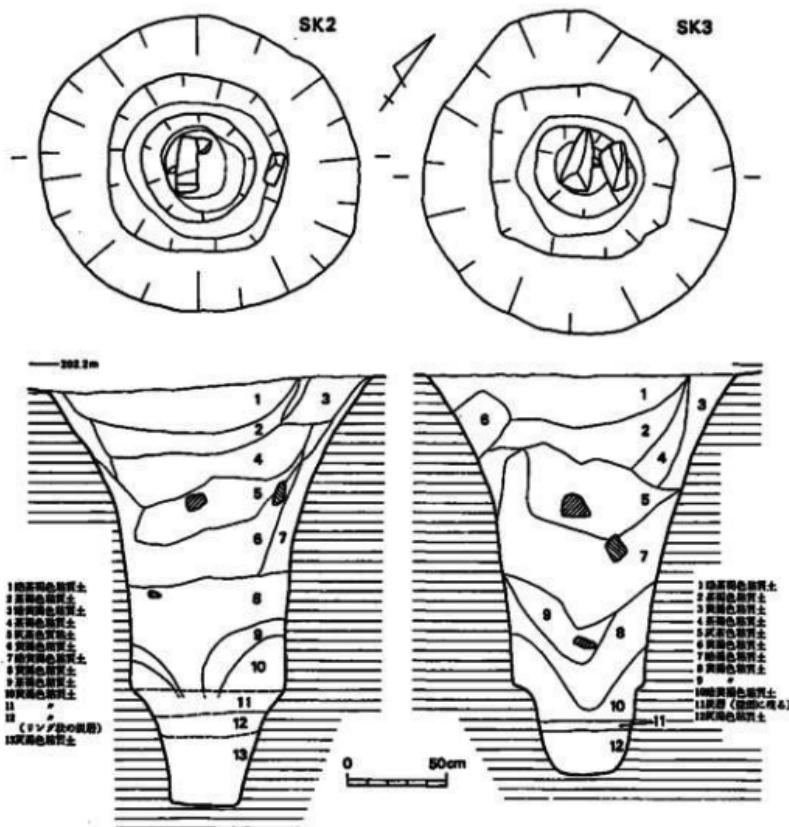
第V-1図 高峰東遺跡造掘配位置図  
(1:400)

b) SK 1

SK 1はやや不整の円形土塹で、深さが20cmにも溝たない浅い土塹である。覆土は単層で灰と燒土を含んでおり、造構の壁面底面には焼けた跡が残っていた。

c) 不整形土塹 SK 4

SK 4は三日月形をした不整形土塹である。規模は長軸が約235cm、短軸が約110cmである。  
出土物はなく性格は不明である。  
(片山)

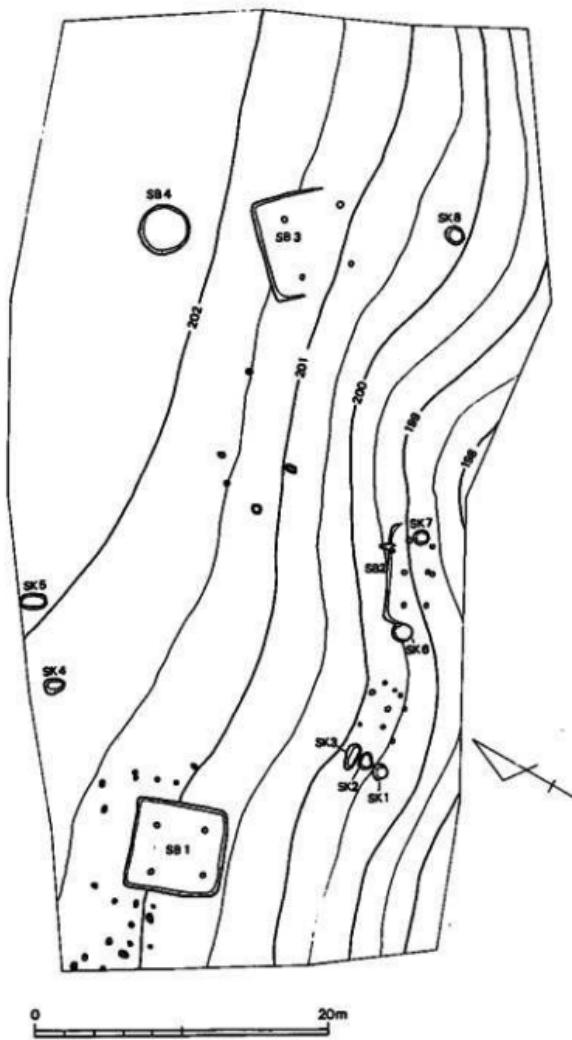


第V-2図 高峰東遺跡SK 2・3実測図(1:30)

## VII 高峰遺跡

本遺跡は、造成予定地の西端に位置し、東西にのびる標高202mの低丘陵の平坦部に立地する。南側下方には細長く開拓した谷水田があり、遺跡はその谷頭近くにある。水田との比高は45mである。

遺跡の内容は古墳時代の集落跡で、住居跡を6軒確認した。これらは時期的に5世紀後半期と6世紀後半期の2つに分けられる。また、南区では弥生時代前期の住居跡と思われる遺構を発見した。中国地方でもこの時期の住居跡の調査例はごくまれであり貴重な資料となった。調査にあたっては便宜上林道を策に南・北2調査区に分け発掘を行った。北区の調査により、道路沿いに住居跡等が多く確認され旧林道部分にも遺構が広がる可能性が予想されたため、遺構の有無を確認したが、明確な遺構は検出され



第VI-1図 高峰遺跡南区遺構配置図 (1:400)

なかつた。

## (1) 南 調 査 区

本区は、丘陵の南側斜面にあり、細長く入り込んだ谷水田は調査区の真下あたりで終結する。検出した遺構は住居跡4軒、土塹8基、小ピット多数である。遺物は住居跡を中心に古墳時代後半期と弥生時代前期の土器類等が出土している。

### 1) 検出の遺構

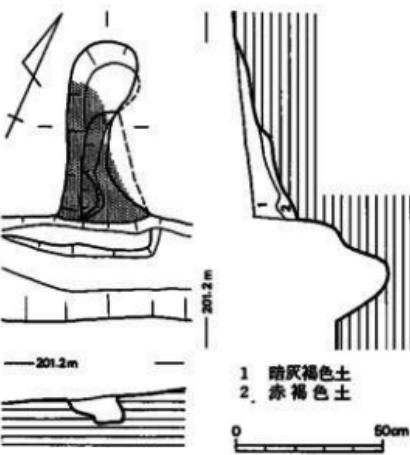
#### a) 第1号住居跡(第VI-2・3図)

試掘調査の際発見されたもので、調査区の北西隅に位置する。平面形態は方形で、東西6.2m南北6.4mの規模を測る。壁面は、南側約 $\frac{1}{3}$ が試掘等により欠損したが、それ以外は比較的よく残っており、北壁では壁高30~40cmを残す。壁面のたちあがりは急斜で直立に近い。壁溝は住居跡内を全周し、幅が20~35cmと広く、しっかりしている。深さは床面より15cm前後である。主柱穴は4本で、P1が径35cm・深さ47cm、P2が径35cm・深さ44cm、P3が径30×35cm・深さ33cm、P4が径25cm・深さ50cmを測る。P3には、底面に10cm大の平石が2個置かれていた。根石かと思われるが表面が焼成を受けていた。この他住居跡内には径10~20cmの大いな小ピットや50~100cmの大いな凹み状のピットが検出された。特に後者では土師器の破片が多く混入していた。一方、北壁中央には造付けのカマドの煙道部が検出された(第VI-2図)。法量は長さ60cm、幅は14~30cmで、中位で幅が狭くなり上部がオーバーハングしている。横断面は西壁が漸移的に緩傾斜するのに対し東壁は直立気味で多くはオーバーハングする。煙道底部は18°の傾斜で上昇している。カマドの本体は精査にもかかわらず検出されなかった。

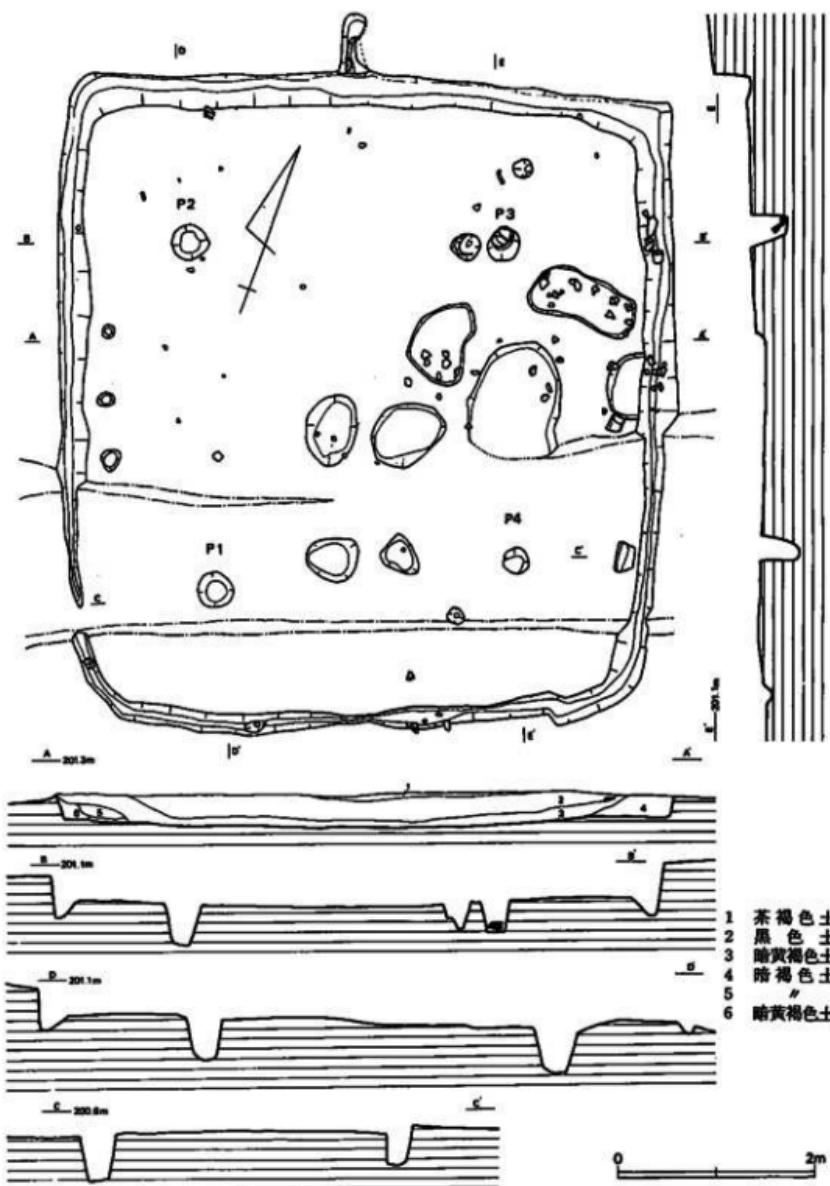
遺物は住居跡内の東半部分を中心に須恵器、土師器が散在し、P3の北側では鉄鎌が出土した。

#### b) 第2号住居跡(第VI-4・5図)

調査区の南側中央の斜面にある。この部分は、小さな谷部の西側にあたり、傾斜が変換して急斜面となっている。住居跡は南半は流失していたが、北側は遺存



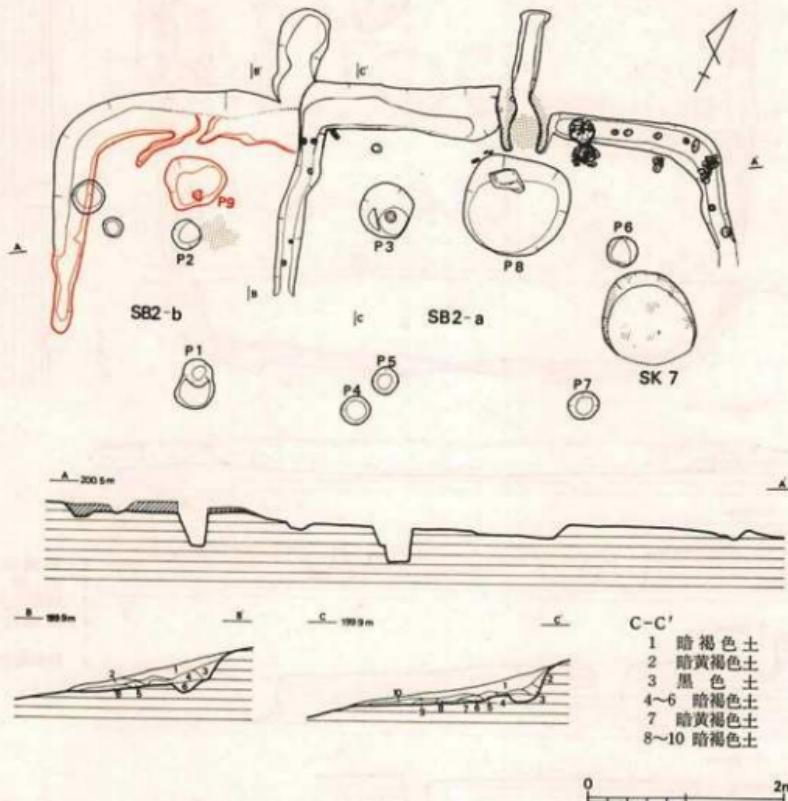
第VI-2図 高峰遺跡南区第1号住居跡内カマド跡実測図(1:20)(アミ目は鏡土面)



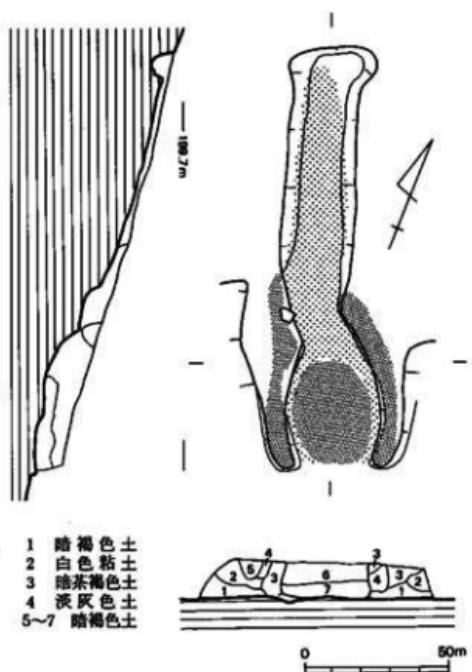
第VI—3圖 高峰造訪南區第1號住居跡實測圖 (1:60)

良好であった。検出当初は住居跡 1 軒分と東端に土塙が重複しているものと考え調査を進めたが、結果的には 2 ないし 3 軒分の住居跡 (SB2-a・2b) が切り合うことが明らかとなった。

SB2-a は、長方形の竪穴式住居跡で北辺が 4.3m を測る。柱穴は P3・5～7 の 4 本である。柱間は南北が 1.3～1.6m、東西が 2m で南北方向がやや短い。壁溝は幅約 25cm で北辺西側はより幅広となっている。北辺中央には造付けカマドが付設されており、規模は幅 50cm、長さ 60cm である。袖部は暗茶褐色土・白色粘土・淡灰色土で構築され、内側は著しく焼成を受けている。燃焼部には暗褐色土が流入し、煙道部とともに炭が混っていた。煙道部は長さ 80cm、幅 25



第VI-4図 高峰遺跡南区第2号住居跡実測図 (1:60) (アミ目は焼土面)



第VI-5図 高峰追跡南区第2号住居跡内カマド  
跡実測図(1:20)(淡アミ目は焼土、  
淡アミ目は炭の分布図)

これらより一辺4m弱の方形プランであったと推定される。北辺の中央にはカマドの煙道部があり、長さ90cm・幅40~50cmを測る。内には炭、焼石が流入していたが、カマドの本体は確認できなかった。

SB 2 b の貼床下より壁溝とピットが検出された(SB 2 b')。住居跡の可能性が高いが、壁溝がSB 2 b の壁面にそっていることからSB 2 b'に近い時期に構築されたものと思われる。各住居跡の切合の関係はSB 2 b'→SB 2 b→SB 2 a の順である。

### c) 第3号住居跡(第VI-6図)

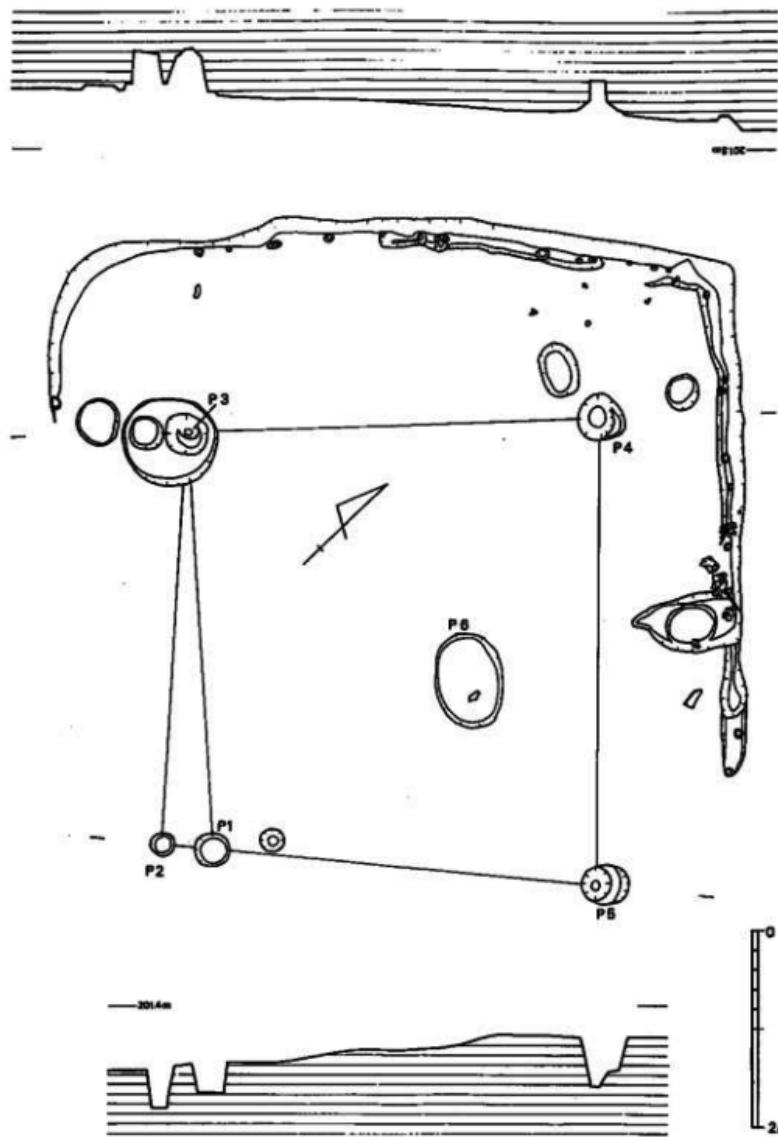
調査区の東側、南へ急斜面となる傾斜変換点付近に位置する。

SB 1・SB 2とは方向をやや異にし、規模もやや大形で、平面形態は方形であるが、北辺は7mを測る。遺存は必ずしも良好とはいえず、壁面は南半を流失している。柱穴は4本柱(P 2~5)で、径が25~50cm・深さが35~50cmである。柱間の距離はP 3~P 4=4.2m・

cmで15°の傾斜をもつ。カマドの前面には径110cm、深さ約15cmの円形土壇がある。壇内には焼土が広がっており、底面カマド寄りの部分には熱を受けた石材もみられた。カマドに隣接する造構かもしれない。また、P 3に隣接して同じく円形の土壇(SK 7)が検出された。壁面と底部は赤褐色に焼け、多量の炭化物が出土している。

遺物は、北東隅の壁溝付近に集中し、特にカマドの東側には土器器の窓が2個体出土している。

SB 2 bはSB 2 aに先行する住居跡で東半分をSB 2 aによつて欠損している。この住居跡は貼床を行っており、黄白色土が約5cmの厚さでかたく叩きしめられていた。柱穴はP 1~4の4本柱で、P 3はSB 2 aのものと重複していると考えられる。柱間の距離は南北で1.1~1.3m、東西で1.6mを測る。住居跡の規模・平面形は



第VI—8圖 高峰遺跡南區第3號住宅剖面圖 (1:60)

P 4～P 5—4.8mである。壁溝は東辺と北辺東半にみられ幅30cm、深さ4cmである。溝内には径5～10cmの小ビットが伴っている。P 5・P 6は深さ5～10cmの凹みに近いビットであるが、多量の焼土を含み、焼成を受けた10cm大の角石がみられた。

遺物は、主として壁溝にそって出土し、特に東壁中央南寄りから甕が出土している。

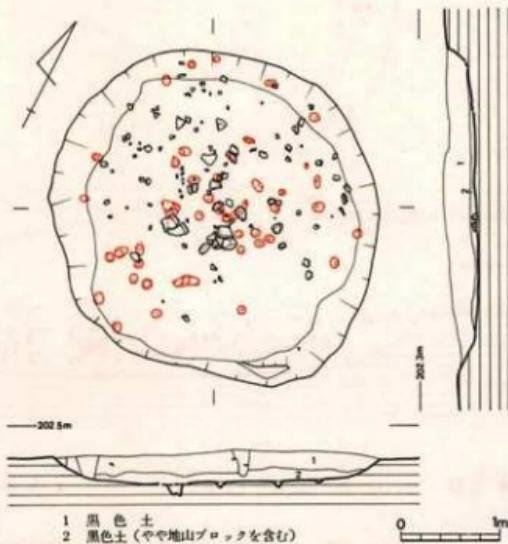
d) 第4号住居跡(第VI-7・8図)

S B 3の北側約4mにある。円形の平面形態をとり径は3.5m、深さ30cmを測る。壁面は、通常の住居跡のような直立気味のものではなく、湾曲気味にゆるやかな傾斜をもって床面に続いている。現存壁高は15～20cmを測る。壁面下端の壁溝はもない。住居跡内には黒色土が流入し、黄色土ブロックの混入状態より2層に分層できる。柱穴は主柱穴をもたず、床面より多数の小ビットが検出された。この小ビット群のうちには木の根痕も含まれておらず、流入土の状況を手がかりに区別しながら検出を進めた。小ビットは径7～25cmで、深さ8～50cmを測る。住居跡の中央部分に集中しているが、東半では壁面中および壁面下端に1列に並んでいた。検出当初、壁面に沿ってビットが全周するものかと思われたが、精査にもかかわらず西半部分ではほとんど認められなかった。このような点から、当住居跡は主柱をもたず幾つかの小ビットを支柱とする構造をとるものと思われる。住居跡の中央では15～30cm大の石材が5個まとまって検出された。これらは上面が焼けていた。

遺物は、甕・甕などの多数

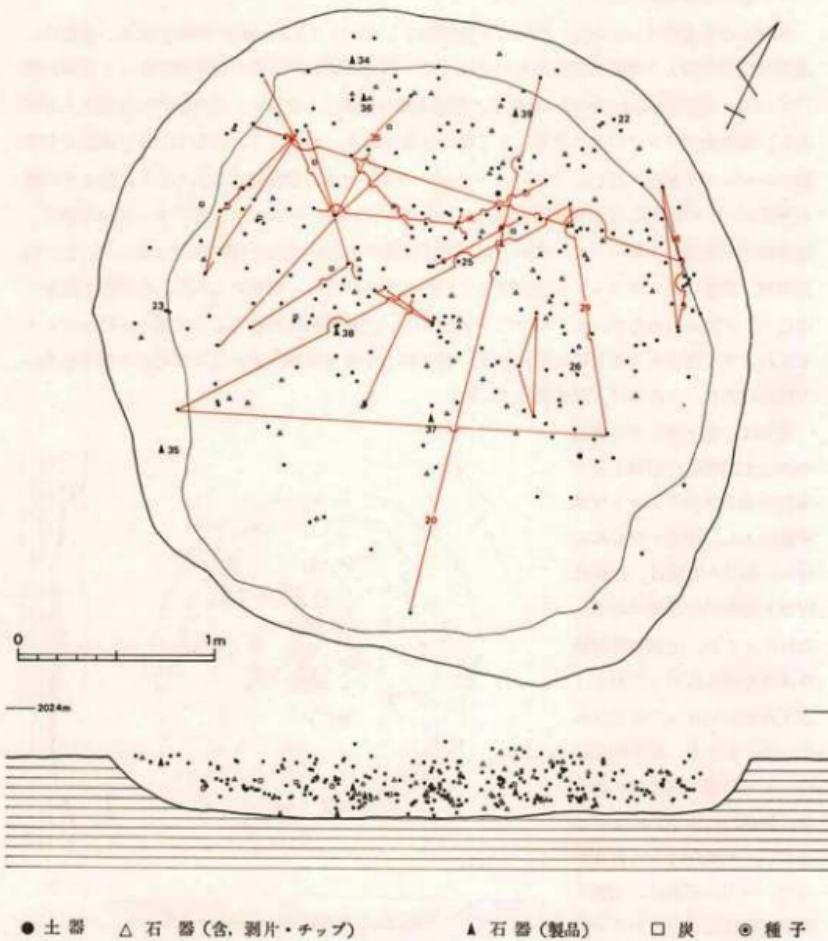
の弥生土器の他に石器とその未製品および剝片・チップが多数出土し、種子・炭もみられた。第VI-8図は、住居跡内出土遺物の分布図である。

これによると、土器は住居跡のはば全面に広がっており、上下両層にわたって包含されている。しかも、接合関係についても同様に広範囲におよび、個体別に小単位にまとまるといった傾向はみられなかった。一方、石器は、土器と同じく全面に広がりをみせるが、製品・未製品が北西部に幾分集中しており、その周囲に剝片・チップが散らばっ

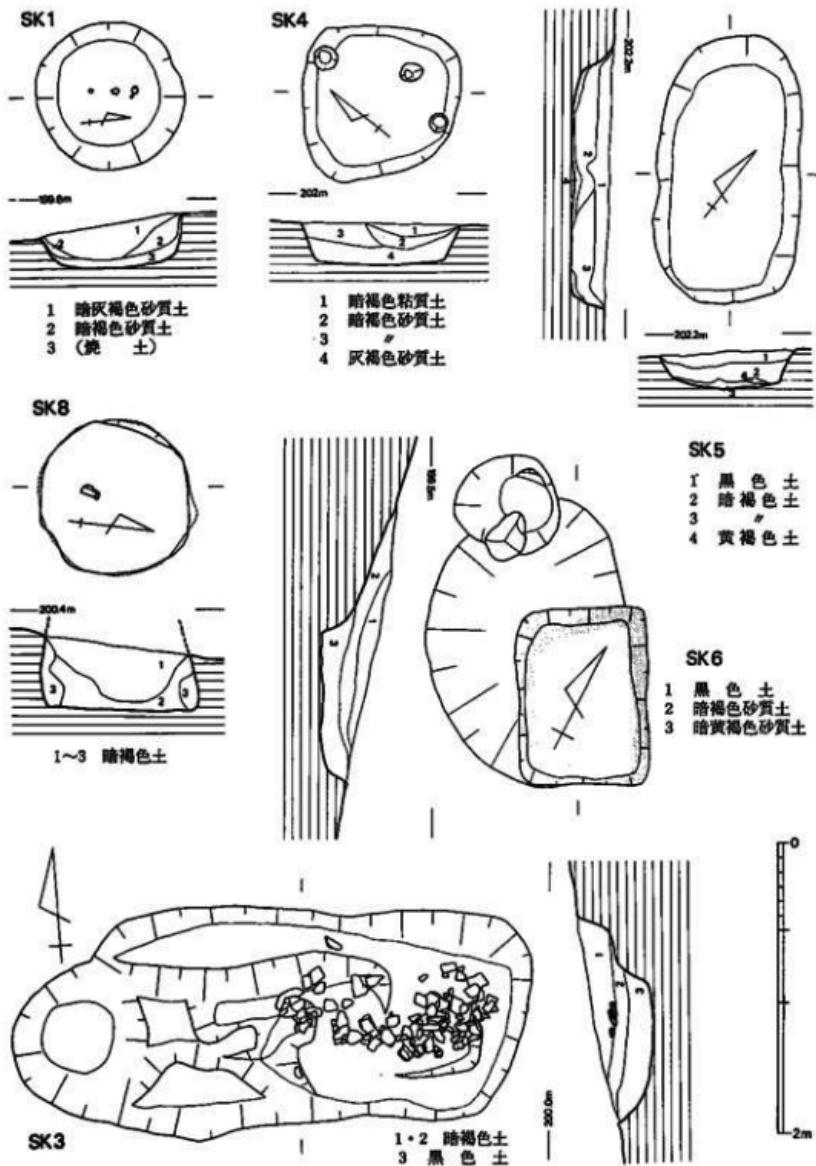


第VI-7図 高峰遺跡南区第4号住居跡実測図(1:60)

ていた。垂直分布は最上部から床面直上まで均一にみられる。炭は、壁面に近く分布し、出土レベルは上・下層の境界部分に限られている。種子は東半部分より2点出土し、床面より5~20cm浮いていた。焼土面や焼土塊は認められなかった。



第VI-8図 高峰遺跡南区第4号住居跡出土遺物の平面・垂直分布図 (1:30)



第六一九圖 高峰造跡南区土壤実測図 (1:40, SK 3のみ1:20) (アミ目は焼土面)

#### e) 土 坡 (第IV-9図)

調査区内で検出した土坡は8基である。形態・性格とも多種な内容をもち、区域内全域に点在している。

S K 1 上端の直径1mを測る円形土坡で、深さは12cmである。底面と壁面は焼成をうけており、坡内からは數片の土器片(土師器)と焼土塊が出土した。SK 1の北側に接して径1.3mの不整円形土坡が検出されている。

S K 3 SK 2の北1.2mにあり、いびつな椭円形をなす。規模は長径1.8m、短径0.8mで深さは20cmである。底面は平坦でなく凹凸が著しい。東半では中位に平坦部を作り、2段振りに近い様相を呈する。坡内では土器片が多数出土した。図化できるものはないが、土師器の胸部破片である。

S K 4 S B 1の北東約9mに位置する。平面形態は不整円形で、直径113~124cmを測る。深さは30cmである。底面の東側には壁面付近に径13~15cm、深さ3~18cmの小ビットが3個検出された。遺物は出土しなかった。

S K 5 SK 4の東側5mにあり、平面形態は椭円形である。長径183cm、短径101cmで深さは26cmである。長軸の方向はN36°Wで尾根線に直交する。底面は平坦である。遺物はない。

S K 6 S B 2に西接しており、検出当初は住居跡に間違する遺構かと思われたが、長方形の土坡であることが判明した。規模は長さ123cm、幅91cm、深さ38cmである。壁面と底面の一部は焼成を受けている。坡内からは土器、炭が出土している。主軸は等高線に直交する。この土坡の西側および北側は擂鉢状の凹部をなし、その北端には径70cm、深さ約25cmのビットがあり、25×35cm大の石材が流入していた。

S K 7 S B 2住居跡内東側にあり、径110cm、深さ10cmの円形土坡である。焼土・炭を含む。

S K 8 S B 3の南側約7mにある。円形のいわゆる袋状窪穴で径は102~106cm、深さ48cmを測る。底面は平坦である。遺物としては、最上層より5×10cm大の角石が出土した以外は、全く認められなかった。

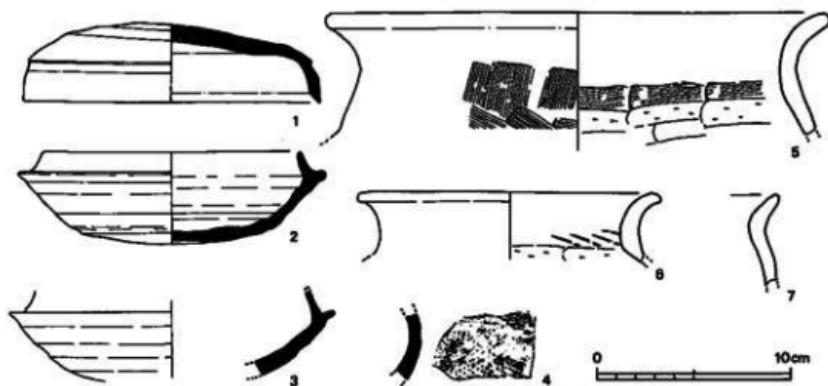
## 2) 出土遺物 (第VI-10~16図)

当調査区では、住居跡を中心に弥生時代前期と古墳時代後半期の遺物が出土している。

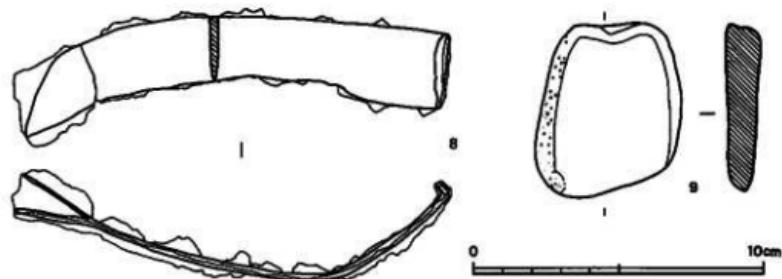
#### a) 第1号住居跡 (第VI-10, 11図)

須恵器4点、土師器3点、鐵器1点、石鏟1点が出土した。

須恵器 杯身・蓋(1~3)と甕(4)がある。1は口縁部がややふくらみをもって若干外開きに下り、端部内面は凹曲してぶい稜をなす。天井部との境で鈍い稜をつくる。天井部は平坦で浅く、回転ヘラ削りはその約3分に及ぶ。2は内傾する口縁部をもち、端部はうすく丸



第VI-10図 高峰遺跡南区第1号住居跡出土土器実測図 (1:3)

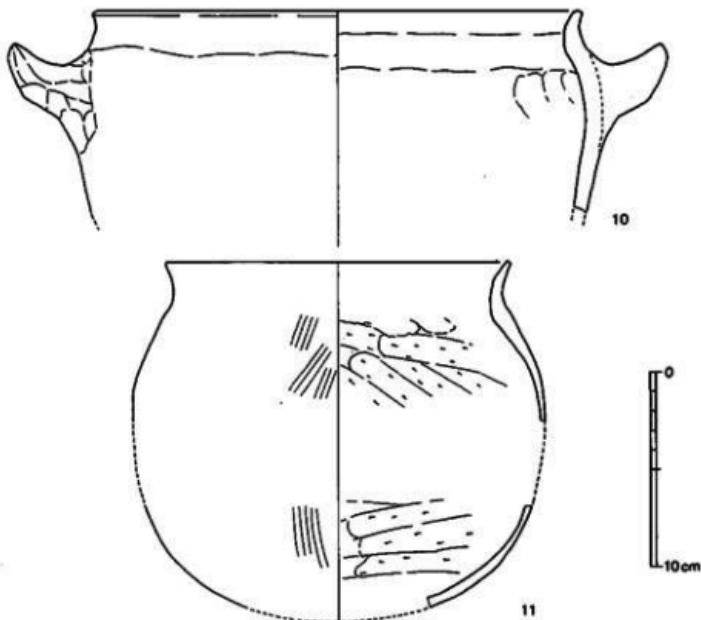


第VI-11図 高峰遺跡南区第1号住居跡出土鉄器・石器実測図 (1:2)

くおさめる。受部は外方に水平に近くのび、やや厚手である。回転ヘラ削りは底部の約 $\frac{1}{3}$ 強である。焼成はやや甘い。3は口縁端部を欠損するが、口径15.3cmを測る大形品で、焼成は良好である。4は腰の胴部破片である。上方に波状文を有している。

土器器 5～7は甕で、口縁部はゆるやかに外反し端部を丸くおさめる。外面は胴部が小口板による継と左斜方向の細かい刷毛目調整で、口縁部は内外ともに横ナデを行っている。胴部内面は横方向(右→左)のヘラ削りである。内面の胴部上部には細かい横方向の刷毛目を残す。6は口縁部がやや強く外反する。口縁部は内外とも横ナデで、胴部は右→左方向のヘラ削りと思われる。暗黄褐色を呈す。

鉄器 (8) 長さ16.2cm、中央部幅2.1cm、厚さ0.3cmを測る鎌。柄の装着部を折り曲げ、先



第VI-12図 高峰道跡南区第2号住居跡出土土器実測図（1:3）

壺部はくちばし状に尖る。中位で大きく屈曲している。

石錠（9） 4.9×5.9cm、厚さ1.2cmの扁平な河原石である。両端が少し凹んでいるが、人為的に打撃を加えた痕跡はみられず、自然面を利用したものである。

#### b) 第2号住居跡（第VI-12図）

土師器の壺2点と瓶が1点出土している。壺（10）は小さく外反する口縁部の直下に牛角把手を付けたもので、把手の付く胸部最上位が最大径をなす。調整は外面は全面ナデで、内面は口縁部から胸部の把手部分までは横ナデ、それ以下は横方向（右→左）のヘラ削りである。色調は黄褐色である。11は、口縁部が小さく外方に開き、胸部はわずかに横ふくらみな球形をなす。調整は胸部外面では粗い右上りの刷毛目調整の後、ナデにより刷毛目を消している。内面は横方向（右→左）の丁寧なヘラ削りを行っている。口縁部は内外とも横ナデである。暗褐色を呈す。これらの他にカマド跡東側より壺の腹部が出土している。

c) 第3号住居跡（第VI-13図）

住居跡の東側壁溝より甕（12・13）が一括して出土した。12は口縁部が外反して端部を丸くおさめ、胴部は肩にやや張りがある。胴部外面には縦方向の刷毛目を施し、口縁部は横ナデ。胴部内面は上位が横方向のヘラ削りでそれ以下は下から上への縦方向のヘラ削りである。胴部外面には中位以下に煤が付着するが、肩部および口縁部には付かない。13は口縁部が外反する。なで肩で胴部中位に最大径をもつ。口縁部は横ナデ。胴部外面は縦方向の刷毛目調整で、内面は主として横方向（右→左）のヘラ削りである。

なお、住居跡内の流入土中より繩文土器が1片出土している。口縁部下1.5cmに太い沈線を引き上方に縄文を施す。口縁端部上面には棒状具による刻みをもつ。後期前半のものと思われる。

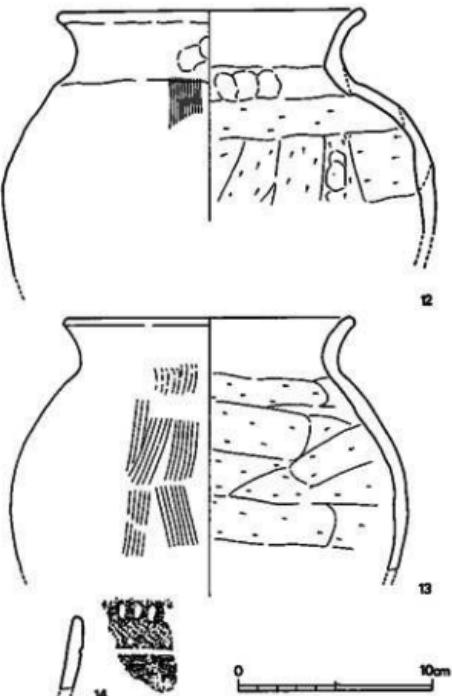
b) 第4号住居跡（第VI-14～16図）

弥生時代前期の土器と各種の石器および剣片が一括して出土した。

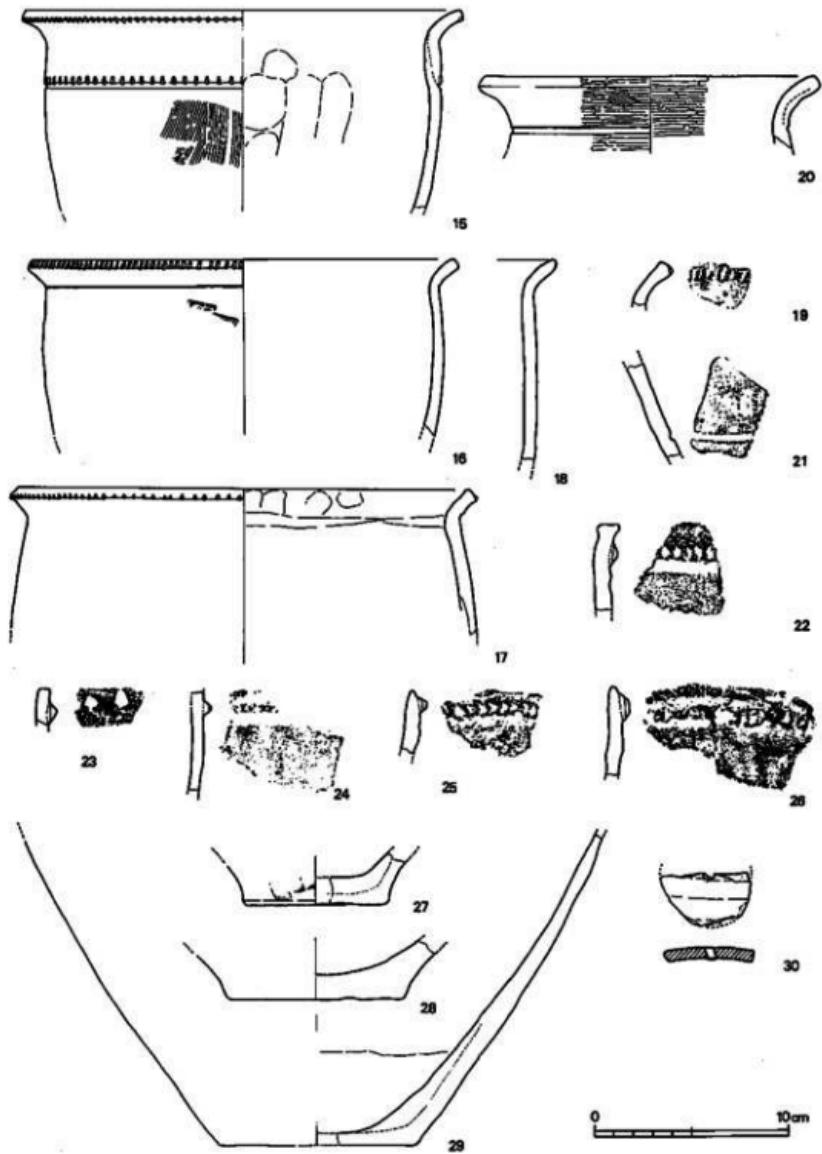
弥生土器（第VI-14・15図） 器種は壺・甕・深鉢である。総個体数は14～16個体で、甕が圧倒的に多く壺は一点のみである。

壺（20） 口縁部が小さく外反し端部を平坦に近く仕上げている。頸部には太いヘラ書き沈線を施し、段風な文様をなしている。調整は両面とも横方向のヘラ磨きである。

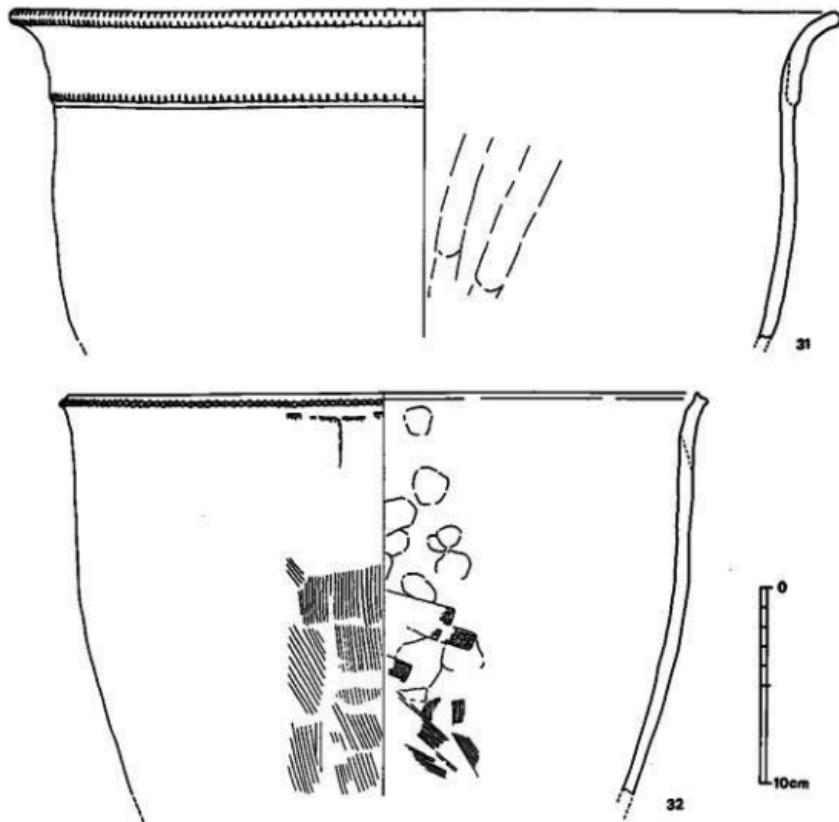
甕（15～19・31・32） 小形品（15～19）と大形品とがある。前者は口径22～23cmでくの字形口縁をなし、端部に刻目をもつ。胴部の形態は胴部上位が小さくふくらみ最大径となるもの（15・16）と直線的なもの（18）、胴部中位付近に最大径のくるもの（17）がある。胴部に施文をもつもの（15・16）ともたないもの（17・18）があり、15では胴部上位の粘土組接合部に段風な沈線を施し、その上端に刻目をめぐらしている。16は胴部と口縁部の屈曲部に細い沈線



第VI-13図 高峰遺跡南区第3号住居跡出土土器実測図  
(1:3)



第VI—14圖 高峰遺跡南區第4號住居跡出土土器實測圖(I) (1 : 3)



第VI-15図 高峰遺跡南区第4号住居跡出土土器実測図(1) (1:3)

を施す。調整は胴部では内面が板ナデのものがほとんどで、内面は横ナデもしくはナデである。口縁部は内外ともすべて横ナデである。

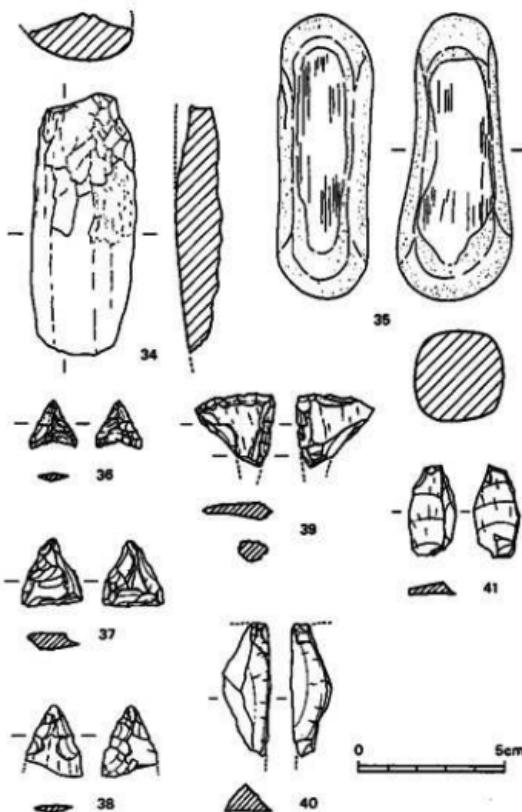
31・32は甕の大形品で、口径32~42cmを測る。形態は、各々異なっている。31は小さく外反する口縁部をもち胴部上位がわずかにふくらむ。32は口縁部はほとんど外反せず、胴部も直線的である。口縁部および胴部の施文は小形品と同様である。ただ、31の胴部施文は器面剥落が著しく詳細は不明だが接合時の段差をそのままとどめているかもしない。調整は口縁部は横ナデであるが、胴部では内外ともに板ナデである。32では胴部下半が縦方向の粗い刷毛目となっており、他と異なる。なお、15・16・31には外面に煤が付着している。

### 深鉗形土器 (22~26)

尖帶文土器の一群である。全体を知りうるものはないが、胸部の大形破片も出土している。口縁部は端部の形状より2タイプに分けられ、端部が平坦に近いもの(22・23)と、尖り気味に丸くおさめるもの(25・26)がある。これらの土器は胎土、調整などの点で前述の弥生土器とはかなり異なる特徴をもっている。

### 石器 (第VI-16図)

34は磨製始刃石斧の破片である。研磨面を残すが、転用の可能性はない。綠泥片岩製。35はハンマーストーンである。乳棒状に近く、中央が少し凹曲する。4面にわたって長軸方向の使用痕がみられる。花崗岩製。36~38は石礫の製品および未製品である。36は凹基式で三角形をなし、基端上方が少し直線的である。調整



第VI-16図 高峰遺跡南区第4号住居跡出土石器実測図 (1:2)

は比較的丁寧である。いずれも安山岩製である。39は石錘で、先端部を欠損している。頭部が片側にのみふくらみをもつタイプである。40は石器の可能性があるが破片のため明確でない。41は流紋岩の剝片である。剝片はこの他に長さ1~5cmの大ものが40数点出土している。

(桑田)

第5表 高峰遺跡第4号住居跡出土土器観察表

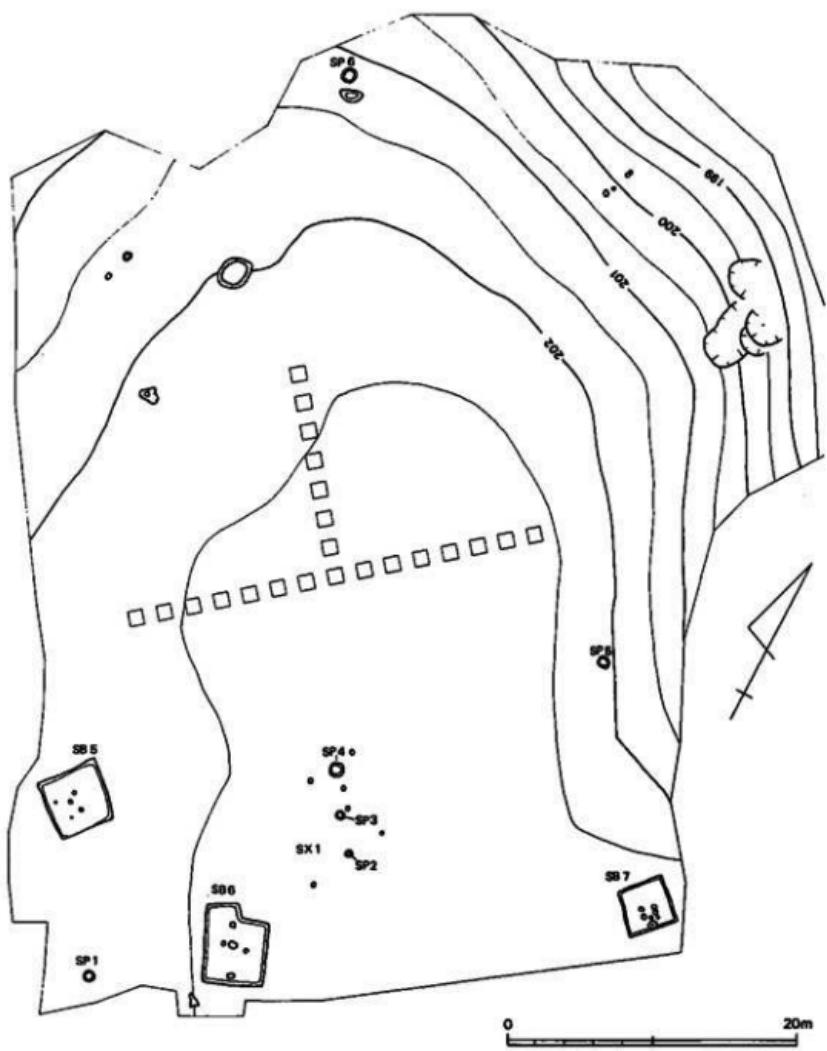
器種	土器番号	形態	調査	文様	その他
甌	15	くの字形口縁で端部はやや角張る。胴部は上方で最大径をもつがふくらみは小さい。	口縁部は内外とも横ナデ、胴部外面の段以下は細かな縱方向の筋毛目を残す。胴部内面は指頭圧痕があるが細部は不明。	粘土接合部の段下端に沈線を1本めぐらし、段風な手法をなす。その上端にはややラフな刻目を施す。口縁部にも細目の刻目がある。	外面に煤が付着。砂粒多含。焼成良好で外面暗褐色、内面は暗黄褐色。
甌	16	くの字形口縁で端部は丸朱をおびるが小さな平坦面をなす。胴部は上方で少しふくらむ。	口縁部は内外とも横ナデ、胴部は外面縱方向の板ナデ、内面はナデにより平滑である。	口縁端部の刻目は長目でややラフ。胴部最上部にはごく繊細な沈線を1本施す。	胴部外面には煤が付着。1~2mm大の石粒が多含。暗褐色。
甌	17	くの字形口縁で端部は少し瘤み気味な平坦面で両端がごく小さく肥厚する。	内外とも横ナデ	口縁端部下端に刻目をもつ。	金銀母粒を若干含む。暗黄褐色。外面の一部に黒斑あり。
甌	18	くの字形口縁で端部は丸朱をおびる。胴部の張りはほとんどなく直線的である。	口縁部は内外とも横ナデ、胴部は外面が板ナデ、内面は指頭圧痕を伴うナデ。	口縁端部には刻目を施す。	暗褐色。
甌	19	くの字形の口縁部の破片。	口縁部は横ナデ。	口縁端部下端に刻目を施す。	外面に煤が付着。
壺	20	口縁部は小さく外反し、端部は平坦に近い。	内外面とも横方向のヘラ磨き。	頭部にごく太いヘラ描き沈線を1本施し段風に仕上げる。	1~2mm大石粒、砂粒多含。焼成は良好で黄褐色。
壺	21	胴部上半の破片。	ナデ。	下方に太く明瞭な沈線を施し、上方に繊細なヘラ描き沈線を縱方向に5本施す。	外面には煤が付着。
鉢	22	口縁部は小さなT字形をなし上面に平坦部を作る。	横ナデか。	口縁部の下方に貼付突帯をもち細長い刻目を施す。	外面に煤が付着。
鉢	23	口縁部は直立し端部を丸くおさめる。	横ナデ。	下方に三角形の突帯を貼り刻目を施す。	黒褐色。
鉢	24	口縁部土半を欠損するが直立して端部を丸くおさめるものか。	内外ともにナデ。	突帯を付し刻目をもつ。	黄褐色。
鉢	25	口縁部はやや内傾しながら直立し、端部は丸くおさまる。	内外とも指頭圧の顯著なナデで、器面の凹凸が著しい。	刻目を付した突帯が口縁部直下に貼られる。	外面に煤付着。1~2mm大石粒が非常に多くそれ以上のもの

					もある。外面暗褐色、内面は黄褐色。
鉢	26	口縁部はやや内傾しながら直立し端部は丸くおさまる。	内外とも指頭圧の顯著なナデで、器面の凹凸が著しい。	突帯は断面台形で幅広、上面の刻目は非常にラフ。	1~2mm大の石粒を非常に多く含む。
甕	27	平底でやや外反しながら胴部にいたる。	外面は縱方向の板ナデ。	—	1~2mm大の石粒を多含。暗褐色。
甕	28	平底。	器面剥落のため不明。	—	暗褐色~淡赤褐色。
甕	29	平底。	外面はナデ、内面は板ナデか。	—	胴部の内外面にも煤もしくは炭化物付着。
甕	31	大形品。口縁部はゆるやかに大きく外反。端部は丸く上下両端に2段の刻目を施す。胴部の張りは弱い。	剥落が著しい細部不明。	胴部最上位に粘土紐接合部を利用して段を作り出しその上端に刻目を施す。	暗褐色。焼成はやや軟質。砂粒・石粒を多含。
甕	32	大形品。口縁部はゆるやかに小さく外反。端部は凹曲する平端面をなし上下両端を小さく肥厚させる。胴部は上半が直線的でふくらみをもたず。中位以下はやや急斜で直線的である。	口縁部は横ナデ、胴部外側は上半が縱方向の板ナデ、下半が縱もしくは左上り縱方向の荒い觸毛目調整(5条/cm)で部分的に縱方向のラフな板ナデが及ぶ。胴部内面は上半は指頭圧痕を多くとどめ下半は左上り横方向の板ナデ。	口縁部下方に刻目を密に施す。	外面に煤が付着。1~2mm大の石粒を多含し焼成は良好。暗茶褐色。

## (2) 北 調 査 区

高峰遺跡北区は造成予定地内西端部に位置しており、南区とは林道を挟んで北側に位置する。調査区の位置する丘陵は標高199~202mを測る比較的尾根幅の広い緩丘陵面で、北側には宗祐池に貢入する狭小な谷水田が存在する。試掘段階においては調査区東側斜面で住居跡らしき落込み及び中央部付近でピット等を検出した。この結果、東西44m、南北64m、総面積約3,000m<sup>2</sup>の調査区を設定し、地山直上の漸移層面までの土を重機によって排土することより調査を開始した。地山面まで北調査区の基本的土層は腐植土下に20~40cmの厚さで暗褐色土が堆積し、この下に地山土に近似する黄褐色ないしやや赤みがかった褐色土の漸移層が10~20cmの厚さで堆積していた。

造構検出面は地山面で、区内の南辺部を中心として住居跡3軒を検出したほか、完形の土器を包含するピット、ファイヤーピット、袋状穴等を検出した。

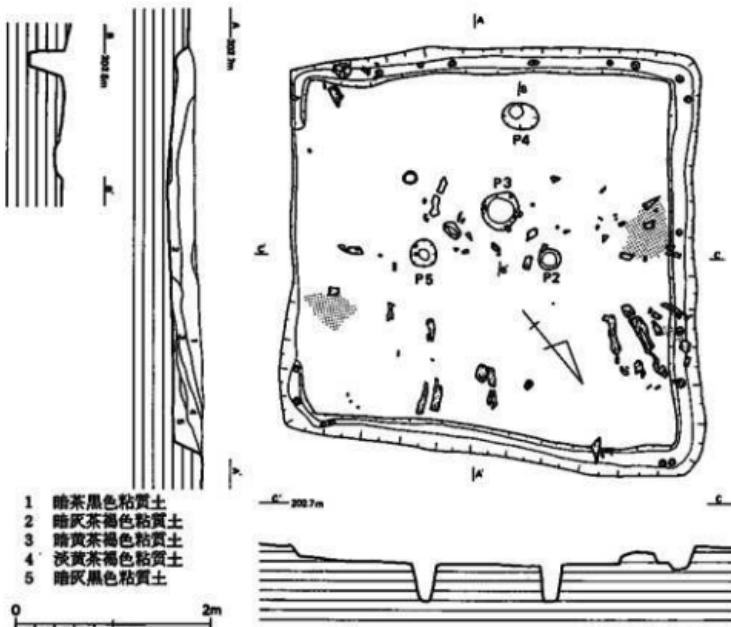


第VI-17圖 高峰造跡北區造構配置圖 (1:400)

## 1) 検出の遺構

### a) 第5号住居跡(第VI-18図)

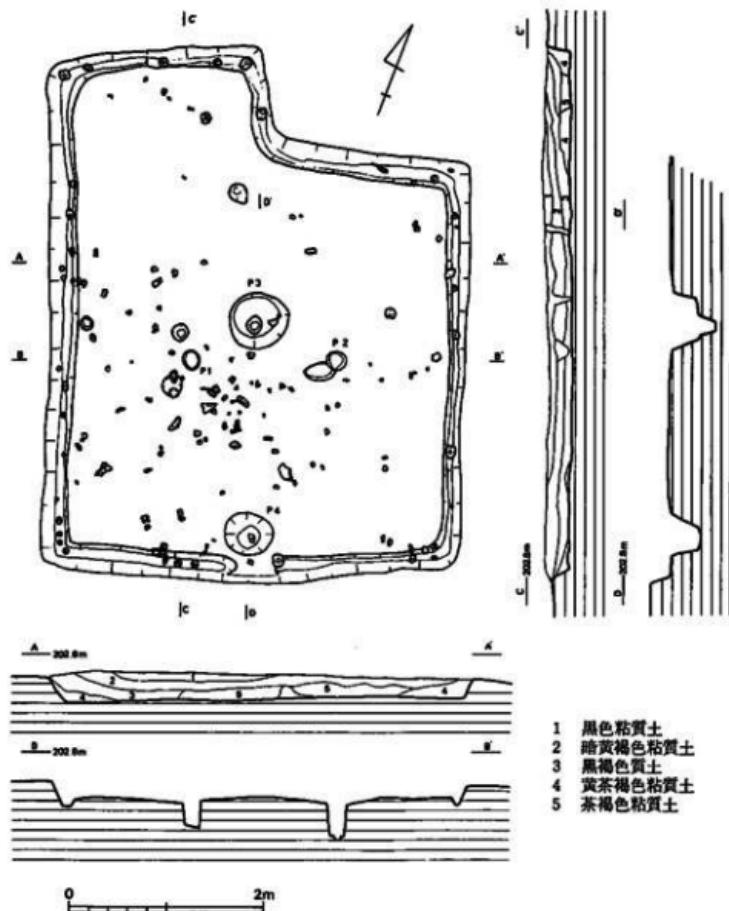
本調査区南西隅より検出した住居跡で東西辺3.7~4.3m、南北辺4.2~4.3mを測り、やや合形状を呈す方形住居跡である。壁高は7~20cmを測りやや南側隅が低くなる。側壁に沿って幅約10~30cm、床面よりの深さ約5~10cmの壁溝が南東辺を除く3辺を残っており、壁溝中には直径約7cm、深さ約2~15cmの柱痕があるが、その配列には規則性は認められない。床面はほぼ平坦面を呈し水平である。主柱穴は側壁より約1.2~1.4m内側で2つ検出したが炉跡らしきものは検出しなかった。主柱穴はともに直径約25cm、深さ約40cm、柱間距離1.3mを測り、主軸方向はN46°Wを指向する。床面より約15cm浮いた状況で炭化した柱材が住居跡中央及び北西辺沿いを中心に散乱した状態で検出し、また焼土を検出した。本住居跡内より出土した土器は土師器・甕・高杯等の細片で数量的には少量である。以上のことより本住居跡は家屋廃棄の際またはその後の火災によって消失したものと思われる。



第VI-18図 高峰遺跡北区第5号住居跡実測図(1:60)(アミ目は焼土面)

b) 第6号住居跡(第VI-19・21図)

本住居跡は調査区南辺部中央付近で検出したもので、SB5とは約9m離れて位置する。東辺4.1m、西辺5m、南辺4.3mを測り、北辺西半部が約80cm突出した特異な形態を呈す住居跡である。壁高は20~25cmを測り側壁沿いには幅約10~20cm、深さ約7~12cmの壁溝が走っており、南辺中央部で途切れている。壁溝内には直徑約10cm、深さ約10cmの柱底が点在するが、配列には規則性は認められない。床面はほぼ平坦面を呈し水平である。主柱穴は側壁より約1.3



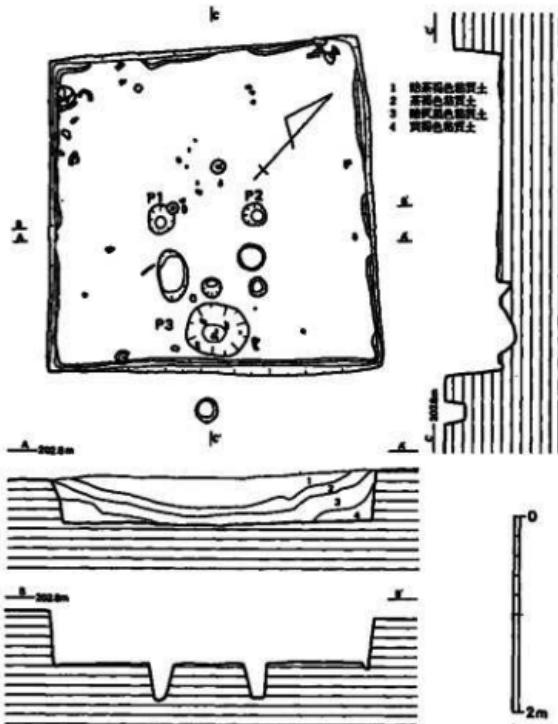
第VI-19図 高峰遺跡北区第6号住居跡実測図 (1:60)

～1.4m内側で2つ検出した。主柱穴P1は直径約20cm、深さ約25cm、P2は直径約20cm、深さ約30cmを測り、柱穴間の距離は約1.5mを測る。主軸方向はN69°Eを指向する。この主柱穴よりやや北西によった所で中央ピットを検出する。中央ピットは直径約60cm、深さ約40cmを測り、ピット内には暗茶褐色土、暗灰褐色土が充填していた。またその他にも本住居跡内で直径約20cmのP3を検出するが本住居跡に伴うものかは明らかではない。出土の遺物には土師器高杯、碗等があるが、いずれも床面より若干浮き、中央付近より南西隅にかけて散乱する状況を呈していた。またP1の南側30cm付近より鉄鏃1点が出土した。

### c) 第7号住居跡(第VI-20図)

本住居跡は調査区南辺東側隅で検出したもので、SB6とは約24m東側に離れて位置する。規模は一辺3.2～3.5mを測り方形プランを呈す。側壁の残存状況は良好で壁高は約50～60cmを測り、壁溝底面よりほぼ垂直に近く立上る。

壁溝は幅が約10cm、深さ約3cmを測るだけの小規模なもので数ヶ所にわたって途切れている。底面はほぼ平坦面を呈し、この床面中央、側壁よりそれぞれ約1.2m内側で主柱穴2本を検出した。主柱穴はともに直径約25cm、深さ約35cmで柱間距離は約1mを測り、主軸方向はN43°Eを指向する。主柱穴の他にも直径20～50cmのピットを検出するが、本住居跡との関連は明らかではない。また中央ピットは確認されなかつたが、南東辺中央付近より長径約65cm、短径約50cm、深さ約15cmを測る梢円形のピットを檢



第VI-20図 高峰遺跡北区第7号住居跡実測図 (1:60)

出した。このピット中からは細片の土師器が出土した。主要な出土遺物としては、本住居跡北側隅より完形に近い土師器高杯2個体、西側隅の壺1個体分をそれぞれ床面にはば密着した状態で出土した。また主柱穴P 1の床面より約35cm浮いた状態で鉄錠1点を出土した。

#### d) ピット(第VI-22・23図)

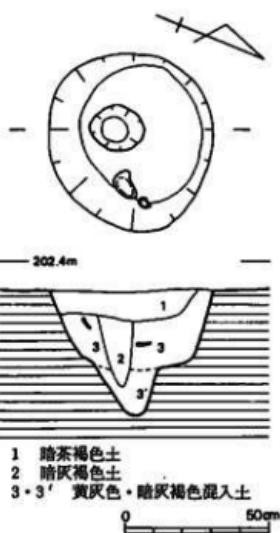
S P 1 S P 1は調査区南辺部西隅より検出したもので、SB 5より南へ約10m離れて位置する。上端径約70cm、下端径約55cm、深さ約15cmを測り円形を呈す。底面は緩やかに凹んでおり西半部がやや一段高くなっている。流入土中には多量の炭・焼土が混在しており、最大約30cmもの炭化材が底面に密着した状態で出土した。このことより本ピットは腰をとるためのファイヤーピットと考えられる。流入土中からは土器片は出土しなかった。

S P 2 S P 2はSB 6より北東側約7m離れた箇所で検出した上端で57×46cmを測る不整円形を呈し、深さは約26cmを測る。底面は20×12cmの橢円形を呈す。底面はほぼ水平で、底面より約72°の角度で壁が立上った後中ほどよりやや緩やかに立上っている。流入土は暗褐色土で底面より約20cm浮いた状態で土師器壺等の破片が出土した。

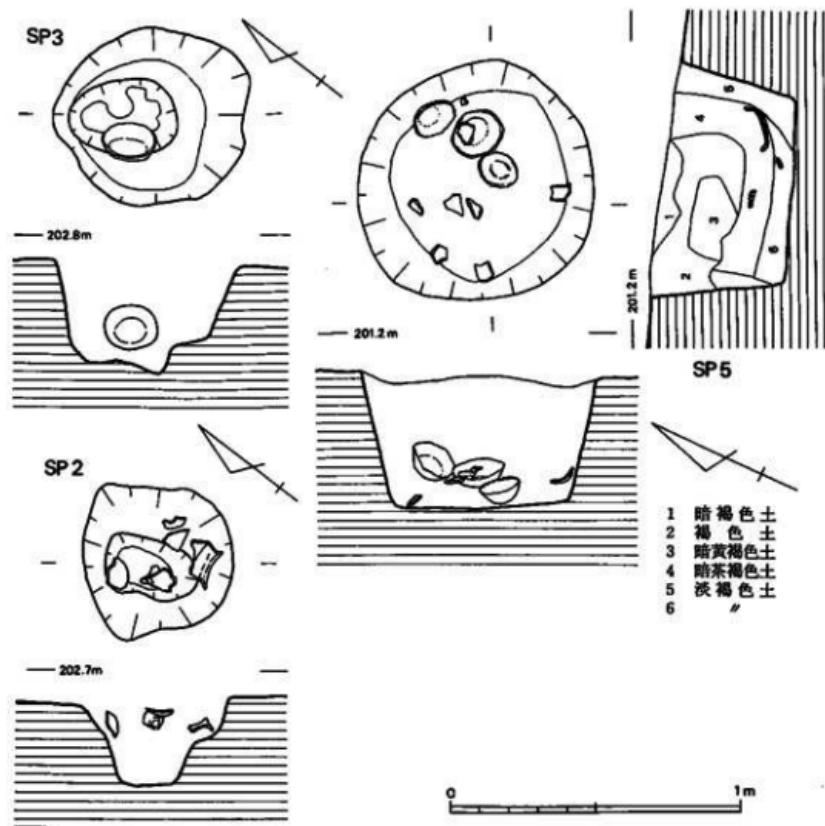
S P 3 S P 3はSB 6より北側約9m離れて検出したピットで不整円形プランを呈す。上端は70×60cm、深さ約35cmを測る。底面はやや凹凸があり、西側壁はほぼ垂直に立上るのに對し、東側では肩より約25cm下で三日月状のテラス面を有す。流入土は暗褐色土であり、底面より約10cm浮いた状態で脚柱部を欠損した土師器高杯1点を出土した。

S P 4 S P 4はSB 6より北側約11m離れて検出したもので、上端長径約1.05m、短径約90cm、下端長径約75cm、短径約65cm、深さ約15cmを測る不整円形プランを呈す。底面は中央部がやや凹み、壁は緩やかに立上る。遺物は出土しなかった。

S P 5 調査区東辺部、SB 7より北側へ約15m離れた丘陵斜面上で検出したピットで、上端直径約60cm、深さ約50cmを測るほぼ円形プランを呈すものである。底面はほぼ平坦・水平であり、壁は底面より垂直に近い状態で立上る。流入土は暗褐色土・地山ブロックを含んだ褐色土であり、底面より2~10cm浮いた状態で土師器の脚柱部を欠失した高杯・壺等が近接し、口縁部を上向きにして出土した。



第VI-21図 高峰遺跡北区第6号住居跡内中央ピット(P 3)  
実測図(1:20)



第VI-22図 高株遺跡北区 S P 2・3・5 実測図 (1 : 20)

S P 6 (第VI-23図) 調査区北辺部。中央よりやや西側に於て斜面上で検出したもので、上端径0.9~1m、下端径1~1.1m、深さ約35cmを測る不整円形のいわゆる袋状堅穴である。底面はやや中央部が凹むがほぼ水平である。流入土は黒色土~黒灰色土で、遺物はない。

#### 6) その他の遺構

S X 1 S B 6の北側、S P 2・3に近接して位置する。土器高杯・埴輪の破片が6×10mの範囲内で数ヶ所にわたまり地山面に密着して散布していた。性格は明らかではない。

## 2) 出土遺物

高塚遺跡北区においては検出の住居跡及びピット等より比較的良好な状況で土器類を出土した。しかし、南区で検出されたような須恵器を伴う遺跡は皆無であり、時期による占地空間の差異を窺わせた。

### a) 第5号住居跡(第VI-24図)

**土器高杯(6)** 脚部基部は比較的細く直線的に外下方に開いた後、強く屈曲して更に外下方に直線的に開く。黄褐色を呈し砂粒を多含する。

### b) 第8号住居跡(第VI-24・25図)

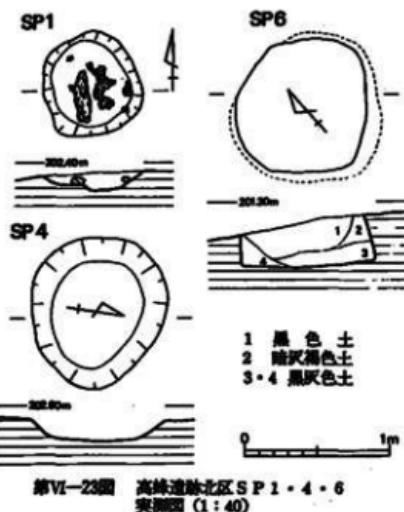
**土器楕(1~3)** 丸底で底部より体部へ緩やかにカーブし、体部は内湾して端部に至り、端部も内湾気味に丸くおさめるもの(1・2)、やや外反するもの(3)がある。1~3とも外面横ナデするが、1・3は体部外面に指頭圧痕を良く残す。また3は口縁部内面に木端痕を残す。ともに砂粒を多含し、淡赤褐色~黄褐色を呈す。

**高杯4** の脚部は基部より緩やかに外下方に開いた後、屈曲して更に外下方に開く。基部直下には外より内に穿つ円孔が1ヶ所ある。外面及び脚部内面は横ナデし、脚柱部内面はヘラ削りする。淡赤褐色を呈し砂粒を含む。5は底部から体部にかけ外上方へ直線的にのび、体部とはわずかに接線をもつ。内外面とも横ナデし、暗黄褐色を呈す。砂粒を多含する。

**鉢器** 14は笠形を有する有茎式で圓錐形の器である。造りは両丸造で、開口は片開式である。現存長は14cmである。

### c) 第7号住居跡(第VI-25・26図)

**土器壺** 7の口縁部は頭部より強く外反して開き端部はやや内傾して丸くおさめる。体部はほぼ球形を呈し最大胴径は中位ほどにある。底部は丸底を呈す。口縁部内外面とも横ナデし、体部は内面上より少しへら削り、下半はナデ、外面上位は横位、中位は斜位、下位は斜位で交差する刷毛調整。なお外面の口縁部及び体部上位に漆の付着が認められるほか、内面下半には炭化物の付着が認められる。暗黄褐色を呈し、細砂粒をわずかに含む。8は小形品で口縁部は緩やかに外反し上方にのび端部は丸くおさめる。体部は緩やかに内湾して下方に向う。口縁部内外面横ナデ。体部外面は横位の刷毛調整し、内面は横位のへら削りを行う。黄褐色を呈し砂粒を含む。



第VI-23図 高塚遺跡北区 S P 1・4・6  
実測図 (1:40)

**鉢** 9は把手部で牛角状を呈す。黒褐色を呈し砂粒を多含する。

**高杯** 10・11の杯底部は緩やかにカーブして体部にかけては明瞭な段をもつ。体部は内湾して立上り、口端部はやや外反し尖るもの(10)、丸くおさめるもの(11)がある。脚部は基部より緩やかに外下方に開き、裾部にかけ大きく開いて端部は丸くおさめる。11は杯部内外面とも横ナゲ、脚柱部外面は縦位のヘラ磨き、内面横位のヘラ削り、脚裾部内外面とも横ナゲする。

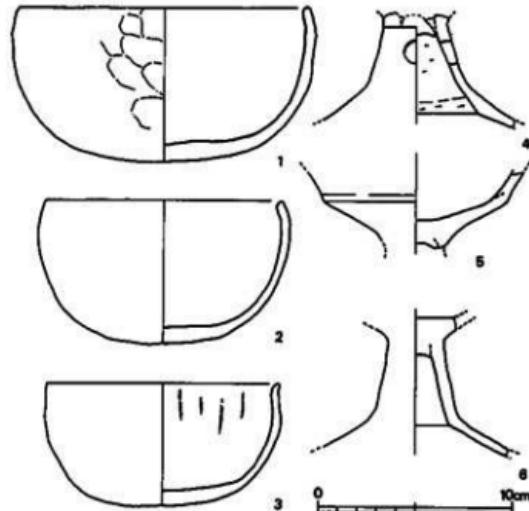
12の底部はほぼ直線的に上方にのび体部へは強く屈曲し、体部は直線的に外上方へ開く。13の脚柱部基部は比較的大く外下方へ開き強く屈曲して裾部が開き端部は丸くおさめる。外面調整不明で脚柱部内面は横位のヘラ削りする。杯部と脚部との接合部に指頭圧痕を残す。黄褐色を呈し細砂粒を多含する。

**鉄器** 15は笠被ぎを有する有茎式で盤筋形の鎌である。造りは両丸造で、関は片開式である。残存長は15.2cmである。

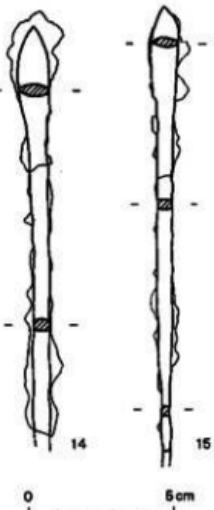
#### d) ピット及びその他の造様(第VI-27図)

##### S P 2 (16)

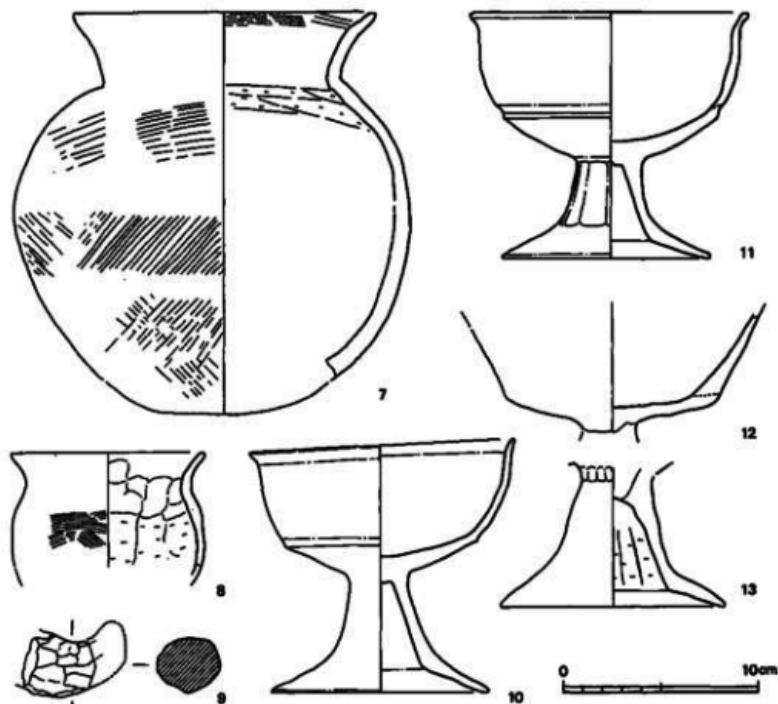
**土師器壺** 口縁部は頸部より強く外反して上方へのび端部は矩形を呈し浅い条線を1条廻す。体部は頸部より緩やかにカーブして下方に開く。口縁部内外面横ナゲ、体部内面横位のヘラ削り、外面縦位の刷毛調整を施す。



第VI-24図 高峰遺跡北区第5・6号住居跡出土土器実面図(1:3)



第VI-25図 高峰遺跡北区第6・7号住居跡出土鉄器実面図(1:2)



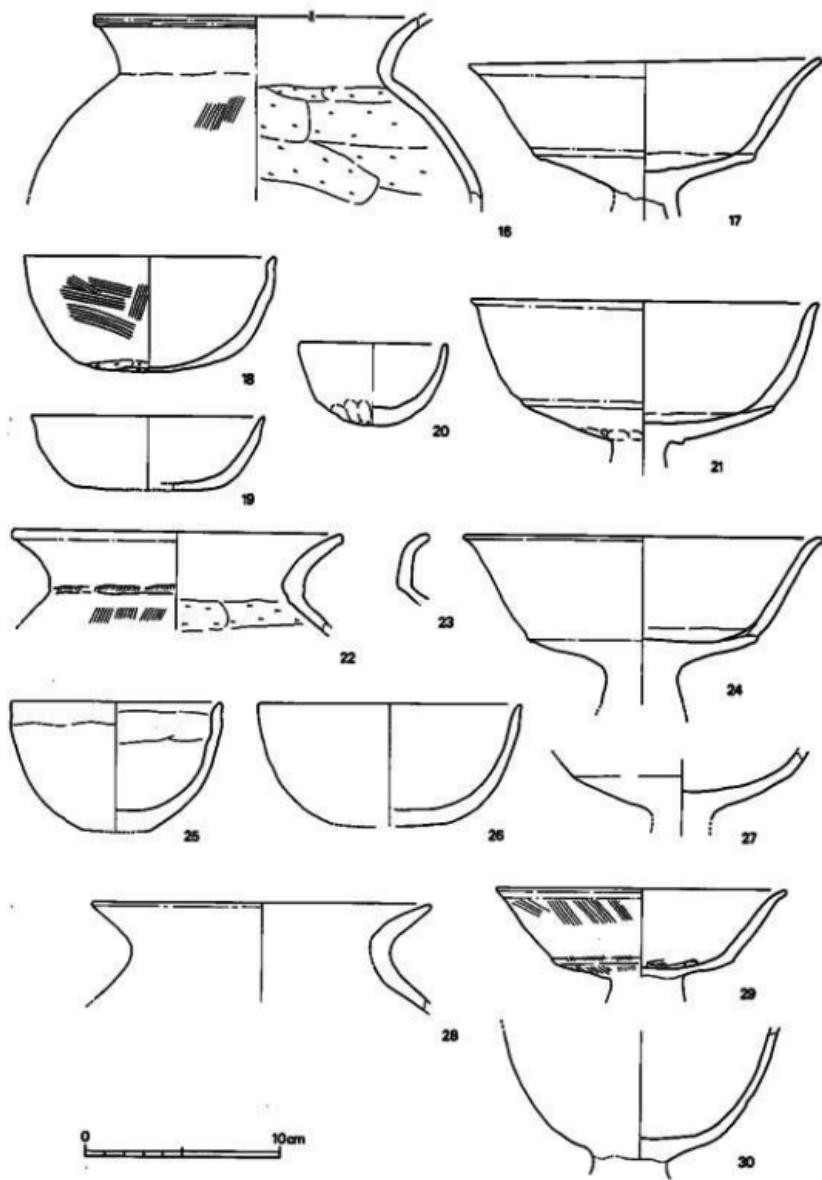
第VI-26図 高峰造跡北区第7号住居跡出土土器実測図 (1:3)

### S P 3 (17)

**土師器高杯** 底部は直線的に外上方にのび体部へは強く屈曲する。体部はやや内湾した後外反して端部は丸くおさめる。内外面とも横ナデし赤褐色を呈す。砂粒は少なく精良である。

### S P 5 (18~21)

**土師器鏡** 18は底部は丸みをもち器肉が薄い。体部へは丸みをもち体部は内湾して立上り、端部はわずかに外反して尖る。口縁部内外面横ナデし、体部から底部内面はナデつける。体部外面は不定方向の刷毛調整し、底部外面は内側から外側へ向けヘラ削りする。黄褐色を呈し砂粒を多含する。19は底部はほぼ平坦で体部へ丸みを呈し、体部はやや内湾して立上り端部は器肉が薄くなつて尖る。口縁部外面横ナデするほかは調整不明。赤褐色を呈し砂粒を多含する。20は小形品で、底部は丸く体部へかけ丸みをもつ。体部は内湾して立上り端部は丸くおさめる。内外及び体部外面横ナデする。体部下半に指頭圧痕を残す。赤褐色を呈し細砂粒を含む。



第VI—27圖 高峰遺跡北區出土土器實測圖 (1:3)

**高杯** 21の底部は緩やかにカーブし体部とは明瞭な段を有す。体部は肥厚し内湾して立上り端部はやや外反して尖る。内外面とも横ナデし接合部付近には指頭圧痕を残す。赤褐色を呈し砂粒を多含する。

#### S X 1 (22~27)

**土師器腹** 22の口縁部は頸部より強く外反して上方へのび端部は矩形を呈す。口縁部内外面横ナデし、体部内面横位のヘラ削りを行う。頸部外面は刷毛調整後横ナデし、体部外面は縦位の刷毛調整を施す。黄褐色を呈し砂粒を含む。23は頸部よりほぼ垂直に口縁部が立上り端部は外反して丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデし体部内面は横位のヘラ削りを行う。赤褐色を呈し砂粒を多含する。

**瓶** 25の底部はわずかに平坦面をもち体部へ丸みをもつ。体部は内湾して立上り端部はわずかに外反して尖る。口端部内外面横ナデし、体部内外面ナデつける。赤褐色を呈し砂粒を多含する。26-底部は丸く体部へ丸みをもつ。体部は内湾して立上り端部は尖る。

**高杯** 24の底部はほぼ平坦で体部へ屈曲して外面に稜線を有す。体部はわずかに内湾し外上方へ開き、端部はわずかに外反して丸くおさめる。口縁部・体部内外面は横ナデし、底部内面ナデつける。赤褐色を呈し砂粒を多含する。27は底部が緩やかにカーブし体部へ続く。内外面とも横ナデする。黄褐色を呈し砂粒を多含する。

#### 包含層中の遺物 (28~30)

**土師器腹** 28の口縁部は頸部より強く外反して外上方に開き端部は丸くおさめる。調整は不明で黄褐色を呈し、砂粒を多含する。

**高杯** 29の底部は平坦で体部とは稜線を有す。体部は直線的に外上方へ開き端部は外反して丸くおさめる。口縁部内外面及び体部内面は横ナデし、体部外面は斜位の刷毛調整後横ナデする。底部内面はラフな刷毛調整後ナデつけ、外面は放射状に刷毛調整する。黄褐色を呈し砂粒を多含する。30は底部より体部へ丸みをもち、体部は内湾して立上る。調整は不明で黄褐色を呈し砂粒を多含する。

(飯治)

### (3) 小 結

今回の調査により、本遺跡は古墳時代の集落跡であり5世紀後半期と6世紀後半期の2時期にわたって集落が営まれていることが明らかとなった。当該地は、1977年～1979年にかけて調査を実施した松ヶ迫遺跡群の大集落群に東接し、特にA地点の集落跡とは至近の距離にある。そのため、集団関係においても何らかの関連をもつことは容易に想定され、古墳時代集落遺跡の数少ない地域的規模での実態把握に際して有効な資料を提供することができた。

また、これら以外に弥生時代前期の住居跡と思われる遺構を発見し、遺物も含めて多くの成果を得ることができた。この時期の住居跡は三次地域はもとより中国地方でも類例が極めて少

なく貴重なものであった。

以下では、南北両区についてそれぞれの概要と問題点の抽出を行い、まとめとしたい。

### 1) 南調査区

南区で検出した遺構は住居跡4軒（うち古墳時代後半期3軒、弥生時代前期1軒）、各種の土塙8基、小ピット多数である。

#### （a）集落跡について

古墳時代の3軒の住居跡は、6世紀後半に属し、方形もしくは長方形の4本柱構造の竪穴式住居である。規模は若干大小差があり、第3号住居跡が1辺7mで大型住居跡の部類に属す。住居跡には造付けのカマドを設置している。

これらの住居跡は、丘陵平坦地を避け南側斜面に谷筋に沿って構築されている。これは南側前面の細長い谷部を意識した占地であり、この集落の生産基盤はこの谷水田に求められると思われる。この谷水田は谷幅は狭いが東西に長くのび、馬洗川に続いている。現在の水田地は、自然湧水と溜池用水を利用しておらず、ほぼ中位の中畠古墳を境に西方奥部が自然湧水、東方前面が溜池用水による水田経営である（第1-1図参照）。この点は集落跡の水田経営の規模に関して示唆的で、おそらく西半の自然湧水による水田部分の一部が当時の経営範囲に相当するものと推測される。小規模な集落単位にあっては、この程度の狭小な谷水田でも充分にまかない得たと考えられ、土地占有の自立的傾向が窺われる。もっともそのことは、水田経営や集落経営の自立性を意味するのではなく、他の生産部門においては当然周辺の近接する集落との協業、分業が日常的に行われていたであろう。とりわけ、本遺跡と尾根続きで接する松ヶ迫A地点集落跡とは時期的にもほぼ同じであるので、緊密な関係にあったものと思われる。むしろ、同一集落としてとらえるべきかもしれない。

#### （b）弥生時代前期の住居跡について

本遺跡で発見された第4号住居跡は、集落構成をなさず単独で存在し、同時期の他の遺構についても明確なものは認められなかった。また、構造的には主柱をもたず、幾つかの支柱を組み合わせて構築したものと思われ、多數の小ピットが検出された。壁面も通常の住居跡と異り明瞭なたちあがりをみせず渾曲気味であり、下端には壁溝を伴わない。

このような特徴は、通常の住居跡の諸要素と幾分異っている。にもかかわらず、この遺構を住居跡と判断したのは、出土遺物からである。土器は煮沸用の甕が主体で、小形品5点、大形品3点で外面に煤の付着したものがある。石器は、石鎚、石錐とともに多数の剥片・チップが出土し、その上、ハンマーストーンが1点認められた。これらの内容は遺構内での石器製作を窺せるものである。さらに種子が中央付近より2点出土していた。以上の点は、居住空間としての痕跡を示しているものである。

アフリカのムブティ・ビグミーの狩猟民俗例によると、彼らが獵場のキャンプでつくる小屋一複数であるが一は、敷地を決めて簡単に整地し、2~3mの細い木をほぼ円形に地面に埋め込む。そしてこれを上で結えてドーム型の枠組を作り、マンゴンクの大きな葉を重ねて葺いて

(1)

できあがる。小屋作りに要する時間はわずか4時間程度で、しかもそれは女性の仕事であるといわれる。そして興味を引くのは、このように簡素な家庭であるにもかかわらず、数ヶ月間の使用に耐えるということである。

このビグミーの例は、本住居跡のあり方について示唆的である。弥生時代前期では水稻農耕以外に狩猟、採集などの親文的な生業形態も補助的にではあれ、かなりのウェートを占めていたものと思われる。単独に存在し、小規模で特殊な住居構造、住居内での石器などの石器製作、土器にみられる一定期間の居住性など本例にみられる特徴は、定着的ではないにせよ、ある程度の継続的もしくは断続的居住性を示しており、狩猟採集用のキャンプ的性格をもつものであったと考えられる。おそらく、ベースとなる農耕集落から季節的にあるいはより日常的に往来し、当地を拠点にしながら狩猟・採集活動を行ったものであろう。

ところで、住居跡内で一括出土した土器群は、壺および甕の一部に粘土組合時に生じた高低に沈線をひくなどして段を作る手法がみられ、また、削出突帯のものが全くない。これらの特徴は前期でもかなり古い時期に遡ると思われ、佐原真氏による古・中・新三段階説によると古段階に属す。近隣での類例としては、岡山県津島遺跡の一例などがあげられよう。(桑田)

## 2) 北調査区

### (a) 住居跡について

北区では住居跡3軒をはじめ、土器を包含したピット、ファイヤーピット等を検出した。住居跡についてはSB6を除くSB5・7は方形プランを呈し、SB6は北側に張出し部を有する特異な形状を示す。しかしいずれも主柱穴が2本で炉址らしきものは検出できなかった。古墳時代に於ける方形プランを呈す住居跡のうち主柱穴が2本の類例は、近くでは庄原市新庄町永宗遺跡検出のものが知られており、古墳時代前半期には一般的に認められるものようである。しかしSB6のように張出し部を有する住居跡については県内では類例が知られておらず、その家庭構造及び張出し部の機能については不明である。

これら3軒の住居跡の存続時期については出土遺物から5世紀後半期のものと考えられ3軒が同時存在した可能性が強い。

次に南区と比較すると、南区で検出した住居跡は弥生時代前期のものを除いて3軒とも6世紀後半期のものであり、北区の住居跡と時期的に異っている。その家庭構造についても南区のものはいずれも主柱穴4本で、カマドを付設したものが2軒ある。これに対して北区のものは2本柱のものであり、カマドは伴わない。しかも南区の住居跡は意識的に丘陵斜面に営んでいる。同様な傾向は松ヶ迫B・F地点で顕著に認められる。一方北区の住居跡については丘陵最高所ではないにしてもほぼ丘陵尾根の平坦面に営んでいる。このように両者には居住地の空間利用において時期的な差が認められた。

### (b) ピットについて

土器を包含したピットの性格については明確ではないが、単に土器を廻収した穴とは考えがたい。このことはこれらのピット中に一般的に日常使用されるべき甕・壺がほとんど出土せず、高杯・碗類が大多数を占めることからも窺える。ひとつの可能性として祭祀に関連する遺構とも考えられるが明確ではない。

(銀治)

注

(1) 市川光雄『森の狩猟民 ムブティ・ビグミーの生活』人文書院 1982年

(2) 棚田慶司「中部都戸内の前期弥生土器の様相」『全教考古学研究集報』第17号 1982年

(3) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『西山・小和田・永宗』 1982年

## VII 松ヶ迫A地点遺跡

本遺跡は造成地域内の西隅に位置し、前回調査のA地点遺跡の南東にある。北西へ緩やかに張出した尾根の頂上部平坦面に在り、標高200~203m、平坦面は幅50m程度を測る。北方眼下には現在中國縦貫自動車道が走っている。

調査は1辺20mのグリッドを組み、重機で試掘溝を入れ、その結果に基づき範囲を確定し、重機を使用して表土剥ぎを行った。その後人力で遺構検出を行ったところ、土塁7基を検出した。しかし当初予想していた縄文早期の遺構や第1期の調査で出土していた押型文土器は出土しなかった。

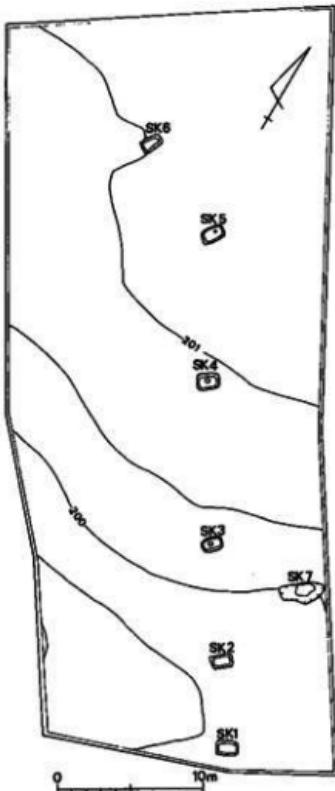
土層は第1層表土(茶褐色腐植土)、第2層黒褐色土(黒フク)、第3層地山(黄褐色土)を基調としており、遺構掘込面は第2層からと考えられる。しかし遺構の表土との区別が難しい為、地山面まで削平しての遺構検出となった。

### (1) 検出遺構

検出された7基の土塁は長方形のものが6基、不整形のものが1基であった。6基の長方形土塁の内3基は底部にピットを有していた。またこの6基の長方形土塁は調査区の中央に7~11mの間隔ではほぼ南北に一直線に並んでいる。不整形土塁は南東端に1基だけはざれている。検出面での遺構は比較的はっきりしており、掘上った時点でもしっかりとしたものであった。

#### a) 長方形土塁 SK 1~6 (第VII-2・3図)

SK 1, SK 2, SK 6は長方形で、底面にピットをもたない一群である。土塁上端を割るとやや規模のばらつきが見られるものの、底部では長さ120cm前後、幅60cm前後とほぼ同規模となっている。元来ほぼ垂直に掘下げ、上端はやや不整であるが、下端は比較的整った長方形で隅もしっかりとしている。覆土は3土塁とも基

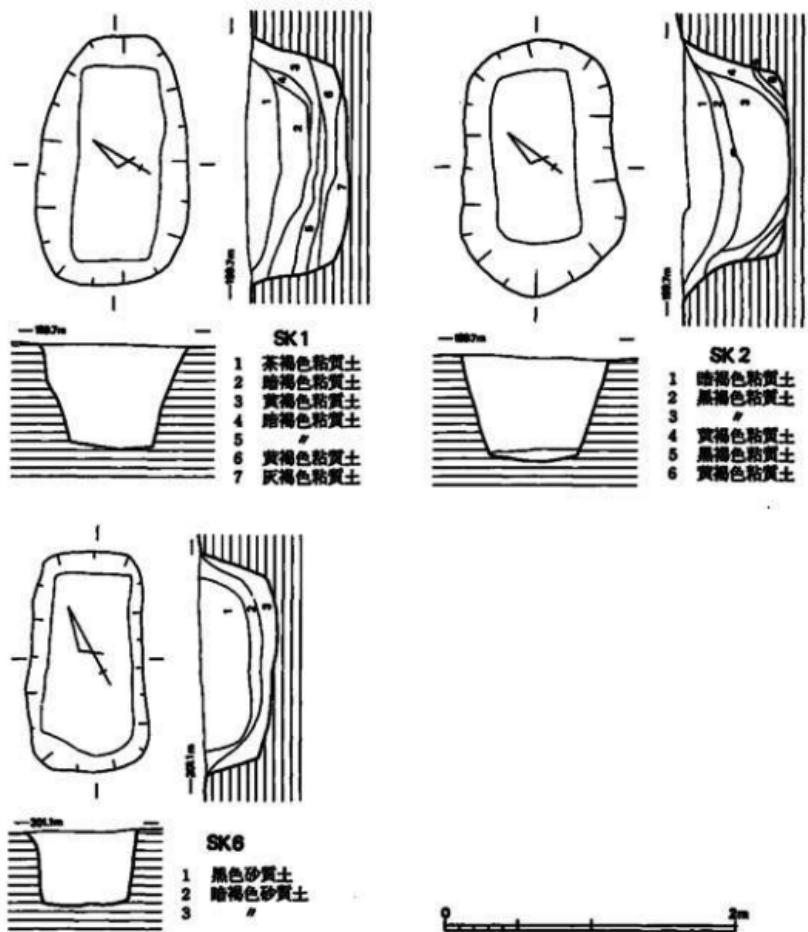


第VII-1図 松ヶ迫A地点遺跡遺構配置図  
(1:400)

本的には黒フクで、その中に地山の黄褐色土が混入している。

SK 1, SK 2は調査区の南端に隣接し、主軸は北東—南西に向き、尾根稜線と直交し、等高線とは逆に平行である。覆土は粘質土である。

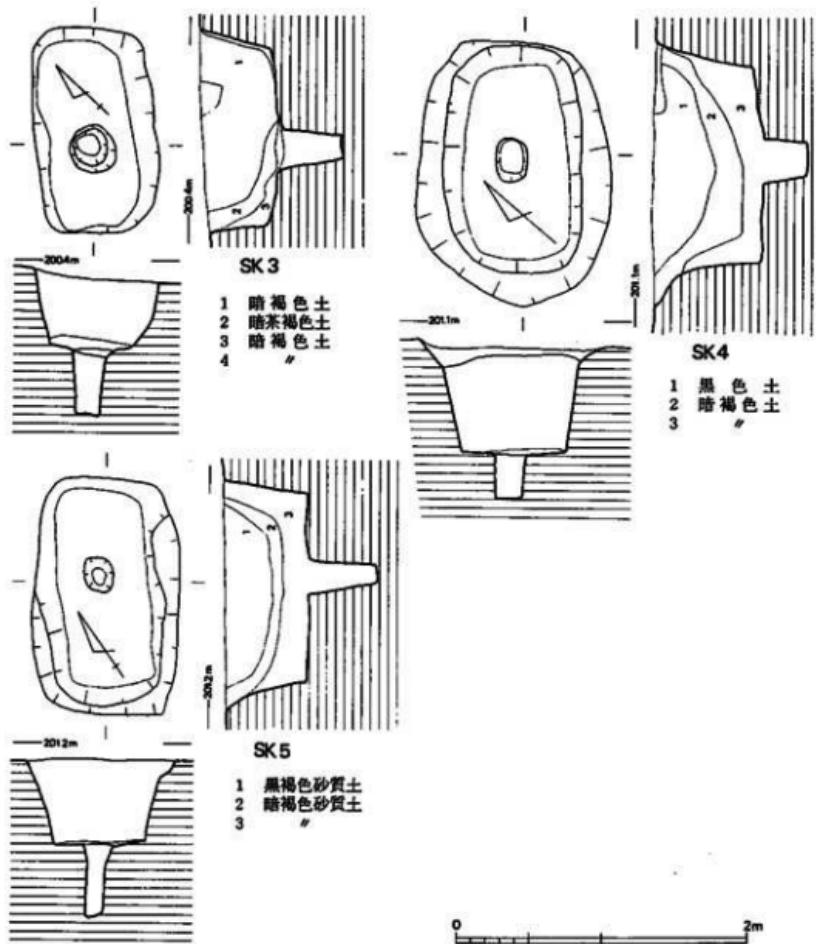
SK 6はSK 1, SK 2と離れて調査区北端に位置し、SK 1, SK 2よりも主軸が少し南北に振れ、尾根稜線と等高線に対して共に直交している。覆土は同じ黒フクでも砂質土で、かなりもろい土であった。又、6基の長方形土塙の中では南区に並ぶラインからやや西にはずれ



第Ⅷ-2圖 松ヶ迫A地点遺跡SK 1・2・6実測図(1:40)

ている。なお3基の土塙からは遺物は出土していない。

SK 3～5は調査区の中央に並んでおり、土塙底部ほぼ中央に単数の円形のピットを有する長方形土塙である。土塙の規模は、上端ではやはりばらついているが、底部では長さ120cm前後、幅60～70cmと揃っている。底部の形も先の3土塙に比較するとやや不整だがほぼ長方形を呈している。底部中央のピットについては、直径が10～20cm、深さが約30～50cmと一定してない。覆土は、SK 1・2・6と同様に黒フクに地山の黄褐色土のブロックを含んでいる。



第VII-3図 松ヶ迫A地点遺跡SK 3～5実測図 (1:40)

ピット内の覆土については、はっきりした土層分離はできなかったが、上層に比較してやや地山の黄褐色土ブロックが多い程度で、ほぼ同じと考えてよいであろう。

SK 3, SK 4 の主軸は北々東—南々西に向き、尾根の稜線と直交し、等高線とは平行する。ピットは SK 3 の方が直径約 20cm、深さ 45cm、SK 4 の方が直径約 20cm、深さ約 30cm と深さが若干違うがどちらもやや先細りとなっている。覆土は粘質土である。

SK 5 の主軸は SK 3, SK 4 よりも少し南北に振れ、尾根稜線と等高線に対して共に直交している。ピットは直径 10cm 強、深さ 50cm 程で少し北へ傾斜して落ちている。覆土は砂質土で SK 6 同様もろい土であった。なお、いずれの土塙からも遺物は出土していない。

#### b) 不整形土塙

SK 7 は先述したように 1 基だけ調査区の南東端にはずれている。一応土塙上端で、長さ約 300cm、幅約 150cm を測ったが、造構の範囲ははっきりせず、他とは全く規模の異なる土塙で、底部も凹凸があり下端もはっきりしていない。覆土は黒フクであるが、造構の掘下げ時腐植した植物繊維のようなものが含まれていたので案外新しい時期のものかもしれない。

## (2) 出 土 遺 物

先述のとおり造構からは遺物が全く出土していないが、重機による表土削平時の拂土中に土器壺と壺の破片が数点出土している。しかしこれらが造構に伴うものかどうかは不明である。

## (3) 小 結

本造跡の造構は、①長方形でピットを有さない土塙 (SK 1, SK 2, SK 6), ②長方形でピットを有する土塙 (SK 3~5), ③不整形土塙 (SK 7) とに分けられる。

しかし長方形土塙についてはピットの有無ではなくて、SK 1, SK 2~4 のグループと SK 5, SK 6 のグループがそれぞれ主軸の方位、尾根稜線や等高線との関係、覆土の土質に共通性が見られる。

造構の時期と性格については出土遺物がなく造構の数も少ないので不明な点が多い。

(片山)

第6表 松ヶ迫A地点遺跡土塁一覧表

土塁 番号	土 塁 上 部			土 塁 底		主軸の 方 位	尾 梁 と 腰梁	等高線 に 対 し て	底部 ピッ ト	形 状	備 考
	長さ cm	幅 cm	深さ cm	長さ cm	幅 cm						
1	170	105	71	132	60	N60°E	平行	平行	×	長方形	
2	187	113	70	119	57	N51°E	平行	平行	×	長方形	
3	303	152	87	99	67	N47°E	平行	平行	×	不整形	
4	141	83	52	127	60	N45°E	平行	平行	○	長方形	
5	179	132	77	131	73	N46°E	平行	直交	○	長方形	
6	160	100	57	135	67	N29°E	平行	直交	○	長方形	
7	151	81	54	124	64	N29°E	平行	直交	×	長方形	

# 図 版



a 造成地内遺跡群遠景（南西より）



b 緑岩古墳遠景（調査前）

緑岩古墳

図版 2



a 全 景 (北より)



b 同 上 (西より)



a 主体部全景（西より）



b 第1主体部（西より）



a 第1主体部（東半部分）



b 第2主体部（西より）



a 第1主体部の排水溝取付け口付近（北より）



b 第1主体部内の出土状態（南より）



a 周溝内遺物出土状態(1) 墳輪群B・土器群A（南より）



b 周溝内遺物出土状態(2) 墳輪群C



a 周溝内遺物出土状態(3) 馬形埴輪（南より）



b 周溝内遺物出土状態(4) 土器群 A (東より)



a 周溝内遺物出土状態(5) 土器群B（東より）



b 周溝内遺物出土状態(6) 土器群C（北より）



a 周溝内遺物出土状態(7) 土器群D（北より）



b 同 上



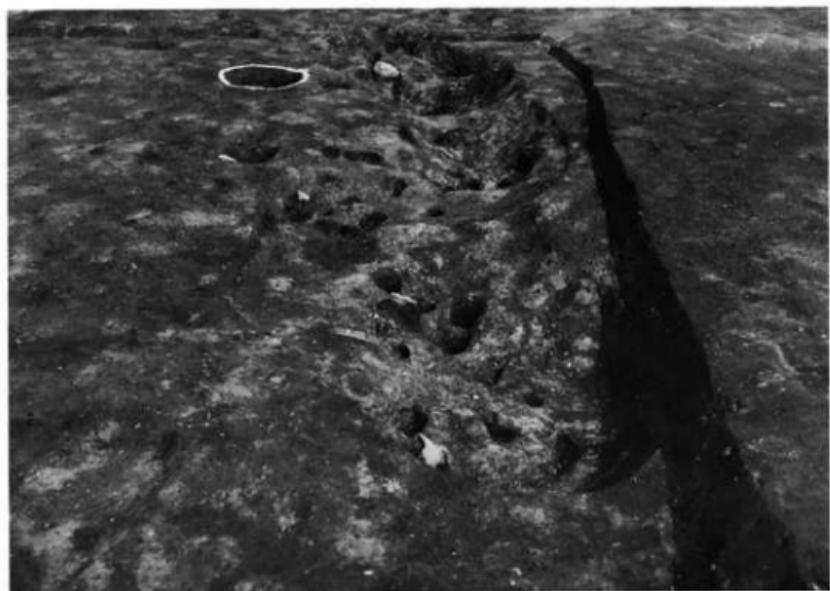
a 調査区遠景（西より）



b 全 景 （北より）



a 第1号住居跡全景（北より）



b 第1号住居跡内の溝SD1（西より）



b 第1号住居跡内の遺物出土状態(2)



a 第1号住居跡内の遺物出土状態(1)



a SK 14 (北より)



b SK 17 (北より)



a SK20 (北より)



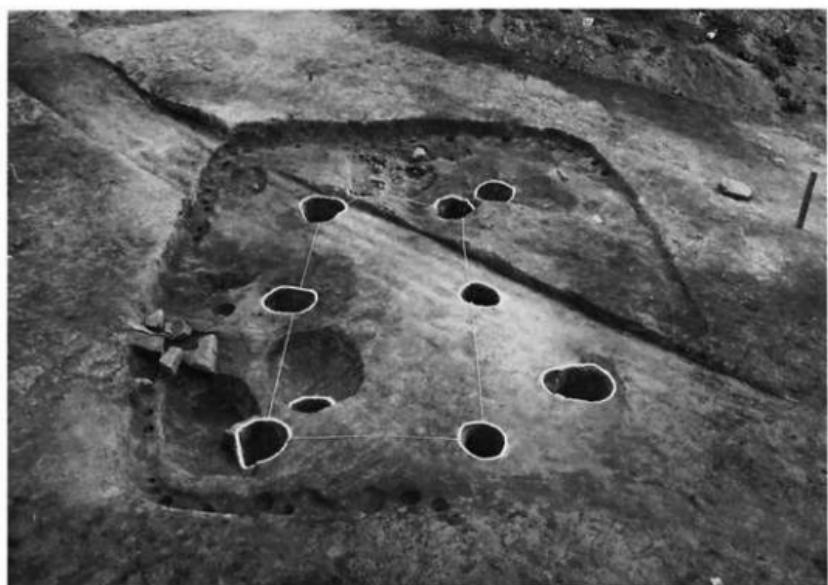
b SK24 (北より)



a 調査区遠景（南西より）



b 第2号住居跡、第3号住居跡近景（南より）



a 第2号住居跡全景（北より）



b 第2号住居跡内カマド跡（南より）



a 第3号住居跡全景（東より）



b SK 9（北より）



a SK1 (西より)



b SK10 (西より)



a SX1 (南より)



b SX1 集石下の土器群出土状態

綠岩遺跡（北区）（上） 高蜂遺跡（南区）（下）

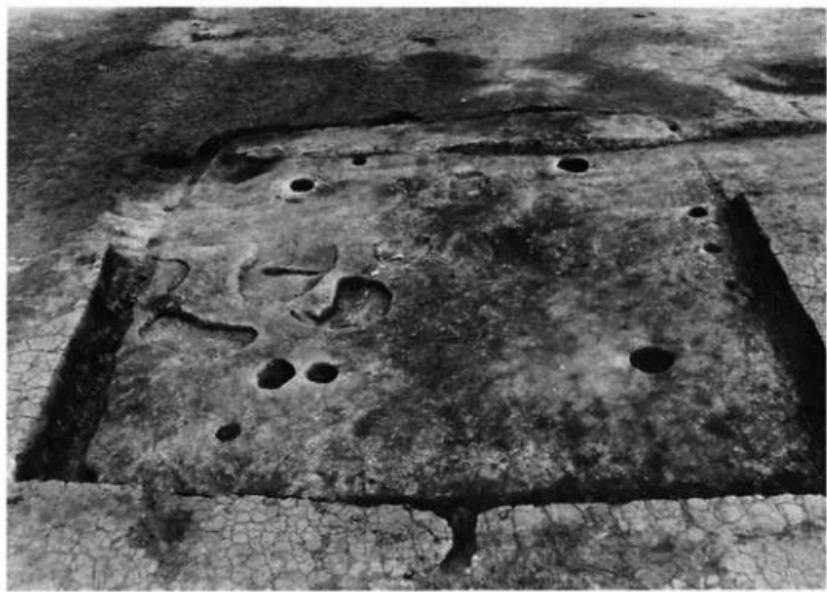
図版20



a SX2 (東より)



b 調査区全景 (東より)



a 第1号住居跡全景（北より）



b 第1号住居跡内のカマド跡煙道部（南より）



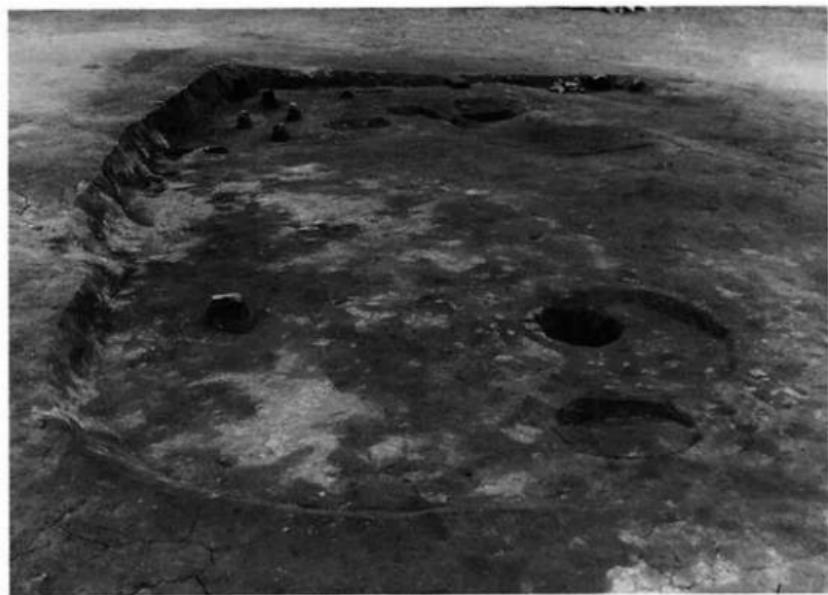
a 第2号住居跡全景（東より）



b 第2号住居跡内のカマド跡付近の土器出土状態（南より）



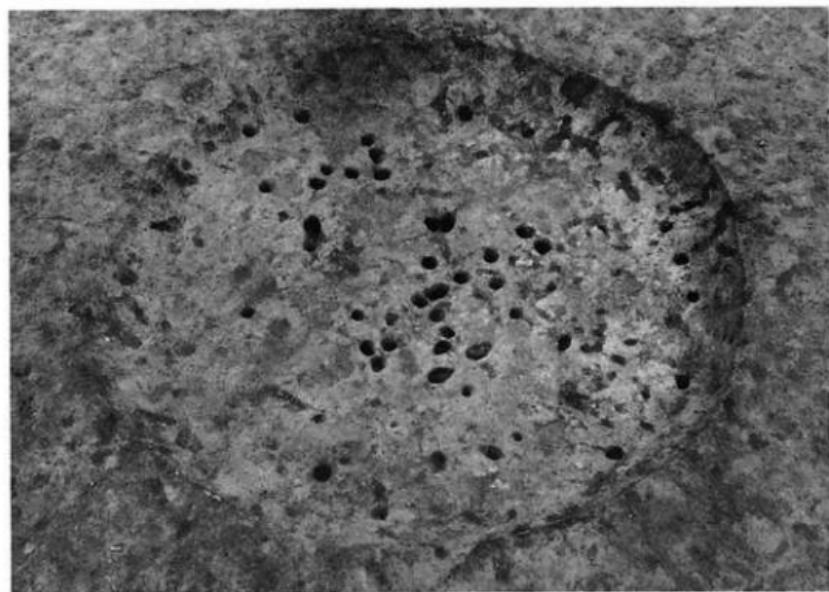
a 第2号住居跡内のカマド跡（南より）



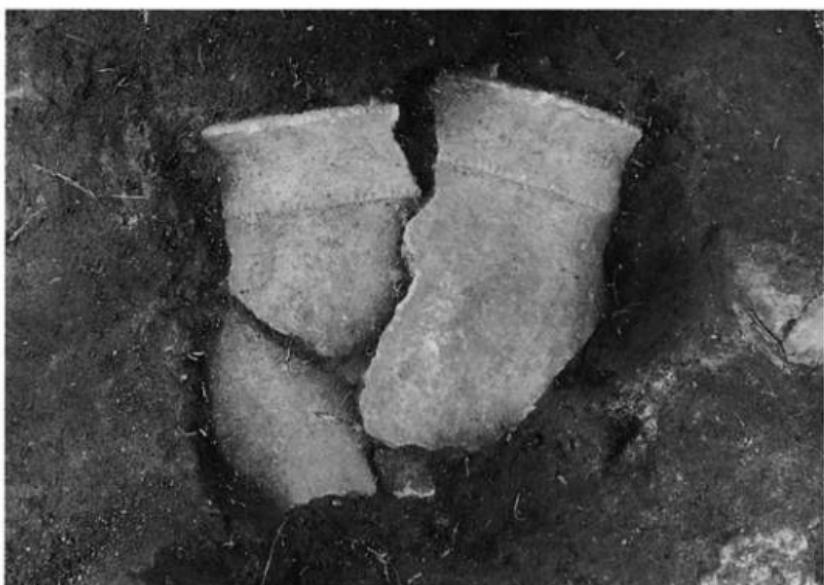
b 第3号住居跡全景（西より）



a 第4号住居跡内の遺物出土状態



b 第4号住居跡完掘後全景（北より）



a 第4号住居跡内の土器出土状態



b SK8（南より）

高峰遺跡（南区〈上〉、北区〈下〉）

図版26



a SK 6 (南より)



b 調査区全景 (東より)



a 第5号住居跡内の遺物出土状態（東より）



b 第5号住居跡完掘後全景（東より）



a 第6号住居跡内の遺物出土状態（北より）



b 第6号住居跡完掘後全景（北より）



a 第7号住居跡内の遺物出土状態（北より）



b 第7号住居跡完掘後全景（北より）



a 第7号住居跡内の土器出土状態(1) (西より)



b 第7号住居跡内の土器出土状態(2) (東より)



a S P 5 (西より)



b S P 2 (北より)



a 調査区全景（南より）



b SK 2 (西より)

高峰遺跡(上) 松ヶ迫A地点遺跡(下)

図版33

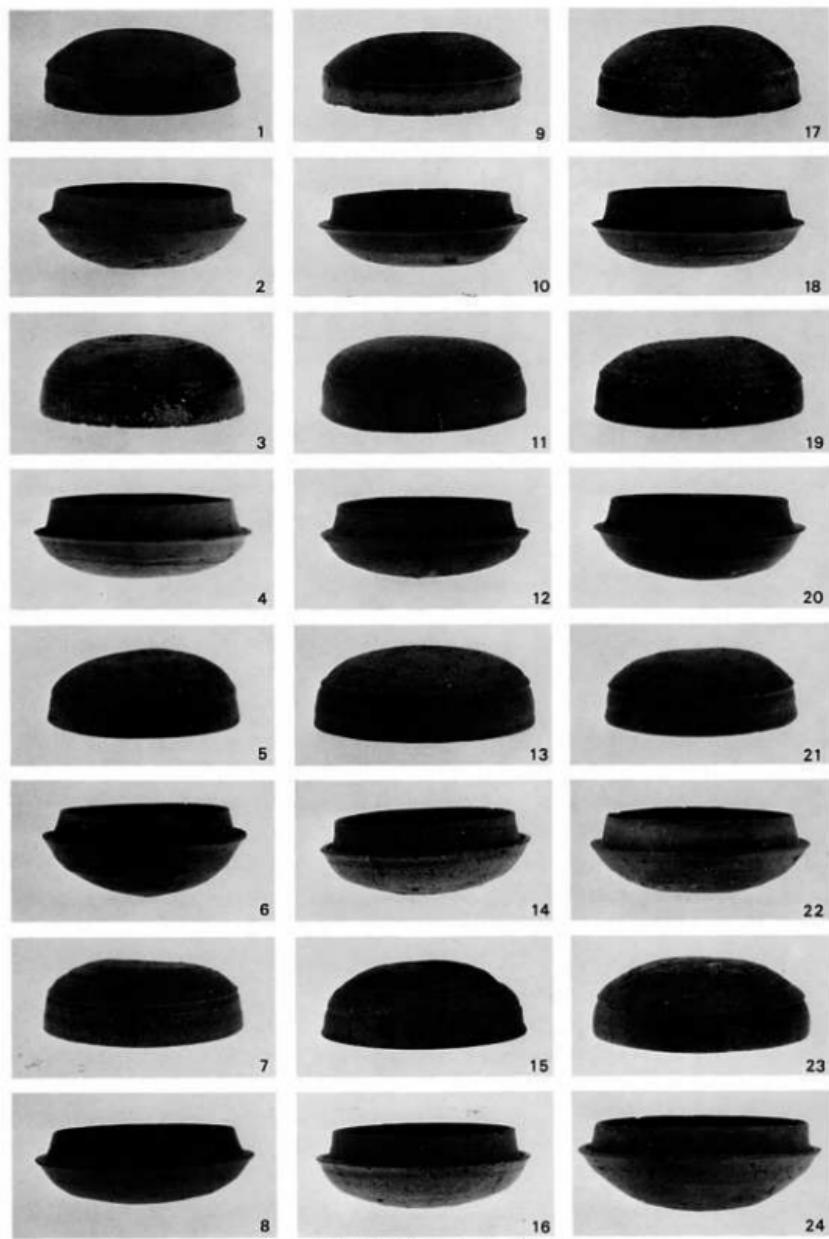




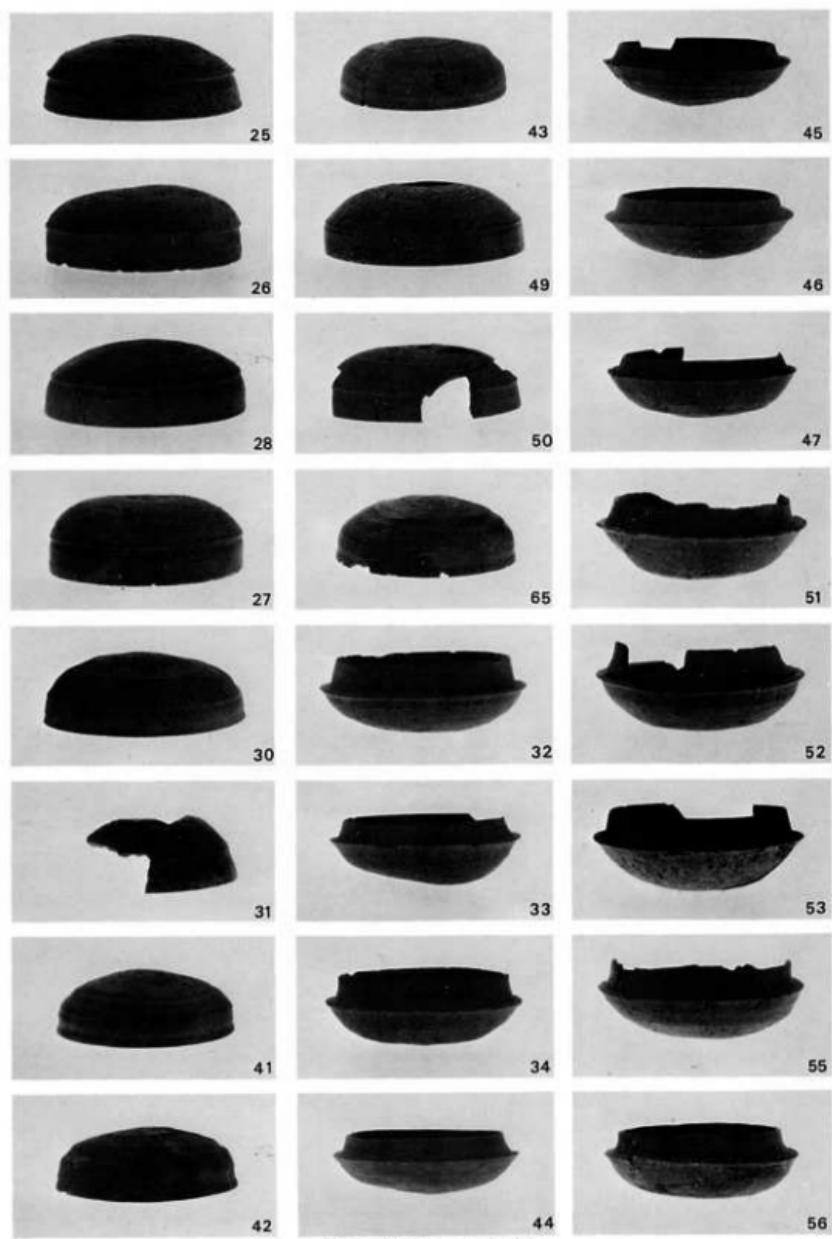
a SK 1 (東より)



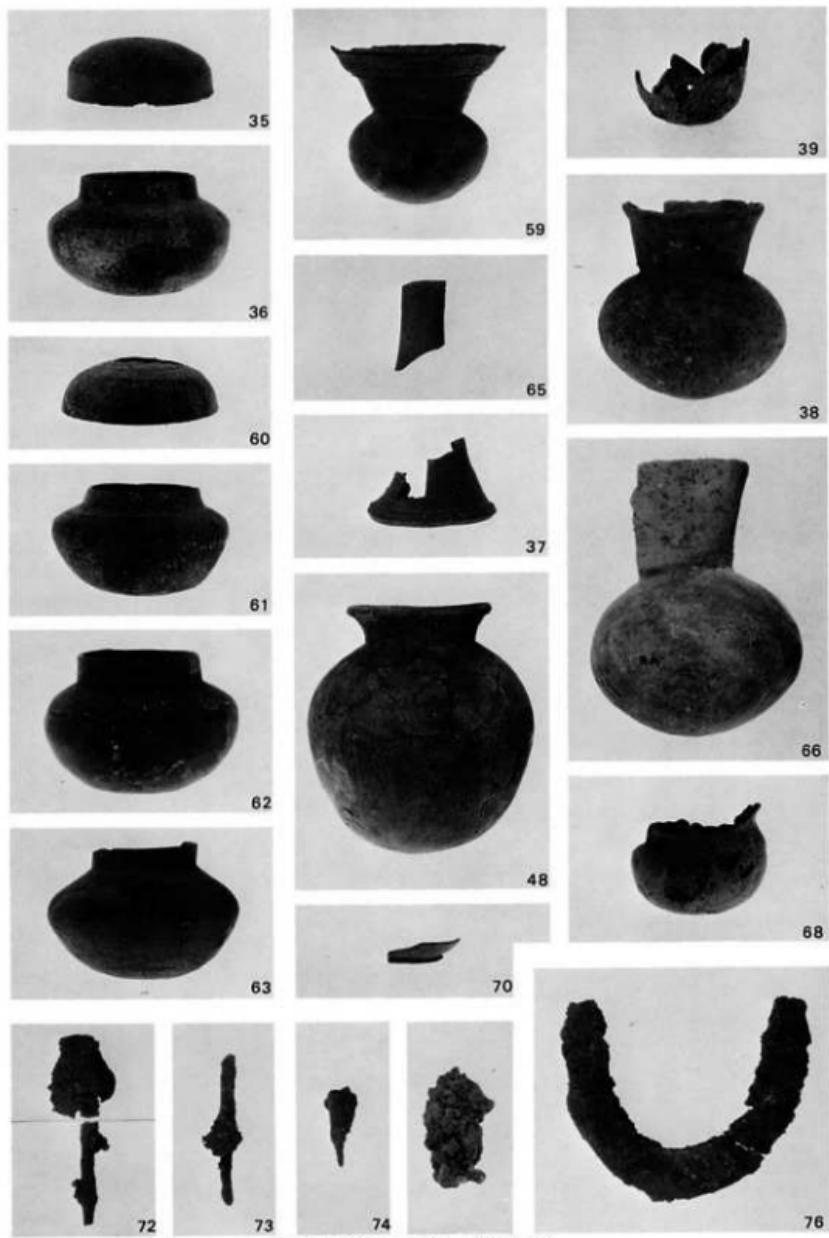
b SK 6 (南より)



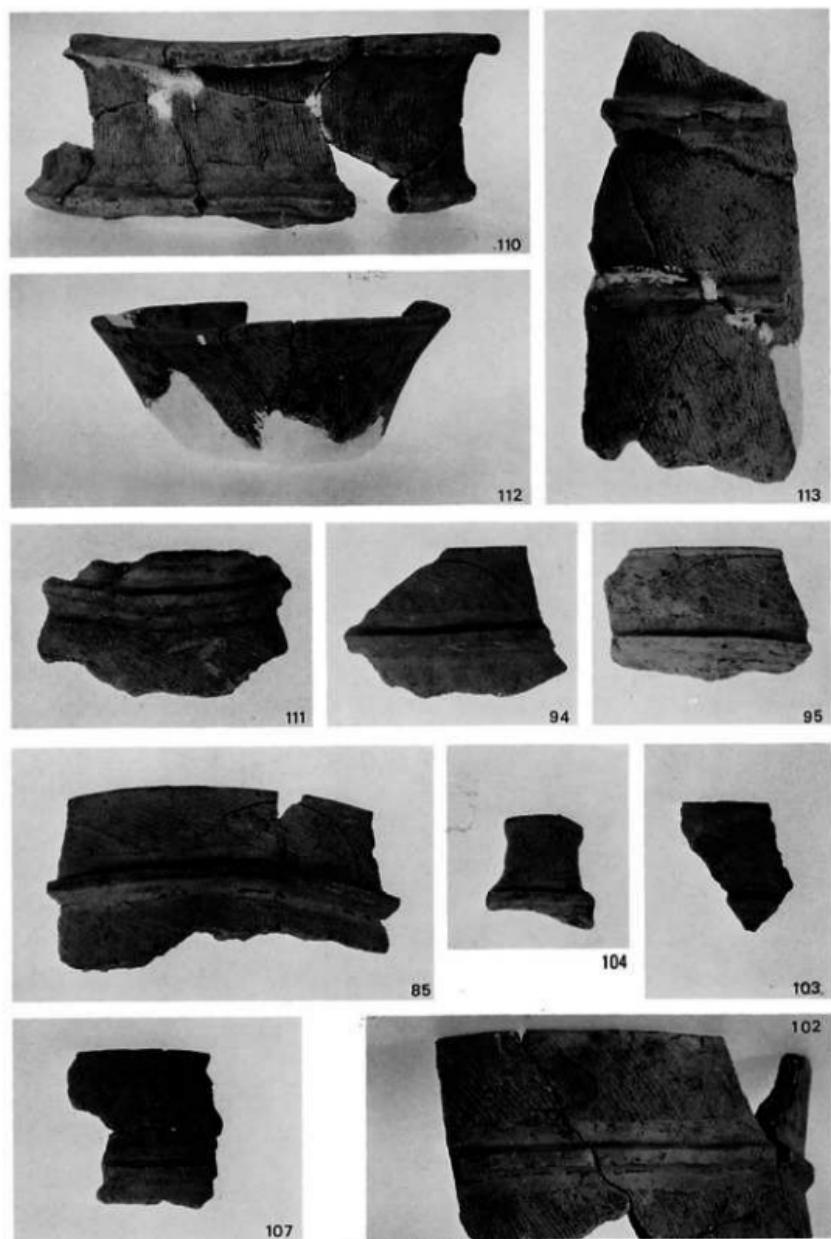
綠岩古墳出土土器 (1)



緑岩古墳出土土器 (2)



緑岩古墳出土土器・鉄器 (3)



綠岩古墳出土埴輪 (1)



77

綠岩古墳出土埴輪 (2)



78



79

綠岩古墳出土埴輪 (3)



80



81

緑岩古墳出土埴輪 (4)



82



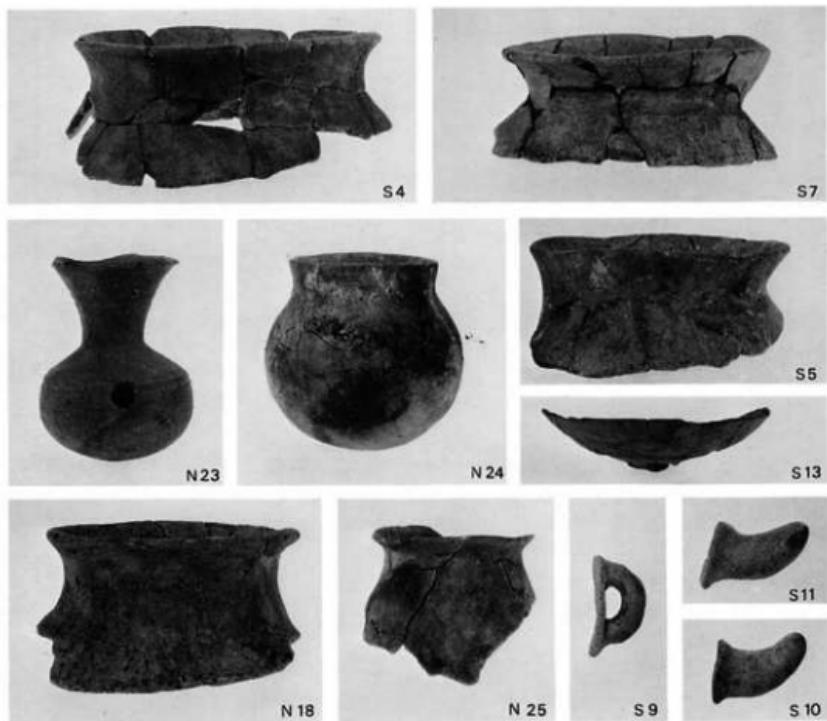
84



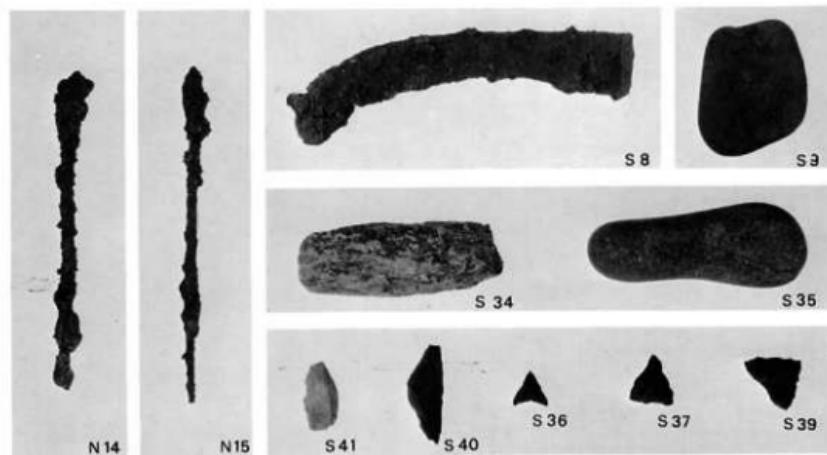
85

綠岩古墳出土埴輪 (5)

図版43



a 緑岩遺跡出土土器

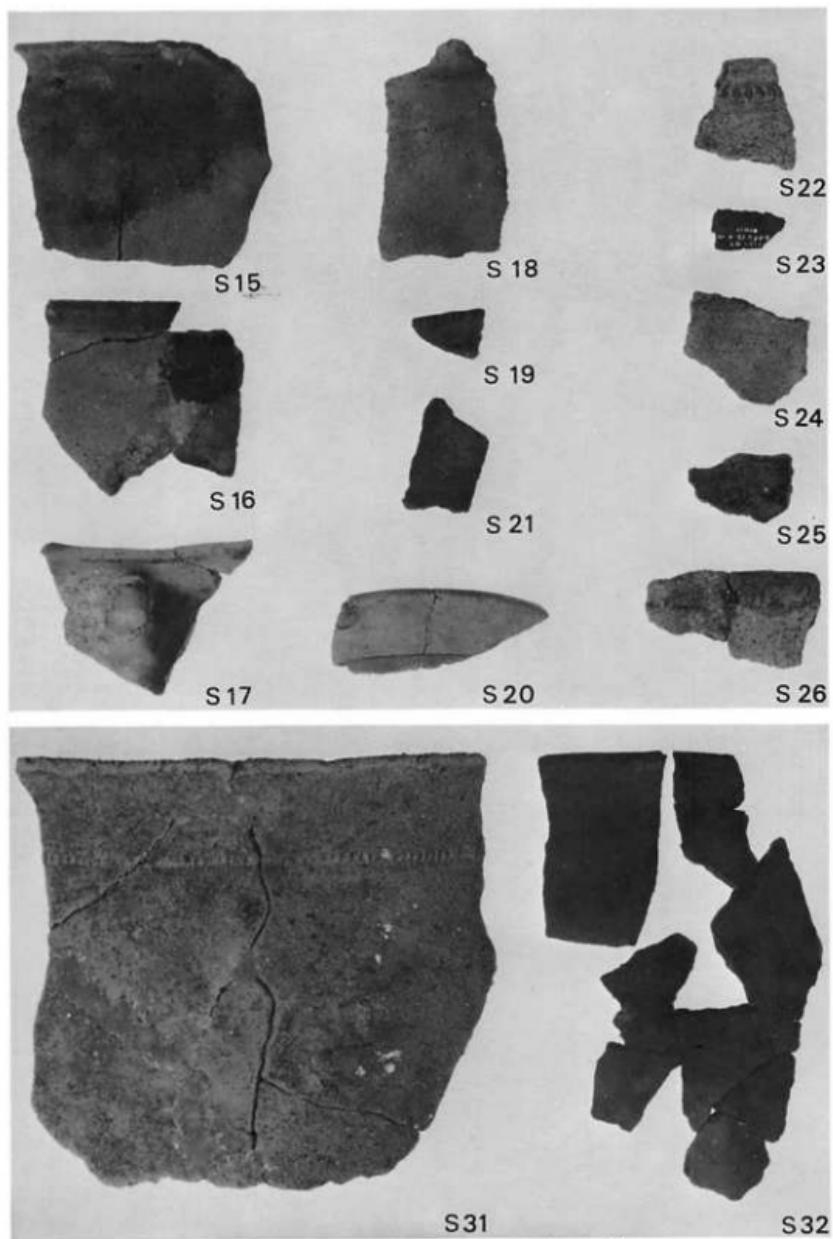


b 高蜂遺跡出土鉄器・石器 (Sは南区、Nは北区を示す)



高峰遺跡出土土器 (1) (Sは南区, Nは北区を示す)

図版45



高峰遺跡出土土器 (2) (Sは南区を示す)

縁 岩 古 墳

—三次地区工業団地第2期造成工事に  
伴う埋蔵文化財の発掘調査—

1983年3月

編集  
発行

広島県教育委員会

印刷

株式会社 柳盛社